

New Zealand

TRAMPING

- ・ もくじ
- ・ 序 章
- ・ 1章 トランピングの基礎知識
- ・ 2章 旅のヒント
- ・ 3章 コース・ガイド
- ・ 4章 ニュージーランドの温泉
- ・ 参考文献一覧

By 秋場 研

『ニュージーランド・トレッキング・ガイド』

P D F 版 version 2.5 ReadMe

製作 秋場 研

2001年1月2日 (2001年9月20日 一部変更)

=====

このページにはP D F 版についての補足説明と、作者への連絡先などが記載されています。

概要

ニュージーランドは、海外トレッキングのディスティネーションとして年々人気が高まっています。にもかかわらず個人で歩くための実用的な日本語情報はほとんどないのが現状。そこで、こんな本があったらなと考えながら、自分の体験を基に、ニュージーランドの山歩きのノウハウをまとめたのが『ニュージーランド・トレッキング・ガイド』です。もともとはD T P (Desk Top Publishing) でつくった紙媒体の自費製作出版物でした。そのソース・ファイルをデジタル化したのがこのP D F 版です。

過去に3回、合わせて1年2ヶ月ほどニュージーランドを旅していました。オートバイを使っていた時期もありましたが、基本的にはバックパッカーとしてお金をケチりながらの旅でした。そんな体験をベースにしていますので、この本もおもに貧乏旅行の観点で書いています。

ある意味、偏っているというか癖がある内容かもしれませんが、一般流通書物にはなり得ない中途半端なものですが、なにかの参考になれば幸いです。

なおトレッキング(トランピング)とは「泊りがけの山歩き」と考えていますので、この本ではいわゆるデイ・ウォークについては扱っていません。むしろちょっとヘビーなものを中心に考えています。その点ご了承ください。

免責

このファイルは1997年6月から10ヶ月間、また1999年2月から約2ヶ月間、2000年3月から2ヶ月間の個人的な旅行をもとに作成したニュージーランド・トレッキングのアドバイス集です。

あくまでも個人的な覚え書きが発展したものであって、正確な取材によるものではありません。市販の「ガイドブック」とは根本的に性質が異なりますのでご注意ください。

本書を利用することによっていかなる損害を受けようとも当方はその責任を負いません。

おことわり

本文中に宿の料金やバスの時刻などの記述がありますが、おおよその見当をつけてもらうためのもので、現在は変更になっている可能性があります。なお、当時のニュージーランド・ドルの為替レートは1997年から98年がNZ\$1=¥75、99年は¥65、2000年は53円でした。

ハイパーリンクについて

トップページと「もくじ」の各項目にはハイパーリンクが設定されています。クリックするとそのページに移動できます。同様に画面左に表示されている「しおり」もご利用ください。初期状態で「しおり」は閉じていますが、田をクリックすれば下の階層が開きます。なおトラック一覧表、トラック一覧地図、温泉一覧地図にもリンクが設定されています。

文章中に出てくるブルーで書かれたURLにはウェブサイトへのリンクを設定しています。インターネットに接続した端末をお使いの場合、クリックすると自動的にブラウザが起動して目的のウェブサイトが開きます。

著作権

このファイルの著作権は図表を含めてすべて作者である秋場研が保持しています。無断転載はご遠慮ください。原則的にフリーウェアですが、私的な個人間のコピーを除き、インターネットへの公開など不特定多数へ無断再配布はお断りします。またプリントアウトした印刷物としての再配布は原則として禁止します。詳しくはお問い合わせください。

サポート

本書の内容についての問い合わせはe-mailで受け付けています。また今後の改訂に向けて意見や感想、情報提供などもお待ちしております。

メールアドレス: akiba@nattou.com

本書の内容に準じた情報を提供するウェブサイトを公開しています。

<http://homepage2.nifty.com/treknz/>

製本版について

PDF版の元になった製本版、及びこのファイルを印刷・ファイリングしたものを、2001年9月20日現在、下記の場所に置いてもらっています。

- | | |
|-----------------------------|--|
| ・ニュージーランド大使館 | 東京都渋谷区神山20-40 |
| ・ニュージーランド政府観光局 | 東京都港区浜松町2丁目4番1号 世界貿易センタービル12階 |
| ・ニュージーランド政府観光局(大阪) | 大阪府中央区城見2-1-61 ツイン21ミッド・タワー28F |
| ・日本ワーキングホリデー協会(東京) | 東京都中野区中野4-1-1 サンプラザ7F |
| ・Te Anau YHA(ユースホステル) | 220-224 Milford Rd, Te Anau |
| ・Mountain House Backpackers | Main Rd, Arthurs Pass |
| ・Foley Towers Backpackers | 208 Kilmore st, Christchurch |
| ・Canterbury Central Library | Cnr Gloucester St & Oxford Tce, Christchurch |

もくじ

序章.....5

- 世界から注目されるNZのフィールド.....5
- NZのトレッキング=トランピング.....5
- ニュージーランド・トランピングの特色.....6
- すべては自己責任で.....6

第1章 トランピングの基礎.....7

- DOCについて.....7
- コースの分類.....7
- グレート・ウォーク.....7
- バックカントリー・トラック.....8
- ハット利用法.....8
- ハットのカテゴリー.....9
- 料金の払い方.....10
- ハット利用のマナー.....11
- 入山届 <Intention Card>11
- 無線通信.....13
- よりトランピングを知りひとは.....13

- 知っておきたいフィールドの危険.....14
 - 道に迷う.....14
 - 低体温症 Hypothermia.....15
 - ジアルディア.....16
 - 原発性アメーバ性髄膜脳炎.....16
 - 氷河.....16
 - リバー・クロッシング(渡渉).....17
 - オンガオンガ.....17
- トランピング計画の立て方.....18

- 情報収集と地形図.....19
 - 主な参考図書.....19
 - DOC.....20
 - 地形図・コンパス.....20
 - ビジターズ・ブック、ロコミ.....21
- トランピングに必要な道具.....21
 - グレート・ウォークを歩く場合.....21
 - バックカントリー・トラックの場合.....22
 - 山道具事情.....22

- パッキングのコツ.....29
- 服装.....29
 - 1日の中に四季がある - NZの気候.....29
 - ニュージーランドの定番ファッション.....29
 - 服装 ぼくの場合.....29
 - シャワー.....30
- 食料計画.....30
 - 軽量コンパクト?.....30
 - 食料調達はスーパーで.....31
 - 食料計画 ぼくの場合.....32
 - 調味料の持ち運び方.....32
 - 水事情.....33
 - 食器の洗い方.....34
 - ハットのヒーターで調理できるか?.....34

第2章 旅のヒント.....35

- まずはなによりガイドブック.....35
- 宿泊編35
 - ユースとバックパッカーズのちがい.....35
 - テントサイトの勧め.....36
 - バックパッカーズ 快適度の目安.....36
 - 予約について.....38
 - 盗難対策.....38
 - 洗濯.....39
 - フリーフード・コーナー.....40
 - 野宿.....40
- ショッピング編40
 - スーパーマーケットとのつきあい.....40
 - 生活雑貨はThe Warehouseへ.....41
 - セカンドハンド・ショップ.....41
- 移動編42
 - 車・モーターバイク.....42
 - 道路事情.....42
 - モーターバイクはマイナー.....42
 - バイクを買う.....42
 - 免許と排気量制限.....43
 - バイクの登録.....43
 - 保険.....43
 - 交通違反でつかまったとき.....43
 - 飲酒運転OK!?!.....44
 - バス・フェリー.....44
 - ヒッチハイク.....45
 - 自転車.....45

郵便局編46
日本へ封書は80¢でOK46
スモール・パーセル46
旅先での手紙の受け取り方46
郵便局でただでもらえるもの46
インターネット47

第3章 コースガイド.....49

Togariro Northern Circuit51
Lake Waikaremoana Track55
Abel Tasman Coast Track58
Travers-Sabine Circuit65
Harper Pass Route69
Waimakariri-Harman Pass Route78
Copland Track86
Rees-Dart Track90
Routeburn Track97
Milford Track101
Kepler Track107
Waitutu Tracks - South Coast Track114
Rakiura Track119

第4章 NZの温泉.....123

温泉で感染する病気123
-Summary-123
Hot Water Beach125
Te Aroha125
Kerosen Creek126
Hot Water Stream, Taupo126
Morere Hotsprings127
Ketetahi Hotsprings127
Maruia Springs128
Hurunui Hotsprings128
Otehake Hotsprings129
Julia Hut129
Welcome Flat Hot Pools130
その他の温泉131
Ngawha Springs131
Great Barrier Island131
Parakai131

Waiwera131
Miranda Hotsprings131
Te Puia Hotprings(Kawhia)131
Kaweka Hotsprings132
Tokaanu Thermal Park132
Hanmer Springs132
Cedar Flat132

参考文献一覧.....129

コラム

ハットで過ごした最悪の夜14
マックパック20
NZで潮干狩り22
ジアルディアと日本の検疫29
お気に入りの宿35
ハット・ワーデン86

序 章

《世界から注目される

ニュージーランドのフィールド》

特別に華々しいものがあるわけではないニュージーランド観光。その最大の魅力はやはり自然だ。通常のバックツアーで周るようなところだけでも感動的な風景を堪能できる。それをもう一步踏みこんで、道路の通っていない原生の世界へ分け入ったらどうだろうか。それがこれから書こうとしているトレッキングの世界だ。

ニュージーランドはトレッカーの間では世界的に有名な国だ。「地球の箱庭」といわれる変化に富んだ風景はもちろんのこと、国立公園整備が行き届き、気軽に大自然の中に踏み込めるのが大きな魅力になっている。

ニュージーランドでトレッキングは特別な趣味ではない。国民的レジャーといってもいいくらい日常のなもので、すこし街を出れば魅力的なフィールドがたくさん広がっており、ニュージーランド人は週末に気軽に山歩きに出かける。そんな手軽なものにもかからず、日本では考えられないくらいのダイナミックな景色が堪能できるのだ。

そんなニュージーランド・トレッキングの魅力と具体的方法を紹介していく。

《ニュージーランドのトレッキング＝トランピング》

トレッキング、バックパッキング、ブッシュ・ウォーキング、山歩きを指すいろんな言葉があるけど、ニュージーランドではトランピング Tramping といっている。

トレッキングというとヒマラヤのイメージが強いし、バックパッキングといったらアメリカのヒッピー文化を背負っている。

ここではトレッキングでもバックパッキングでもない、新しい概念としてトランピング Tramping という言葉を使っていきたい。

ニュージーランドでは、マウンテニアリング Mountaineering とトランピング Tramping をはっきり分

けている。おおざっぱにいってしまうと登攀と縦走のちがいといったところ。ニュージーランドの高山は万年雪と氷河におおわれているので、マウンテニアリングは季節を問わず登攀器具が必要な本格的な雪山登山になる。趣味というよりはむしろスポーツの領域だ。

一方トランピングは散歩の延長のようなもので、自然のなかで景色を楽しみましょうという軽いかんじ。そのコンセプトはトラック Track (日本という登山道) のコースどりにはっきり現われている。日本だと登山道はピークへ向かっているが、ニュージーランドのトラックはどれもみごとにピークを巻くように作られている。てっぺんを極めることが目的ではないからだ。

日本でバリバリの山女だったある女性が言っていた。「あんなにいいピークがあるのに、なんでわざわざ迂回しちゃうんだろう。川の渡渉とかドロとの戦いとかニュージーランドのトランピングってまるで探検ごっこね」。日本の登山になじんだ人はちょっと消化不良を感じるらしい。

ストイックな日本の登山からすれば軟派かもしれない。でもそれがいいんだとぼくは思う。「なにに山に登った」という日本でありがちな経歴主義にまったく興味がない。登山よりはむしろ「山歩き」が好きで、自然のなかでひとりでポツンといるときの開放感、すべてが自分にゆだねられているという状態が魅力を感じる。

だからニュージーランドのトランピングに出会ったときには、「これだ!」と思った。ニュージーランドのトランピングは自然の楽しみ方を最大限に教えてくれる。山に分け入ること、歩くことは苦しいことではない、そんな基本的なことを教えてくれるのがトランピングだ。

なおこの本のなかでは泊りがけで歩くコースをトランピングと呼んでいる。それ以外の日帰りコースはデイ・ウォークもしくはデイ・トリップと言って区別している。

《ニュージーランドトランピングの特色》

1. ダイナミックで変化に富んだフィールド

形も大きさも緯度もほとんど日本と変わらないニュージーランドだけど、その地形や景色のはば広さには驚かされる。ヒマラヤの5000m級の景色に匹敵すると言われている万年雪を頂いた山々、各地に点在する大小の氷河、火山地帯、エメラルドグリーン
の海、森の化石が沈む海岸、苔むした原生林、フィヨルド。小さい国土によくこれだけのものがあると感心するくらいにバラエティーに富んでいる。

トランピングは登山ではないので、山に限らずありとあらゆる自然景観を楽しめるよう、国中に無数のトレッキングコースが設定されている。人里離れた海岸に建つ小屋に泊まりながら、海水浴を楽しむトレッキングなんていうのもニュージーランドならではの楽しみ方かもしれない。

2. Hut to Hut テントなしで歩ける山

ニュージーランドには有名無名を含め、数え切れないほどのトラックがあって、そのほとんどに国設の山小屋(Hut)が設置されている。山小屋といっても一部を除いて管理人がいるわけではなく、日本でいう避難小屋みたいなものだ。しかしその質は高く、日本にありがちな「小汚い」イメージはない。雨水をためた水道とシンク、テーブル、いす、ベッド、マットレス、トイレ、薪のヒーターが整っている。

そんな気持ち良く使える小屋が、歩行時間にして4、5時間おきくらいにある。テントを持ち歩かなくていいというのはうれしい。日本で小屋泊まりというと、吐き気がするくらいのすし詰め状態を覚悟しなくちゃいけないけど、ニュージーランドでは利用者が自分ひとりだけということも珍しくない。これまではテント派だったけど、すっかりと小屋の魅力にとりつかれてしまった。

3. 危険な動物がいない

ニュージーランドには人に害を与える生き物がいない。熊がいなければヘビもいない。そもそも人が入るまえはコウモリ以外の哺乳動物はいなかったという。どこでも安心して歩けるし、なんの気兼ねもなくキャンプを楽しめる。

4. すごしやすい気候

真夏でも涼しく歩いていて不快な汗をかくことはあまりない。あくまでもさらっとしていて気分がいい。スマートなかたちで山を楽しめるのがうれしい。

《すべては自己責任で》

ニュージーランドでトランピングをするうえで自己責任<own risk>ということ覚えておいてほしい。

ニュージーランドのトラックは日本の感覚からするとある意味不親切だ。看板のたぐいは最初は不安に思うくらい少なく、必要最低限のものしかない。

川に橋がかかっていないこともよくある。たとえ危険地帯であっても柵で困うようなことはしていない。自分のことは自分で責任で勝手にやれということで口やかましく干渉してこないのだ。それがニュージーランド・フィールドの魅力でもあるわけだけど、やもすると過保護社会の日本の常識を引きずってとんでもない失敗をやらかしてしまう恐れもある。

この本で取り上げるコースにも危険な場所がいくつもある。たまたまぼくがコンディションの良いときに行ったから「簡単だった」と書いているだけで、実際はすごく危ないところもあるかもしれない。

慣れない外国で山に入る以上、ひとつの情報を鵜呑みにしないで、自分の足で十分に予備調査をすることが大切だ。

すべてが自分に託されているという意味においてニュージーランドの自然は厳しい。しかしその分、自分で何かをやり遂げたという喜びは大きい。いってみればニュージーランドは大人の遊び場だ。どうかそのあたりの自覚をしっかりとって、自分の技量にあった楽しみ方をしてほしい。

この本はあくまで、僕なりのニュージーランドの楽しみ方を紹介したヒント集にすぎない。決してマニュアルではない。主体的な判断をもって、正しく活用してもらうことを願っている。

第1章 トランピングの基礎

《DOCについて》

DOCの存在なしにはトランピング(トレッキング)は語れない。DOCは、Department of Conservationの略で、ドックとかディー・オー・シーと読む。日本語にすると国土保全局といった感じで、トランピング関連のことを一手に引き受けている国家機関だ。登山道 track や山小屋 hut の整備など国立公園関係のことはすべてこの役所が一括管理している。大きめの町にはたいていオフィスがあり、国立公園ベースの町にはビジター・センターを構えている。

DOCとの関わりは、まずトラック(トレッキング・コース)の情報収集からはじまる。名のとあったコースなら簡略地図入りのパンフレットが用意されている。50¢か\$1。どのコースを歩くにしても最低限これだけは手に入れておきたい。町にDOCオフィスがない場合は、ツーリスト・インフォメーション・センターで手に入る。

DOCオフィスの掲示板に張り出されているトラックコンディションや気象情報もチェックしておきたい。特に雨の多い地方では、道が封鎖されたり橋が流されたりすることが多いので、直前の情報収集は欠かせない。

そのほか、山小屋の宿泊券 ハット・チケット hut ticket の購入、入山届 インテンション・カード intention card の受け付け、また山小屋(ハット)についたらワーデン warden(小屋の管理人もしくはレンジャー)にお世話になったりと、DOCのシステムのなかでトランピングは進んでいく。

《コースの分類》

自然歩道や登山道などは国家機関のDOCが管理しており、そのランクが次のように定義されている。

[Path] よく整えられた歩道。車椅子でのアクセスも可能。年齢、体力に関係なく歩ける。

[Walking Track] よく整えられた歩道。ふつうの靴で問題なく歩ける。最低限自力で歩ける人向け。

[Tramping Track] ある程度の山歩きの経験が求められ、トレッキング・シューズの使用が望ましい。平均的な体力があるひと向け。

[Route] やや高度な能力が必要。地図とコンパスを使う能力が求められ、装備の整ったトランパー向け。

前のふたつはおもに遊歩道のランク付けで、この本で扱う範囲で関係してくるのは後者のトランピング・トラック <Tramping Track> とルート <Route> の違いだ。トラックは日本でいうところの登山道。それに対してルートとは基本的に地図上に示されるコースラインだけで、コンパスを頼りに自分でコースどりをしていくものをいう。実際はマーキングやスノーポール、石をつんだケルンなどがあって、おおむね地図なしでも歩ける。しかし霧などによっては文字通りコンパスだけが頼りになることもある。

日本の旅行ガイドブックで紹介されているコースは「トラック」がほとんどだ。場所によっては部分的に「ルート」を含むものもある。最初からコース名に < ~ Route> とついた場所は上級者向けと思ってまちがいない。

《グレート・ウォーク》

ニュージーランドには100を超えるトラックがあり、その距離の総計は数千キロにも及ぶ。なかでも人気の高い特にすばらしいといわれているコースは、グレート・ウォーク <Great Walks> に指定され、ニュージーランドでは特別の扱いをされている。全部で9つあるが、そのうちひとつはカヌーでの川下りのコースなのでここでは触れない。

北から順に、

- Lake Waikaremoana Track (北島)
- Tongariro Northern Circuit (北島)
- Abel Tasman Coast Track (以下南島)
- Heaphy Track
- Routeburn Track
- Milford Track



Kepler Track

Rakiura Track

とある。一般に日本で知られているコースのほとんどはこのグレート・ウォークだ。

これら以外のコースはバックカントリー・トラック <Backcountry Track> といって区別している。両者ではなにが違うのか？ 辛口に言ってしまうとグレート・ウォークは観光地化されている、といえるかもしれない。

グレート・ウォークの整備具合たるや驚くものがある。トラックの道幅は広く、凸凹ひとつないところすらある。日本の林道なんかよりだんぜん歩きやすい。ふつうにイメージする登山道とは明らかに違うっている。グレート・ウォークの代表・ミルフォード・トラックは「世界一きれいな散歩道」と言われているくらいだから、文句をいう筋合いはないけど、日本の山歩きのイメージでいくと、ちょっと違うぞ、と思うかもしれない。

とにかくトラックの整備状況がよく、不慣れな人でも無理なく歩けるといえるのは評価に値する。グレート・ウォークのハットはきれいで立派なところが多く、初めての人でもそれほど違和感なく泊まれるだろう。

グレート・ウォークのほとんどは、人気があるだけあってやはり、トラックからの景色と雰囲気はすばらしい。ニュージーランド・トランピングの、ひいては山歩きの入門用としては最適なコースだ。実際にニュージーランドではじめて山歩きをして、すっかりハマってしまったという人は少なくない。



《バックカントリー・トラック》

グレート・ウォーク以外のトラックを便宜上、バックカントリー・トラック Backcountry Track と呼んでいる。日本ではバックカントリー・トラックの情報がほとんど出回っていないので、これらは特殊なコースと思われがちだが、実際はこちらが標準で、むしろグレート・ウォークのほうがあらゆる意味で特殊だ。

バックカントリー・トラックは、グレート・ウォーク以上に歩きやすいコースから超難関のルートまで、バラエティーが広い。トランパーの力量に合わせて多彩なコースから選べるし、人の少なさも大きな魅力だ。グレート・ウォークでさえも日本の感覚からしたら人が少なく快適だが、バックカントリー・トラックになると、山小屋の宿泊客が自分一人ということも決して珍しくない。

ハット代も安いので、あるていど山歩きに慣れてた人だったら、グレート・ウォークにこだわらずに最初からバックカントリー・トラックに挑戦してみるのもいいかもしれない。

ニュージーランドの地形図を見ると、ルートやトラックの記載がまったくないような山奥にもたくさんのハットがあることに気づく。既存のコースにこだわらず、オリエンテーリングのように地図とコンパスを頼りにそういうハットを泊まり歩くという上級者の楽しみ方もある。

《ハット利用法》

ニュージーランド・トレッキングの魅力のひとつは、ハット Hut (山小屋) が充実にある。よっぽど変則的なことをしないかぎり、テントを持たない余裕のある山行を楽しめる。ハットのロケーションに

よっては、泊まることじたいを目的にしてもいいくらい魅力的な場所もたくさんある。

[ハットのカテゴリー]

DOCのハットは、設備のていどによって4段階のカテゴリーに分けられている。カテゴリー1がもっとも充実していて、カテゴリー4はシェルターに毛が生えたような雨風しのげるだけ小屋。グレート・ウォークのハットは、ほとんどがカテゴリー1で快適な作りになっているが、バックカントリー・トラックではカテゴリー2か3が多い。宿泊料金は原則としてカテゴリーごと決められている。

[カテゴリー1]

ベッド、マットレス、炊事台・シンク・水道、テーブル、ベンチなどに加えて、調理用ガス・ストーブ、ヒーター、水洗トイレ(たいてい紙付き)、ランタンなどが整っている。グレート・ウォーク・ハットのほとんどはこれに属する。宿泊費はおおむね\$15から\$30くらいまでで、コースによって異なる。グレート・ウォーク・ハットの場合は、事前に専用のハット・パス Great Walk Hut Passを購入しておく必要がある。後に書くアニュアル・ハットパス Annual Hut Passやハット・チケットは使えない。夏のあいだはワーデンが常駐していて、無線を通して気象情報などが得られる。冬は無人になり、ガスも止められてカテゴリー3になることがおおい。グレート・ウォーク以外のカテゴリー1ハットは、北島のコロマンデル

Coromandel にひとつ、南島のマウント・クック周辺の高山帯にいくつかあるだけで、この本で取り上げるコースの中には出てこない。また、国営ながら、今述べているバックカントリーハット・システムに則らない独自のシステムで運営される小屋もある。3章で出てくる Mueller Hut がそれにあたる。

[カテゴリー2]

ベッド+マットレス、炊事台・シンク・水道、テーブル、ベンチ、トイレ、ヒーターからなる。ヒーターの燃料は薪が基本で、自分で拾ってくる場合もあるし貯蔵庫に貯めてあることもある。場所によっては石炭が用意されている。調理用のガス・ストーブはないので、自分で携帯コンロを用意していく。人気のあるコースはワーデンが常駐していることがあり、毎朝気象情報を得られる。宿泊費は1泊\$10。

[カテゴリー3]

もっともベーシックなハット。ベッド+マットレス、炊事台、水道、トイレ、薪のヒーターがある。ちょっとマイナーなトラックではこれが標準だ。規模的にごんまりとしているところが多いけど、不自由なく快適に泊まれる。1泊\$5。

[カテゴリー4]

よっぽど辺鄙なところにはいかないとない。シェルターに毛が生えたようなもので、現役を引退した昔のハットであることが多い。ベッドが残っていることもあるけどマットレスは原則的にない。泊まるな

グレート・ウォークの宿泊料金一覧 (2000年2月現在)

Track	Summer Season		Premium Rates		Off Season	
	Huts	Campsites	Huts	Campsites	Dates	Huts Fee
Lake Waikaremoana	\$10.0	\$6.0	\$13.0	\$8.0	1 May-30 Sep	\$10/\$6
Tongariro Northern Circuit	\$12.0	\$6.0	\$15.0	\$8.0	1 Jun-22 Oct	\$8
Abel Tasman Coast	\$14.0	\$7.0	\$17.5	\$8.0	1 May-30 Sep	\$6
Heaphy	\$12.0	\$6.0	\$15.0	\$8.0	-	-
Routeburn	\$35.0	\$12.0	\$45.0	\$18.0	28 Apr-28 Oct	\$4
Milford	\$35.0	-	\$55.0	-	28 Apr-28 Oct	\$4
Kepler	\$15.0	\$6.0	\$20.0	\$8.0	28 Apr-28 Oct	\$4
Rakiura	\$8.0	\$6.0	\$10.0	\$8.0	-	-

* Premium Rates: 小屋でワーデンに料金を払う場合

* Abel Tasman Coast, Routeburn, Milford はサマーシーズン中には事前の予約が必要

らキャンプ用のロールマットを用意したほうがいいだろう。水道、トイレもない。近くの小川などを利用することになる。ぼくが見てきたカテゴリー4ハットは、どこもかなりボロボロであちこちに穴があいていて、室内に小動物の糞が散らばっていた。雨のときにはありがたいかもしれないけど、晴れていれば外でテントを張ったほうがマシというかんじだった。宿泊費は無料。

[その他]

地図を見ていると、シェルター Shelter やビヴィー Bivvy (ビヴォアック Bivouac ともいう) の記載に気づくことがある。これらは緊急避難用の施設で、シェルターは掘建て小屋、ビヴィーは天然の岩屋だ。(場所によっては狭いながら宿泊に耐える簡易山小屋のこともある) 雨天時の休憩場所には最適だけど、下は土間みたいなものだから泊まるにはロールマットが必携。できれば大きなビニールシートもあったほうが快適。ほとんどは屋根だけで扉がついているわけではないから、場所によってはサンドフライ sandfly (ブヨみたいな虫) がうるさい。

[料金の払い方]

山小屋に泊まる場合、原則的に出発前にDOCオフィスで必要なパス(チケット)を購入していくことになっている。

[グレートウォーク・ハットパス]

<Great Walks Hut Pass>

グレート・ウォークのハットは、カテゴリーにかかわらず、専用のハット・パスが必要だ。料金はトラックによって違う。購入場所はトラック近くのDOCオフィスや町のインフォメーション・センター。

近くのバックパッカーズで売っている場合もある。

ハット・パスは独特の形状をしていて、バックパックのストラップに通して見えるように常時ぶら下げておくことになっている。購入時に使用開始日と日数が書きこまれて、その期間が有効となる。買っておいて、出発を延期したりすると無駄になってしまう。有効期間まえだったら払い戻しが可能。

事前にパスを買わずに出発して、ハットでワーデンに直接料金を支払う場合、通常料金の約25%増しになるので注意。

ミルフォード・トラックは全面キャンプ禁止だが、その他のトラックはキャンプ泊できる所もある。ハットちかくにデザインされたキャンプサイトを利用するのがふつうだ。この場合もあらかじめグレート・ウォーク・キャンプ・パスを購入しておく。料金はハット代の半額くらいになる。トンガリロ・ノーザン・サーキット Tongariro Northern Circuit ではキャンプ・パス利用の場合でも、ハット内のキッチンやテーブルを使うことができた。そのつもりでルートバーン・トラック Routeburn Track へ行ったら、そこではハットに入ることさえ制限された。濡れた寝袋を干させてもらおうと思ったのだけど、「見るだけ。座ってもヒーターであったまってもダメ」といわれた。気の強そうな女性ワーデンだった。

なおミルフォード・トラックとルートバーン・トラックは1日の定員が決まっていて事前の予約が必須だ。1999年10月からはエイベルタズマン・コースト・トラックにも予約制が導入された。それ以外のトラックは予約は不要。事前に宿泊券を買って出かけるだけでいい。ただ、場合によっては泊り客がいっぱいでベッドを確保できないこともありうる。特に



グレート・ウォーク・ハットパス



アニュアル・ハットパス



ハット・チケット

人気の高い小屋は決まっているので、週末を避ける
とか早めの到着を心がけるなどの注意が必要だ。

[バックカントリー・ハット・チケット

<Backcountry Hut Tickets>]

グレート・ウォーク以外のハットに適用されるチ
ケットで、もっともベーシックなタイプ。1枚が\$5
で必要な枚数を買っておく。たとえばカテゴリー2
ハットに泊まる場合\$10だから、あらかじめ1泊あた
り2枚のチケットを買っておく。

ハットについたら、チケットの"DATE OF USE"の
欄2箇所の日付を書き入れて、半券のほうをハット
にあるチケットボックスに入れる。残ったほうは
バックパックのストラップにくくりつけて提示して
おく。これは無人のハットの場合で、ワーデンがい
ればチケットを直接渡せばいい。もしチケットをあ
らかじめ買っていなければ、エキストラ・チャージ
なしにその場で買うこともできる。

チケットの購入はDOCオフィスで。有効期限は
ないが、払い戻しは不可。

[アニュアル・ハットパス <Annual Hut Pass>]

1年間、ハットに泊まり放題のフリーパス。わず
か\$65で買える。泊まれるのはカテゴリー2以下の
バックカントリー・ハットのみ。バックカントリー・
トラックをいくつも歩こうと思っている人は購入を
検討してみるといい。またこのパスはカテゴリー1
ハットの周辺でテントを張る権利も含まれる。とい
うのは寝るのはテントでも、炊事やトイレなどは
ハットの設備を利用できるということなのだろう。
でも、カテゴリー1ハットのほとんどは万年雪が積
もった高山にある。滅多にキャンプで利用すること
はないと思う。なおふつうのバックカントリー・ト
ラックでのキャンプは無料。またこのアニュアル・
ハットパスはグレート・ウォークでは使えない。

[it does not guarantee a sleeping place]

ハット・パスやチケットにかならずこう書いてあ
る(除くルートバーン、ミルフォード、エイベルタ
ズマン・コースト・トラック)。つまりいくらチケッ
トを買っていても山小屋にベッドが空いている保
証はないということ。

ベッド数には限りがある。もし着いたときにすで
にいっぱいなら床やベンチで寝るしかない。そうな
らないためにハットの収容人数とその時期のハット

の利用状況をあらかじめ調べておくと安心だ。特に
混むトラックやハットは決まっている。ガイドブ
ックに載っている場合もあるけど、確実なのはDOC
で尋ねること。週末やニュージーランドの国民の休
日にあたっていないかの確認も大切だ。長く旅をし
ていると曜日感覚がなくなってくる。ぼくの場合、不
安があるときは、床で寝てもいいようにキャンプ用
のマットを持っていったり、なるべく早くハットに
到着するように心がけていた。

[ハット利用のマナー]

要は他の人のことを考えようということだけど、
念のため書いておく。

- ・汚れた土足で建物に入らない
- ・ゴミはかならず持ち帰る
- ・シンクに使った食器などを放置しない
- ・炊事台やテーブルを使用後は拭いておく
- ・遅くとも夜9時過ぎくらいには寝る人のために気を使う
- ・薪を使ったら次の人のために補充しておく
- ・室内は禁煙
- ・ハットを出るときには掃除をする(ほうきが備え付
けてある)
- ・朝早く出発するときにはなるべく静かにキッチンなど
でパッキングする。

《入山届 <Intention Card>》

ミルフォード・トラック、ルートバーン・トラッ
ク、エイベルタズマン・コースト・トラック以外の
コースは事前の予約や許可はいらない。しかしウェ
ストランド地方 Westland やアーサーズ・パス
Arthur's Pass 周辺、スチュワート島 Stewart Is-
land などトランピング条件の厳しいところでは入山
届 <Intention Card> の提出が求められている。

入山届けのフォームは、DOC ビジター・センター
の入り口あたりに提出ポストと一緒に置いてある。
必要事項を記入し、ポストに提出する。通し番号が
打たれた下部が、ミシン目にそって切り離せるので、
半券の方は携行していく。そして無事に帰ってきたら、
その半券をポストに入れて、無事に下山してきた
ことを報告する。トラックのスタートとエンドが
離れていてその場に戻ってこないときには、カード
を提出したDOCへ電話を入れる。忘れずに連絡を

ハットで過ごした最悪の夜

人が少なく静けさのなかで自然との対峙を楽しめるのがニュージーランド・トランピングのいいところ。しかしときとしてトランピング・クラブなどの集団に出くわして、ひどくうるさい思いをすることがある。ぼくは初めてのトランピングでそいつに遭遇してしまった。

場所は北島のレイク・ワイカレモアナ・トラック Lake Waikaremoana Track。グレートウオークのひとつだ。歩いたのは冬が終わったばかりの10月はじめで、どうかんがえてもまだトランピング・ハイシーズンではなかった。

1日目、2日目は順調だった。ハットで一緒になったパーティは2、3組。10人程度で、アットホームな雰囲気よかった。ところが問題は最後の夜に起きた。3時ごろ、ハットに到着すると、前日から泊まっているらしい高校生の男女5人組がいた。なんだかうるさそうだな、とちょっといやな予感がした。

しかしそんなうるささはかわいいもの。夕方になると、どこから湧いてきたのか、なんと52人のボーイスカウトの団がやってきたのだ。

ハットのベッド数は18。もちろん入りきるはずがない。幸いというかあたりまえというか、彼らはテントを持っていた。しかしいつしか外は雨。その52人が入れ替わり立ちかわりハットに出入りして、食事を作っては食べていく。ハットのなかは人がひしめき合っていて、ぼくは最上段に確保したベッドから降りることができなかった。

まあ、ハットは公共のものだし、ここまでは納得できるし我慢もする。でもそのあと我慢は限界は越えた。夜7時になると、52人全員がハットの中に集まった。入らないものを無理やり積みこんだという感じだ。

なにかと思ったら集会だった。キリスト教系の団体らしく、代表者の大人がイエス様がどうのこうのという話をしている。で、その後はみんなで合唱。やめてくれという感じだった。この狭いハットの中でなに考えているんだ。

こういう状況だからさっさと切り上げてくれればいいものを、
「それでは、今日は特別にみんなに新しい歌を教える。みんな聞きたいか？」

「オー」

という感じで、

「イエス様、あなたは愛。罪多き我々のために命をなげうたれた……」

とやりだした。

「それじゃあ、みんなで合唱だ！」

「……」

「ちがう、こうだ！ Oh my Jesus……」

こうしてレッスンは30分ちかく続いた。やるほうもやるほうだけど、ついていくほうもよくついていくなという感じだった。

ぼくは途中でアホらしくなって、残っていたバーボン全部飲み干してフテ寝に入った。そうしたら今度はぼくのすぐしたのベッドが尋常ではない様子。ゴソゴソと寝袋のしたでうごめく音と、キスの音。悩ましげな吐息。"No! Don't touch me." と甘ったるくささやく女の子。昨日から泊まっている高校生男女のうちの一組だ。片やありがたい歌を歌っていてと思ったら、そのうるさい合唱に紛れて……。

集会が終わると大人たちがハットのなかで酒を飲み出して、夜10時過ぎまで派手に騒いでいた。ガーリックと酒の匂いが不快だった。

夜中にをふと覚ますとベッドの下はまだうごめいていた。午前1時半だった。

翌朝、ぼくは逃げるように、夜明けと共にハットを飛び出した。その日は、荷物を預けていたモーターキャンプでゆっくり休もうと思っていたけど、どうやらあの団体も泊まるらしいと聞いたので、雨の中、むりやりモーターバイクでギズボンの町へと逃げた。

入れること。一日二日の遅れなら大丈夫だけど、下手すると捜索隊が出されてしまう。

インテンション・カードと共に大切なのは、ハットに備えつけのビジターズ・ブック<Visitor's Book>(Intention Book)への記帳だ。遭難時の足取りを追うときに重要になってくる。変則的に行動するときにはなるべく細かくプランを書きおきたい。

《無線通信》

アース・パス地方やウェストランド地方の主要なハットには、地元の国立公園ベースにつながる無線機が備えつけられている。小屋にワーデンがいなければ利用者みずからマイクを握って使うことができる。通常は朝9時ころから気象情報が流れるほか、提出してきたインテンション・カードの内容に変更が生じたときの報告、インテンションどおりに予定は進んでいるという安否の報告、もちろん緊急時の連絡にも使える。無線機の使い方や、呼び出しの方法は無線機の近くに掲示してある。

それとは別にニュージーランドにはマウンテン・レイディオ Mountain Radioというサービスがある。トランパーやハンターなどアウトドアで活動する人のための無線通信網で、携帯機をレンタルして使うのが一般的だ。主な利用は気象情報の入手だけど、危険な地域へ入るときの保険として持っていくことが多い。国中どこからでも基地局を呼び出せる。山中の他の人とも交信可能。無線機はバターの箱くらいの大きさで重さは約500グラム。周波数は南島で

3.261MHz、北島では3.345MHz、モードはUpper-SSBを使用している。周波数の関係上、数十メートルのワイヤーアンテナを張る必要があり、携帯電話のような気軽なかんじのものではない。レンタルは1日\$20ほど。たとえば危険で有名なダスキー・トラック Dusky Track を歩く場合などは強く携帯を勧められる。

《よりトランピングを知りひとは》

ニュージーランドには独特の自然条件やトラックやルートのコース取りの理念がある。そうしたニュージーランド・オリジナルの「トランピング」を知るには、「Bushcraft」(New Zealand Mountain Safety Council, \$16.50)という本が最適だ。サブタイトルに「OUTDOOR SKILLS FOR THE NZ BUSH」とあり、ニュージーランドの山歩きを基礎から解説している。日本で言うところの「アウトドア入門」といったかんじ。ボーイスカウトを対象としたようなところもあり、イラストが多くて読みやすい。

なかでも注目すべきは、川の渡渉方法の部分だろう。日本では沢登りのテクニックとも思われている川の渡渉も、ニュージーランドではトランピングのレベルでもちょっとマイナーなコースに行くときによく出くわす。危険を伴うテクニックなので、ここでは中途半端には触れないことにする。原書もしくは日本語の沢登りの本をあたってほしい。

この本はMOUNTAIN SAFETY MANUALシリーズのなかの一冊で、ほかに「Mountaincraft」や「Outdoor



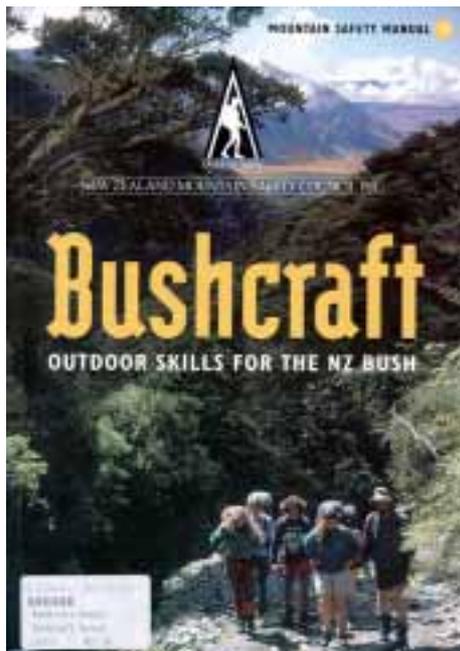
インテンション・カード



ビジターズ・ブック



Arther's Pass National Parkの Barker Hut にあった無線機



アウトドア入門書の Bushcraft

Fastaid" などがあり、本格登攀登山や野外での応急処置についても勉強できる。英語の練習を兼ねて目を通してみるのもいいと思う。このシリーズはふつうの本屋では扱っておらず、トランピング用品店やDOCで手に入る。

【知っておきたいフィールドの危険】

ニュージーランドは自然を楽しむためのお膳立てが整っていて、野山へ分け入ることの敷居がとても低い。それはトランピングがニュージーランドの国民的レジャーになっている所以でもあるわけだけど、決してニュージーランドのフィールドが人間に優しいわけではない。特に最初は案内板などの少なさに不安に思うこともあるだろう。

たとえば日帰りの気軽なハイキングコースやグレート・ウォークのようにピッチと整備された至れり尽くせりの部分もある。ところが、慣れるにしたがって少しずつ難しいコースに挑戦していくと、きつとある段階からパタッと突き放されるようなそんな印象を持つに違いない。ある意味、過保護の日本人にとっては厳しい一面があるのも事実だ。

そんなニュージーランドで山歩きを楽しむ上で気をつけるべきポイントをまとめた。ただあくまで自

分の経験で書いているだけなので、山の入門書などできちんと勉強されていくことを強く勧める。

《道に迷う》

整備がしっかりしているグレート・ウォークでは、ほとんど道に迷う心配はない。足もとをみればトラック（道筋）がはっきりしているから、ただそれにしたがって歩いていけばいい。

例外はエイベルタズマン・コースト・トラックとトンガリロ・ノーザンサーキットで、一部が砂浜や干潟、荒野でトラックのはっきりしない場所がある。100メートルおきくらいに目印のポールが立っているのでふつうは問題ないが、天気が悪くて見通しがきかないときは少し不安になるかもしれない。

バックカントリー・トラックの場合、グレート・ウォークに準じるくらいのしっかりとしたところもあるけど、基本的にはトラックが荒れていることが多いので、地形図とコンパスがあった方が安心できる。

特に迷いやすい部分は草原や河原から森林帯に入るポイント。どうしても歩いてしまう河原や草原には道筋がつけられていないことが多い。そういった場所を抜けて再び森のトラックに入るときに正規ルートを外れてしまうことがよくある。きちんとした地形図を持っていれば、河原と森林帯の境界などははっきり色分けして描かれているのでおおよその見当はつけられる。万全を期すならコンパス（シルバコンパスなど分度リングがついたものでないと意味がない）で進む方向をロックしておくで安心だ。

〔コンパスの使い方と磁北のズレ〕

コンパスの基本的な使い方は図に示したとおり。ただしこれは本当に「基本」であって、ニュージーランドで使う場合はさら磁北の補正が必要になる。というのは実際の北（地図上の北）と磁石の示す北というのはズレているので、磁石と併せて地図を使う場合はその補正が必要になるのだ。ニュージーランドの場合は東に約22°ずれている。正確な値は個々の地形図をみれば書いてあるが、コンパスの精度を考えれば「東偏22°」と覚えておいていいと思う。

具体的にいうなら、上図のリングを地図の北に合わせるときに、ふつうは真上が北だからリングのNを真上にすればいいのだけれど、東偏を考えると、東

コンパスの基本的な使い方

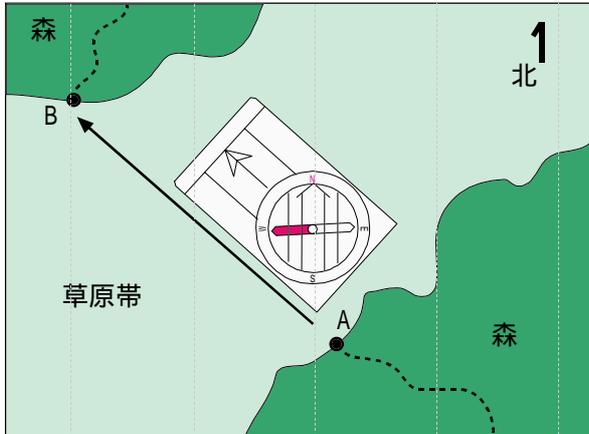
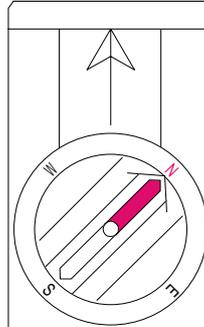


図1 地図上の進みたい方向にコンパスの矢印を向け、リングを回しNの方向を地図の北へ合わせる。

胸のあたりに持ち、針を合わせ、リングを回し、磁針の指す北と磁針の指す北を合わせる。

図2



トラックが寸断されているA点からB点までコンパスを頼りに進む場合。

まずA点で地図を広げ、図1のようにA点とB点を結ぶ線と平行にコンパスを当てる。(目的地の方向にコンパスの矢印を向ける)

次にコンパスは動かさずリングだけを回し、北(N)方向を地図の北に合わせる。これでコンパスの方位のセットはおしまい。

あとは地図をしまい、コンパスを胸のあたりで持ち体を回し、図2のようにリングの指す北と磁針の指す北を合う方向を向く。そのとき真正面の方向にB点がある。

© Ken AKIBA 1999

(右)に22°ずらした方向に向けるのが正しいということになる。できれば地形図にこの角度の直線(磁北線)を何本かひいておくとう便利だ。

多少、地図の読み方を知っている人への注意。南半球のニュージーランドでは日本と違って"東偏"だ。つまり"西偏"の日本と違って傾きが反対になる。ズレ具合も日本の倍以上に大きいので、うっかりミスに注意。(ちなみに日本は西偏7°くらい)

[ルートマーカ]

ふつうバックカントリー・トラックには正しい道筋を示すルートマーカと呼ばれる目印がつけられている。トラックが荒れていてわかりにくい場合などは、これを頼りに進んでいく。

森林帯では蛍光オレンジ色をしたプラスチックの三角形パネルが、数十メートルおきに木の幹などに付けられている。昔に整備されたコースだと白や赤の四角いブリキ板のこともある。基本的にはこれを追っていけば迷わないはずだけど、倒木でマーカがなくなっていたり、間隔がまばらで当てにならないことがあるのも事実。マーカがどこまでも続いていると過信しないで、地形図とコンパスで判断する癖をつけたい。

河原や森林限界を越えた場所では、石を積み上げたケルンがルートマーカとして使われることが多い。また高山帯ではスノーポールという背の高い細い

ポールが使われることもある。

また森林帯の出入り口や川の渡渉ポイントなどにはひときわ目立つようにおおきな蛍光オレンジのディスクが設置されていることが多い。

いずれにしてもルートマーカはあったらめっけもの程度に思っていた方がいい。

《低体温症 Hypothermia》

ニュージーランドでは毎年のように低体温症(Hypothermia:ハイポサーミア)による死亡者が出ている。ニュージーランドのフィールドでもっとも注意すべき危険性といえる。

低体温症とはひとことで言ってしまうと凍死の一手前状態。凍死というと雪山を想像しがちだけど、実際は装備に油断が生じる夏山でおきることが多い。

たとえば、夏だからと思ってTシャツ一枚で山に入ったとする。それは日帰りのデイ・ウォークだって構わない。それで道に迷ったり怪我をしたりして動けなくなったとしよう。夏でもニュージーランドの夜は寒い。それだけで十分に凍え死ぬ要因になる。それに加えて雨で体が濡れてしまったら致命的。体温がどんどん奪われて死に至る。実際にこういうケースが多い。

そうでなくてもありがちなのは雨具を着用するタイミングを逃したことからくる体温低下。これはば



ケルン(左)とルートマーカー(右ふたつ)
いちばん右のオレンジ色の三角形のマーカーがもっとも一般的

くも経験がある。トレッキング中、小雨がパラつき出したとき、いつ雨具を着込むか、そのタイミングは意外と難しい。もしかしたらすぐ止むかもしれない思っているうちに本降りになって、結局ぬれぬずみになってしまった、ということが何度かあった。

歩き続けていれば寒さはそれほど気にならない。ところが濡れたまま休憩で足を止めてしまうと急に寒気が襲ってくる。こうなってしまうと体温は下がる一方で、どこかで乾いた服に着替えなにかぎりなかなか快復しない。

雨をしのげる着替えられる場所があればいいけど、山の中でそう都合のいい場所はほとんどない。そこでぼくの場合は、急いで雨具を着込んで体温を落とさないよう、足を止めないで急ぎ足で次のハットを目指した。

これは一般に薦められるやり方ではないかもしれない。休みもせずに歩き続けることで、ますます体力は低下していく。順調にハットに着けばいいけど、悪天候に加えて焦る気持ちから、コースを間違えてハットにたどり着けない可能性もないとは言えない。その場合、寒さと疲労のピークで、低体温症としてはまさに危険な状態になってしまう。ぼくの場合はいつもテントとコンロを持ち歩いてきたから、いざとなればどうにでもなるという気持ちがあった。もしそれらがなく道に迷っていたら間違いなく死んでいたと思う。

とにかくウィルダネスに入り込むときは、常にそういう可能性を意識して最低限、防寒と雨対策を考えておくこと。そして雨具の着用は早めに。

《ジアルディア》

ジアルディアとはニュージーランドの川や湖などに潜む寄生虫の一種。ポッサムやネズミが媒介となってニュージーランド全土に広まっている。ジアルディアに汚染された水を飲むとジアルディア症を引き起こす可能性がある。そのため原則的にニュージーランドの河川湖沼の水を飲むときは浄水することが推奨されている。詳しいことは後述の「水事情」の項目を参照のこと。

《原発性アメーバ性髄膜脳炎》

ニュージーランドの天然温泉を通じて感染する致死率の極めて高い病気。ニュージーランドの温泉に行くと「顔を温泉に浸けるな」という看板を見ることがあるが、それはこの病気を予防するため。原因となるアメーバは鼻から感染して脳へ至ると考えられているので「顔を浸けるな」と警告されている。世界的にみても症例は少なく過度に恐れる必要はない。詳しくは4章で触れている。

《氷河》

ぼくは積雪時の山歩きの経験がほとんどない。だから、ニュージーランドへ行って夏でも雪をかぶった山々や氷河を目の前にしたときには正直に感動した。特に日本で見られない氷河の景色にはこの上ない魅力を感じた。

見ている分には不思議に美しい氷河でも、近づこうとすると危険きわまりない実体を現す。まずはターミナル(末端)部分に近づいたときには、落石



氷河はニュージーランドの山歩きでは
きわめて日常的な光景のひとつ



オンガオンガ Ongaonga
毒のあるイラクサ。葉ににある棘に触れると
痺れたようになる。

や崩落の危険、さらに山裾から氷河上に降りようとすると深く切れ込んだクレバスに落ち込む危険がある。氷河の上を歩くというのは誰もが一度は試してみたくなることだけど、素人が興味本位でやることではない。

トランピングのコースによっては、氷河のごく間近に迫れる場所がいくつもある。はやる気持ちはわかるけどくれぐれもご注意ください。

《リバー・クロッシング (渡渉)》

コースに川の渡渉があるかないかというのは、かなり地域差があって、近年DOCが力を入れて整備しているようなコースではちゃんと橋が架けられていることが多い。ごく軽いトランピングならあまり気にする必要もない。

ただアーサーズ・パス地方のトランピングなど、歴史的由来のあるコースでは、川をさかのぼって峠を越えるというスタイルが多い。そのため川の渡渉は必須になる。

これは状況判断が難しく危険性も高いため、なるべくきちんと沢登りの専門書などで勉強してほしい。最低限のことだけ書いておくと、

- ・あやしきは渡らず。水が引くのを待つのも重要な判断のひとつ。
- ・カーブ付近は深いので幅の広い直線部分を中心に渡渉場所を十分吟味する。
- ・転んだときのためにザックのウェストベルトなどははずす、もしくはゆるめる。
 - ・靴は脱がない。やってみればわかるけど重いザック

をしよって裸足で石ころの上を歩くのは難しい。

- ・渡る時は流れに逆らわず下流に向かって斜めにすり足で進む。

《オンガオンガ》

正式な英名はなんというのか知らないが、マオリ語でオンガオンガ Ongaongaと呼ばれるイラクサは毒を持つことで知られている。1メートルくらいの高さになる草で、葉っぱに毒を持った棘がある。この草の特徴は葉の縁だけではなく、中央の葉脈にそって角のように突き出た棘が並んでいること。この部分を見ればはっきりオンガオンガだと識別できる。

この棘に触れると、電気でしびれたような痛みを感じる。クラゲに刺された痛みに近いかもしれない。ぼくの場合は、特に腫れたりせず、刺さってから5分ほどしびれが続いて、その後自然によくなった。

ニュージーランド・トランピングの入門書 "Bushcraft" によると、患部を水で洗ってはいけなかつた。また茎の液を塗ると症状が緩和される場合もあると書かれていた。

ぼくの経験ではクラゲやアブ程度の感じで、それほど危険なものには思えなかつた。しかし、別の場所でオンガオンガに触れてしまったぼくの知人は1時間くらい不快な感じが残ったという。また "Bushcraft" では、「症状が重篤な場合は、手当のために山行の中止を考えた方がいい」という描写もあり、場合によっては危険なものなのかもしれない。

このオンガオンガはそれほどポピュラーな草ではないような気がする。実際に目にしたのは南島、ホキティカ Hokitika の内陸にある Styx River 沿いの

数力所だけだった。友人の看護婦が被害にあったのは、クライストチャーチにほどちかい Bunks Peninsula Track だった。そこには部分的にかなりの数が群生していたという。

【トランピング計画の立て方】

ニュージーランドはトレッキング先進国で、山に入るお膳立てが整っているとはいえ、やっぱり場所は外国。日本とはなにかと違うことが多い。最初はなかなか踏み込みにくいものかもしれない。思い立ってからスタートするまでの手順をまとめた。

歩くトラックの決定

まずは無数にあるニュージーランドのトランピング・トラックのどこを歩くかがはっきりしないと話が始まらない。残念ながら日本ではグレート・ウォーク・レベルのコースしか紹介されていないのが現状だ。

最初から、たとえばミルフォード・トラックが歩きたい、などと決まっていれば問題ない。そうでなければ「ニュージーランドハイキング案内」(滑田広志、山と溪谷社)や Lonely Planet 社の "Tramping in New Zealand" などが参考になる。あとで詳しく紹介するけど、前者はカラー写真が豊富でビジュアル的に楽しめる日本語の本。後者は実用的な情報が盛りだくさんの英語の本。どちらも日本国内で入手可能だ。

すでにニュージーランド国内にいる場合は、書店に行けばトランピングガイドブックが何冊もあるし、インフォメーション・センター、宿のアドバイス・ファイル、アウトドア関係雑誌など、さまざまな情報源がある。

ベースとなる町、宿の決定

どこを歩くか決まったら、次にそのトランピングのベースになる町について調べる。トラックはだいたい郊外からスタートするので、そこまでの交通手段が出ている最寄の町を探す。この場合、日本国内に居ながらできるのは先の "Tramping in New Zealand" を参考にするくらいしかない。

どこの町をベースにするか決める際に重要なチェックポイントは、その町に D O C オフィスがあ

るか、食料・燃料調達が可能か、ということだ。ニュージーランドで調べるならビジター・インフォメーション・センターで聞くのが早い。

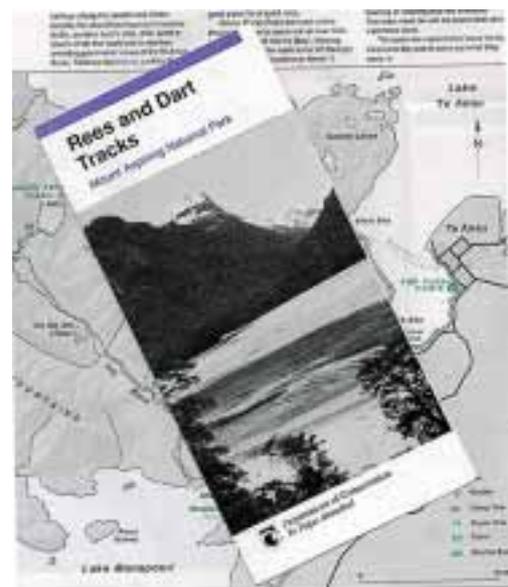
ぼくの場合、トランピングの前後1日はその町に滞在した。ハット・パスの購入、食料調達、こまかい情報収集のためだ。余分な荷物は宿に預けていく。たいてい無料で預かってくれる。宿によってはトラックの入り口まで無料で送り迎えしてくれるところもある。そういった情報は B B H という組織が出しているバックパッカーズ・ガイド(ブルーブック)で調べられる。

D O C で最新情報の入手

ベースになる町に着いたら D O C オフィスまたはビジターセンターに出向く。50¢ か \$1 で売られている公式のトラックガイドは必ず手に入れておきたい。そのほかチェックしておきたいことは、

- * トラックへのアクセス・交通手段
- * ハットの設備と料金、収容人数とその時期の利用頻度(ベッドの確保について)
- * 最新のトラックコンディション情報
- * 気象情報

といったことだ。泊まる小屋のカテゴリー、日数に応じてハット・チケットも購入しておく。また必要ならインテンション・カードを記入して提出する。



D O C の公式コースガイド

交通手段の予約

前日でもだいたい大丈夫。インフォメーション・センターを通すのが基本だけど、宿のレセプションでも手配してくれる。当日は宿までピックアップにきてくれることが多い。

【情報収集と地形図】

ニュージーランド・トレッキングについて日本語の情報はきわめて少ない。人気の高まりと共にこれからどんどん出てくると思うけど、ぼくが行ったときには現地の情報と口コミに頼るしかなかった。

《主な参考図書》

「ニュージーランドハイキング案内」（滑田広志、山と溪谷社、¥3900）

ニュージーランドを専門に撮っている写真家によるガイドブックで、豊富なカラー写真が魅力。現在唯一の日本語トランピング解説書でもある。扱っている範囲は有名どころから地元通ならではのマイナーなところまでとても広い。実際のトランピングで使うTopomap(地形図)をそのまま転載しているのも参考になる。ただしデイ・ウォークとガイド・ツアーを中心に書かれているのが残念。バックパッカーが単独で歩くための実用書としてはちょっと弱い。それでも写真集としてはニュージーランドの自然の魅力を余すことなく伝える最高の本。

「地球の歩き方 ニュージーランド」（ダイヤモンド・ビッグ社、¥1640）

言わずと知れた旅行ガイドの大御所。98～99年版からの大改訂でだいぶ使えるものになった。グレート・ウォークをはじめ有名なトラックはおおむね網羅されている。巻末にある「トレッキングの基礎知識」のページはコンパクトにまとまっている。

「Tramping in New Zealand」（Jim DuFresne, Lonely Planet, 1982, 1998, NZ\$34.95, ¥2900）

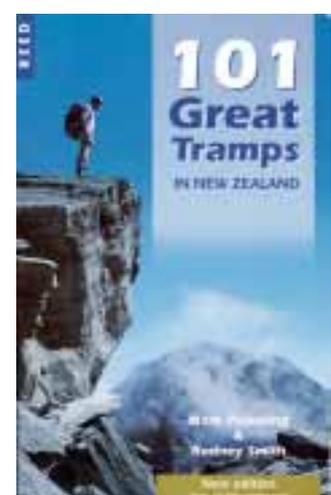
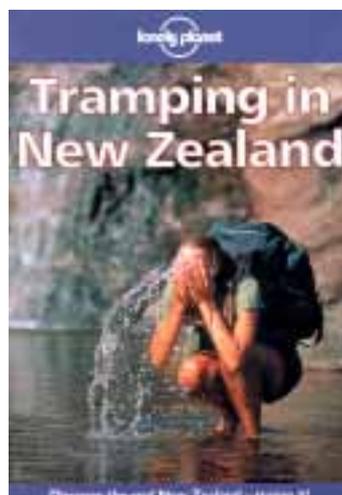
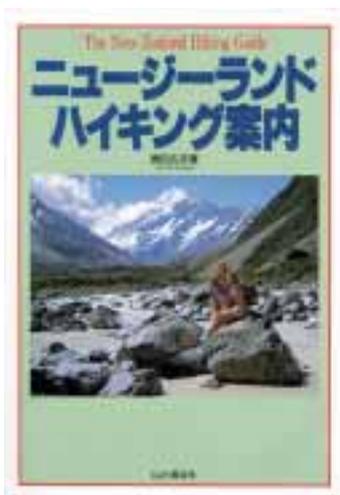
ぼくがもっともよりどころにしていた本。ニュージーランドに行けばいろんなトランピング・ガイドブックがあるけど、実際のトランパーが持っているのは圧倒的にこれが多かった。1998年11月に改訂版が出てより使いやすくなった。日本でも洋書屋で手に入る。

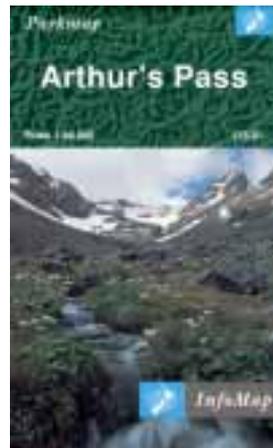
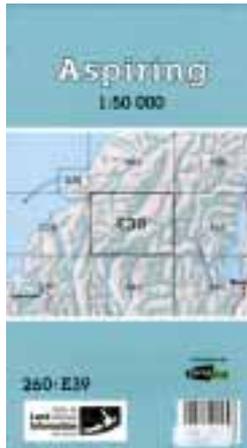
ニュージーランド旅行とトランピングの初歩的な解説からはじまって、50あまりのコースを紹介している。トラックまでの交通、ベースとなる町の説明、概略地図とコースタイムを含め、おおよそ1日ごとに詳しい行程や注意が書かれている。本格的にトランピングを楽しもうと思っている人なら必携の本。

今回の改訂版から地図に等高線が加えられた。別に地形図を買わなくてもだいぶトラックの様子をイメージできるようになったけど、おおざっぱであくまで参考にしかならない。

「101 Great Tramps in New Zealand」（Mark Pickering&Rodney Smith, Reed Publishing(NZ), 1991, 1998: \$29.95）

ニュージーランド国内で作られたガイドブックで、ローカルなコースが多数紹介されている。有名なト





Topomap(左)と国立公園のPark Map(右)。Park Mapはルートの大まかなコース取りやハットの収容人数などの情報も盛り込まれている。しかし等高線が甘く、地形が読みづらい。日本の国土地理院の地形図に相当するのがTopo Map。このほかグレート・ウォーク毎のTrack Mapというのがあり、コースタイムなども記載されている。

トラックはもちろんのこと、トラックとしては名前がついていないようなコースが多く紹介されていて興味深い。ロンリープラネットとちがって写真は多い。が、概略地図は載っていない。

雑誌「New Zealand Wilderness」 \$5.75

ニュージーランドには何冊かアウトドア関係の雑誌がある。なかでもこれがいちばんトランピング関連の記事が多いようだ。先に紹介した英語のガイドブックは文字ばかりで写真が少ない。その点こういう雑誌で視覚的に刺激されることも多い。ニュージーランド国内にいるのなら、わざわざ書店に行かなくてもバックパッカーズのリビングにバックナンバーが積み重ねてあることが多い。

《DOC》

DOC (Department of Conservation)は、国立公園やトラック、ハットなどを一挙に管轄している役所だ。ちょっとした大きさの町にはオフィスを構えており、国立公園ベースの町には資料館を併設したビジター・センターがある。

トラックごとの、簡単なコース概要が載った公式ガイドがリーフレットの形で手に入る。ふつうは\$1。どんなに簡単なトラックを歩くのでも最低限これだけは熟読しておきたい。トラックとして整備されている場所ならほとんどのコースのものが用意されている。

トラックのコンディションは常に変化している。大雨でトラックが閉鎖されたりすることもあり、そういった最新の情報もDOCで入手できる。特に危険情報や、気象情報は入り口あたりに掲示してある場合が多い。英語がわからないからなどと躊躇する

ことなく、自分の安全のために辞書を持ってでもDOCのオフィスに顔を出すべきだ。

《地形図・コンパス》

地形図はあるにこしたことはないが、グレート・ウォークのトランピングであれば、整備状況がいいので特に必要となる場面はほとんどないだろう。DOCで\$1で売っている簡略図のついたプロシユアで十分だ。

コンパスについては、グレート・ウォークであっても、たとえばトンガリロ・ノーザン・サーキットはガスがかかってしまうと、殺伐とした荒野のなかで目印のポールを見失う可能性がある。そんなときコンパスがあればDOCのプロシユアの簡略地図と合わせて有効に使える。かさばるものではないし、基本装備として持っておきたい。(使い方を知っているというのが前提)

ニュージーランドの地形図(Topomap)は印刷がカラフルで眺めていて楽しい。しかし値段が高い。1枚\$12前後。縮尺は5万分の1で、用紙サイズが大きいので山の中で広げるのはちょっとたいへん。ぼくはよっぽど興味があった地域か、実力的に不安があるコースしか買わなかった。地形図は大きな街の本屋で手に入るけど、地方ではDOCのオフィスが確実。ツーリスト・インフォメーション・センターに置いてあることもある。

日本ではぼくの知るかぎり東京神田の三省堂書店で扱っている。Topomapが一枚¥1,300。必ずしもすべての区域が置いてあるわけではないので在庫確認してから出かけたほうがいい。

インターネットを通して買うという手段もある。

ニュージーランドのTerralink Map Shopというウェブサイトでニュージーランドの地図、トランピング関連書籍のオンラインショッピングができる。URLは、

<http://marketplace.xtra.co.nz/cgi-bin/terralink.storefront>

《ビジターズ・ブック、口コミ》

どこかトラックを歩こうと思ったら、おのずとベースになる町が決まってくる。余裕があったら、その町のコース hostel やバックパッカーズを何軒かまわってみるといい。

宿のリビングに置いてあるビジターズ・ブック(ゲストの寄書帳)をめくってみると、トランピング帰りの人のコメントが見つかる。やはりランパーの生の声は参考になる。日本人のコメントを読み取ればコース・hostel がいちばん確率が高い。

特にトランピングのメッカ、テ・アナウ Te Anau のコースの場合、20年以上前からのビジターズ・ブックが保存されているので、その情報量たるや相当のものがある。シーズンも半ば過ぎにいけば、その年の新鮮な情報が得られるだろう。ただし、書き手によってトラックの印象はずいぶん違うものだから、ひとつを鵜呑みにせず時間のゆるすかぎりいろんな意見を読むことを薦める。

またそうした宿に泊まるのであれば、夕食時など人が集まるときに積極的に人にあたってみるのもいい。いろんな人に声をかけてみれば、かならず1人

や2人トランピング帰りの人がいるものだ。

先のテ・アナウ・ユースホステルの場合、ミルフォードやルートバーン帰りの人が連日のように打ち上げなどで盛り上がっているからすぐわかる。また、宿の庭でテントを張っているような人ならランパーである可能性は高い。

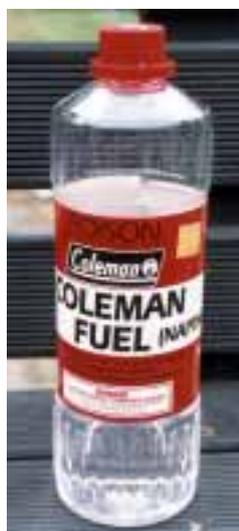
【トランピングに必要な道具】

トランピング(小屋泊まり)には基本的に次のような道具が必要になる。

- ・ザック (Backpack)
- ・寝袋 (Sleeping bag)
- ・レイン・ウェア (Waterproof clothing)
- ・懐中電灯 (Flashlight/Torch)
- ・トレッキング・シューズ (Trekking Boots)
- ・キャンプ用コンロ (Cooking Stove)
- ・コッヘル類(ナベ) (Billy/pot)
- ・ライター/マッチ (Lighter/match)
- ・虫除け (Insect Repellent)
- ・日焼け止め (Sunscreen)
- ・トイレトペーパー (Toilet Paper)
- ・ろうそく (Candle)
- ・水筒 (Water Bottle)

[グレート・ウォークを歩く場合]

ほとんどのハットに炊事用のガス・ストーブが用意されているのでコンロを持参する必要はない(夏場のみ)。ただしコッヘル(ナベ)と着火用ライターは必要。グレートウォークでもエイベル・タズマン・



NZで一般的なKOVEAのガス・ストーブ(左)と、コールマンの燃料用ホワイトガソリン(右)。ペットボトル入りで売っている。上の写真は日本とはデザインの違うプリムスのカートリッジ。

コースト・トラック Abel Tasman Coast Track とラキウラ・トラック Rakiura Track にはガス・ストーブが用意されていないので注意。

基本的にハット（山小屋）からハットを泊まり歩くことになるので、テントも必要ない。ミルフォード・トラック Milford Track 以外はテント泊で歩くこともできるけど、ニュージーランド・トランピングの楽しみのひとつは「快適な山小屋で過ごす時間」にあると思うので、日本でテント派の人でも小屋を利用してみることを勧める。ついでながら貧乏くさいことをいわせてもらおうと、ルートバーン・トラック Routeburn Track は小屋代がべらぼうに高いので3分の1の値段ですむテントサイトをぼくは利用した。

[バックカントリー・トラックの場合]

特別に整備されているグレート・ウォークと違って、バックカントリー・トラックの小屋は本当にベーシック。調理用ストーブは要持参。名の通ったコースならちゃんと小屋があってベッド+マットレスが整っている。でもあえてマイナーな場所に行こうとすると、キャンプ用ロールマットやテントも必要になってくることもある。

《山道具事情》

ニュージーランドはアウトドアの先進国ともいわれるが、キャンプ道具などは日本のほうが安いし種類も多い。相場はだいたい日本の定価くらいとあっていい。日本の大手の登山用品店が1~2割引で売っていることを考えるとやっぱり高い。基本的なものは日本から持参したほうがいいだろう。

参考までに、ニュージーランドの道具事情と、トランピングを含め、ぼくが「旅」に使っていたもの

を紹介しておく。

[ストーブ]

ニュージーランドでは EPI/PRIMUS ピッチのカートリッジ式ガス・ストーブが一般的。日本でいうなら IWATANI PRIMUS、EPI、SNOW PEAK など一般に普及しているメーカーのものと互換性がある。現地を買うならコベア KOVEA という韓国ブランド製が比較的安い。いろんなタイプがあるけど、ハット内で使うのだから風防のついていないいちばん安いもので十分。おおむね\$30 くらい。日本では、チタン材を用いたりストーブの小型軽量化戦線が激しい。でもニュージーランドでそんなたいそうな代物は見かけなかった。

カートリッジはトランピングのベースになるような町ならたいてい手に入る。しかし僻地では値段が高いので、大きな街で買っておくほうが賢明だ。煮物を作るなんていうんじゃないかぎり1回の行程（3泊くらい）で230g カートリッジ1缶あれば足りる。もちろん勝手がわからないうちは念のため予備を持っていくこと。1缶\$5 前後。プリムス製だけは\$9 となぜか高い。

ガソリン・ストーブも使われているけど、もっぱらドイツ人やアメリカ人など海外からの人に多いようだ。ホワイトガソリンは1リットルのペットボトル入りで手に入る。現地では一般名称としてホワイト・スピリッツ White Sprits といっている。コルマン製がトランピング・ショップで売られているが、他にガソリンスタンド (Petrol Station) ならどこでもオリジナルブランドのものが置いてある。\$6 くらい。ハードウェアショップ (金物屋もしくはホームセンター) でも売っている。手に入りやすさの点ではガスより便利かも知れない。やわなペットボト



Harper Pass Route の Hope Kiwi Lodge にて



Kelly Range
Waimakariri-Harman Pass Route

ルのままでの持ち運びは危険。専用の燃料ボトルを別途用意したい。安くはないけどシグヤトランギア、マルキルのボトルが手に入る。

ヘビーにトランピングを楽しむのでない限り、手軽に使えるメンテナンスフリーのガス・ストーブで十分だと思う。ご飯を炊くときも弱火も利く。もし1週間以上の長期のトランピングの場合やヘビーに楽しむのなら、かさばらなくて燃費のいいガソリンの方が便利だ。

灯油<Kerosene>やアルコール<Methylated Spirits>も同様にペットボトル入りで買える。海外からのトランパーにはトランギア社のアルコールバーナーを利用している人が意外と多かった。

〔ビリー(コッヘル)〕

つくる食事の料理にもよるけど、ぼくの場合はご飯+おかず、もしくは野菜たっぷりのラーメンというパターンが多かった。ふつうは1.2リットルと0.8リットルくらいの標準的なコッヘルセットで十分はず。日本から持っていかさばるので現地調達した。新品だと\$50近くするがセカンドハンドショップ(古道具屋)で\$12で購入した。

日本で流行っているチタン製コッヘルなんぞはニュージーランドではお目にかからなかった。むこうの人はこまかい重量はあまり気にしないらしく、平気で家庭用ステンレス鍋を持ってきたりする。荷物の軽量化にこだわりたい人は日本でどうぞ。

〔靴〕

ニュージーランドが舞台になっている映画「The Piano」(邦題はピアノレッスン)を見た人ならわかると思うけど、元来ニュージーランドは「泥の大地」だった。町にいる分にはわからないけど、一步山へ分け入るとぬかるんでいる場所がいっぱいある。

雨が降ると小川と化すトラックも多いし、ちょっとつっこんだトランピングになると橋が架かっていない川を渡ることが多く、靴の防水性はあまり意味がなくなってくる。ニュージーランド流トランピングでは靴のまま川を渡るのがふつう。向こうへいったら「靴の中をドライに保つ」という考えは捨てたほうがいい。

もしニュージーランドへ行くのを機に山靴を買い換えようと思っているなら、へんに立派な革靴を買うのではなく、安いナイロン製がベストだと思う。

マックパック



ニュージーランドには世界に市場を持つふたつのアウトドア・ブランドがある。マックパック Macpacとフェアリーダウン Fairydawn、どちらも実績のある登山装備(ザック、テント、シュラフ、ウェア)のメーカーだ。

特に世界で初めてエベレストに登頂したエドモンド・ヒラリーをサポートしたフェアリーダウンは広く世界に知られている。1998年にはヒラリー卿の息子の Peter Hillary の南極遠征を支えた。このときは同じ時期に日本人の大場満郎も徒歩とスキーで南極大陸の単独横断をしていたので、注目した人も多かったと思う。

世界的知名度ではフェアリーダウンにかなわないが、ニュージーランド国内ではマックパックの方が優勢のようだ。ザックの雨蓋部分はモアイのような、古代エジプトの彫像のようなフォルムで、精錬されたとはいえない独特の形をしている。最初はダサイとしか思わなかったけど次第にそれらにひかれるようになってきた。最初はあの安っぽいデザインのロゴマーク(2000年以前の古いやつ)に不信感すらあったが、ハット・ワーズンや経験を積んだトランパー(いわゆる experienced trumper)の多くが使っているのを見て、次第にイメージが変わってきた。

日本に帰ってきたあと、以前から50リットルくらいのザックがほしいと思っていた僕はマックパックの中型ザックを手に入れた。ザックだけは日本に輸入されているのだ。

これをついで夏の北海道を旅した。先々で出会う旅人たちには少なからずニュージーランド経験者がいて、ぼくのザックに気づくとすぐに声をかけてきた。マックパックはニュージーランド・トランピングの象徴、そんな共通意識がどこかであるらしい。なかには同時期にNZを旅していて人もいて、話してみるとあちこちですれ違っていたことが分かったりして、懐かしい思い出話でおおいに盛り上がった。

どっちみち濡れるなら乾きが速いほうがいいというわけだ。革だと手入れもめんどくさい。

アーサーズ・パス Arther's Pass 地方で連チャンでトランピングを楽しんでいたときは、毎日のように川を渡っていたので、靴は2週間以上濡れっぱなしだった。そんなことを繰り返したおかげでゴアテックス+全皮革の靴はボロボロになってしまった。

ただ、本格的な山岳コースを歩くときにはアッパーのしっかりした革製でよかったと思った場面もあった。いずれにせよ靴は事前に十分履き慣らしておくことが重要。

〔バックパック〕

バックパックはトランピングのみならず、ニュージーランドの旅自体でも使うので重要なアイテムだ。ふつうに使うのであれば50か65リットルくらいが適当だと思う。

ぼくはカリマーの74リットルを使っていた。日本を立つときから帰るときまで荷物はこれ1個。テントと寝袋をいれても、だいぶ余裕があって、トランピングのときはいつもつい多めにお酒なんかを入れてしまった。もっと小さくてもよかったと思う。

ジッパーで開け閉めするものより、雨蓋をコンプレッションで締めつけるタイプのほうが荷物の加減がしやすい。ジッパータイプは南京錠をつけられるメリットがあるけど、ニュージーランドでそこまで厳重に荷物管理をしている人はあまりいない。

現地で新たに調達しようというのなら、ディスカウント・ショップのザ・ウェアハウス<The Warehouse>などで\$100以下でも買えるけど、それを使っていたぼくの友人は、トランピングの最中いきなりショルダーストラップの留め具が割れた。場合によっては致命的なことにもなり得るので、山道具はあまりケチらないほうがいい。

ニュージーランド製の信頼できるザックメーカーにマックパック<Macpac>とフェアリーダウン<Fairydawn>がある。特にマックパックのザックはDOCの職員のほとんどが愛用していて信頼性が高い。どちらのメーカーの製品も独特の防水性のあるキャンバス地を使っていて日本からすると珍しい。そのほかリーズナブルな価格なら<Great Outdoor>とか<Tika>などをよく見かけた。

〔テント〕

ニュージーランドは国設の快適な山小屋(Hut)が充

実している。日本の山小屋のようなすし詰め状態というのはめったにないから、あえてテントを持っていくメリットは少ない。

有名なトラックについて言えば、たとえばルートバーン・トラックはハット代が\$35に対してテント代が\$12だからまあ利用価値はある。ケプラー・トラックはハット代が\$15でテントは\$6。指定されたキャンプサイトは中途半端な位置関係にあるので、なるべくハットを利用したほうがいいと思う。グレート・ウォークのなかでもマイナーなラキウラ・トラックにもなるとハット代\$8でテント代が\$6なので、まあキャンプで周るのはよっぽどの物好きだけかなという気がする。ミルフォード・トラックはキャンプ全面禁止だから論外。

ぼくはニュージーランドの山小屋の雰囲気が好きで基本的には小屋を利用している。でも「トラック」ではなく「ルート」など、難易度の高いコースを歩くときは非常用の意味でテントは必ず持参していた。

テントがなければあと半ダースはビールを持っていったのに、とか思ってしまうけど、たとえハットにたどり着けなくてもどこでも泊まれるという安心感は大い。山は原則的に何が起こるかわからない場所だから、できるかぎりテントは基本装備と考えたいと思っている。

いつもザックに入れて日常的に持ち運ぶなら、それなりに軽量コンパクトなものを選びたい。となるとレジャー用より山岳テントのほうに軍配があがる。耐風性や強度はやや劣るもののツーリング用のテントにも軽量でいいものがある。この場合値段が安いのが大きな魅力。

ニュージーランドでにも本格的な山岳テントは手に入るけど、日本のに比べるとどうも収納サイズが大きいような気がする。軽量コンパクトといえば日本のお家芸。日本製のテント、もしくは日本で流通しているタイプのほうが優秀かもしれない。種類も多いし値段も安い。必要ならテントは日本から用意していくべきもののひとつとっていいと思う。

町で宿がわりに使うなら

第2章で触れるが、山よりむしろ普通の旅の宿泊費を浮かせる手段としてテントは有用だ。長期で旅をするならぜひ持っていたいもののひとつ。

その用途に限るならテントはどんなものでもかまわない。ディスカウント・ストアで売られているよ

うな5千円程度のものでも実用になる。ただし収納サイズが大きいのでザックに詰めて移動するのは難しいかもしれない。

〔寝袋(スリーピング・バック)〕

トランピングにかぎらず、ニュージーランドの旅には寝袋は必携だ。ユース・ホステルはともかく、バックパッカーズでは寝袋持参が基本になっている。どこかの町でフラット(アパート)を借りて暮ら

すにも寝袋があればスムーズに行く。よっぽど定住型の暮らしを考えているのでないかぎりかならず必要になると思っていい。かさばるけど選択の幅を考えたら日本から持参したほうがいいだろう。

一般に3シーズンのもので十分とされている。しかし真冬のクライストチャーチで暮らすには化繊の3シーズンではきつかった。そのときはフラットに住んでいたのだけど、ホット・ウォーター・ボトル(湯

ニュージーランドで潮干狩り

ニュージーランド人はあまり魚介類を食べないせいか、採れるところでは山のように貝が採れる。たとえばエイベル・タズマン。コーストトラックのAwaroa Bayでは引潮のときに砂を掘ると砂よりたくさんの二枚貝が出てくる。主にコックルス cocklesと呼ばれる3、4センチくらいの膨らんだ円い貝だ。オレンジ色の長方形っぽい形をしたピピ pipi という貝も出てくる。ふつうは砂抜きなしですぐ食べられる。

このふたつの貝はニュージーランドではとてもポピュラーで、干潟や遠浅の海などいるところには信じられないくらいのが群生している。他にざっと思い出すとコロマンデル半島のTuatapere、ゴールドン・ベイのCollingwood、スチュアート・アイランドのNorth Arm Hutの近くなどでバケツに何杯分も採った。保存のきく佃煮にしてしばらく持ち歩いたりもした。

マッスル(ムール貝)もきわめて一般的。こちらはスーパーでも売っている貝だけど、海の岩場に行くと必ずといっていいほど岩にたくさんへばり付いている。売っているような大きいサイズのもののは採りにくい波打ち際に多い。

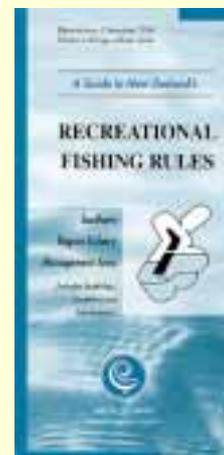
なんといってもNZならではの貝といったらパウア Pauaだ。日本語ではアワビ。日本では誰もが目の色を変えるアワビでも、ほとんどのニュージーランド人は無関心。南島の都会クライストチャーチ近くの海でさえアワビがゴロゴロと眠っている。

ちょっと海に顔をつける覚悟があれば確実に採れる。人のあまり来ない場所なら、引潮を狙ってほとんど拾い物感覚で採ることも不可能じゃない。たとえばカイコウラが有名。ここではユースの目の前の海でアワビが採れるという。ぼくはずこし離れたシール・コロニーのあたりで1時間に7個のアワビを見つけた。

その外、北島のHicks Bayやスチュアート・アイランド、Waitutu Track、ケトリンズ・コースト、クライストチャーチ近くの某所などでアワビを採った。

日本のような漁業権などというわけ分からないものはないけど、自然保護の観点から、採ってもいいサイズと数が決まっているので注意が必要。コックルスとピピはそれぞれ150個まで。サイズ規定はなし。アワビは10個まで。サイズは2種類あって、岩から剥がしたときの足が黒いふつうのやつは、殻の長いほうの径で測って125ミリ。黄色いやつは80ミリ。DOCの指導によると岩からはがす前にスケールで確認するようにとのこと。

そのほか、通称キャッツ・アイと呼ばれる真っ黒なつるつとした巻貝もおいしい。味はサザエそのもの。岩にへばりついているトコブシのような貝も味はアワビのようでおいしい。でも火を通さずに食べるとあまりの渋みに泣きを見る。



フィッシング・ルールというのが定められていて、採ってよい貝のサイズ、数が細かく決まっている。



(左) 耐熱性の水筒
(右) 虫除け剤各種

たんぼ)をいれても明け方には寒さで目を覚ました。参考までに書いておくと、日本製でモンベルのパロウバック#3というタイプ。使用3年以上のシロモノで、新品なら大丈夫だったかもしれない。

夏場だけの旅行であっても、トランピングでは5以下になることがあるので、極端に薄いものは避けたほうがいい。

〔スリーピング・マット〕

テント泊の必需品。マットレスがないカテゴリ4以下のハットに泊まる場合も用意していきたい。現地のアウトドア・ショップやディスカウント・ショップで\$12くらいで手に入る。

〔水筒〕

パッキングに注意すればペットボトルでも十分。あまり汗をかくような気候ではないので、たくさんはいらない。ぼくは750ccのマルキルの水筒と、500ccのペットボトルを持ち歩いていた。ハットや指定されたキャンプサイトには水道(天水だけどふつうはそのまま飲める)があるので、行動時間分の水さえ確保しておけばOK。500ccや750ccのミネラルウォーターが売られているので、そのボトルを繰り返し使うのが経済的。

場所によっては川の水を煮沸して使わなくてはいけないハットもある。そんなとき、沸かした水をすぐに移しかえることができる耐熱性の水筒があると便利だ。今はプラスチックの折りたたみ式水筒で便利なものが出ている。実際使ってみたが、耐熱性、耐久性は十分で、軽いし値段も高くはないのでお勧め。

〔食器類〕

基本的にはコッヘルから直接食べていた。友達何

人かと歩いたときにはプラスチックの食器を用意した。トランピング用品店でもシェラカップや器を売っている。でもそんな高いものを買う必要はない。セカンドハンドの店に行くと、いりとりどりのプラスチックのカップやボールが\$1や\$2で買える。

トレッキングの食料は、その手軽さからインスタント・ヌードルが多くなる。そんなとき箸があると便利。ニュージーランドでもどこかしらで手に入るけど、心配なら日本から持っていったほうがいい。

ぼくが持ち歩いていたカトラリーは、スプーンとナイフと箸。ナイフというのはテーブル用のやつだ。パンにバターやジャムを塗るのに使う。ふつうの刃物のナイフでも十分じゃないかと思うかもしれないけど、実はこれは「貝採り」用に最適なのだ。海岸沿いを歩くトラックではたいていアワビが採れる。それをこじるのに使う。それをふつうの刃物でやったら折れかねないし、メンテナンスが面倒くさい。

〔ナイフ・まな板〕

ナイフはスイス・アーミーなどのツールナイフが便利だ。ニュージーランドでは缶きりとワインオープナーが意外と活躍する。山にかぎらず、宿でも切れない包丁が多いので、ナイフの出番は多い。それを考えるともうちょっと刃渡りがあったほうが便利かもしれない。

ハットで野菜を刻むとき、まな板があったほうがいい。欧米の人たちは平気でステンレスの調理台やコッヘルのふたで野菜を切っていたけど、そんなことしたらいっぺんで刃がつぶれてしまう。

ぼくはひろげた牛乳パックをまな板がわりに使っていた。それを木のテーブルの上、もしくは朝刊を

重ねたくらいの新聞紙のうえに載せて使えばナイフをいためない。それでも1年にもわたる旅行であれば、小さい砥石は必要だと感じた。

〔虫除け<Insect Repellent>〕

ニュージーランドにはサンドフライという蚊のようなタチの悪い虫がいっぱいいる。慣れないうちはこいつに食われるとガツンという痛みを感じて、あとは狂おしいカユミがつづく。体質にもよるけど2週間くらいカユミと跡が残る。無意識のうちに搔いていつのまにか血が出ているということがよくある。

このサンドフライは、いるところにはいるし、いないところにはいないから不思議だ。いくら木がうっそうとしたじめじめした場所であっても街中ではまず見かけない。それでいて山の森林限界を超えたところにもいる。また日没過ぎるとあまり活動しなくなるようだ。

虫除けは日本製はあまり効かないので現地のものに限る。ケミスト(薬店)やトランピング・ショップで\$12前後で買える。有効成分のDEET(ディート)の濃度によって何種類がある。濃い方が効果が強いけど皮膚が弱い人には加減が必要。

スティックタイプ、ローションタイプなどいろんなものがあって、経済的にはローション、手軽さならスプレーがいい。ローションの場合、塗ったあとの手をきちんと洗うこと。DEETにはプラスチックを溶かす作用があるので、ペンを握ると指紋の跡がべっとりついたりする。コンタクトレンズなんかを触った日には致命的だ。

ついでにいうとサンドフライに蚊取り線香は効かない。テントに入り込んだ場合、ロウソクの炎を近づけると自ら飛び込んで自滅する。

〔日焼け止め〕

ニュージーランドに1年いたときにはまったく気にならなかった。でも2回目に真夏のニュージーランドにいきなり行ったらひどい日焼けに悩まされた。トランピングをはじめて2日目くらいには耳や腕に水ぶくれができた。南極にちかいニュージーランドはオゾンホールの影響で特に紫外線が強い。甘く見るとあとが辛い。

〔ロウソク・ライト〕

グレート・ウォークの一部では、ハット・ワーデンがランタンを灯してくれるところもある。でも基本的には明かりは自分で用意していく。



懐中電灯は基本だ。トイレに行くときや、ちょっとザックをのぞくときにも絶対に必要になる。グループでひとつではなく1人1つは持っているべき。大げさなものはいらない。単三電池2本使うようなもので十分だ。ぼくはミニマグライトを使っている。長めの紐をつけて、夕方すぎになるといつも首から下げていた。夜になったら常時手元においておきたい。ヘッドランプのほうが便利らしいけど、頭につけるといのがうざったくてぼくは使っていない。

山小屋でくつろぐことを考えたらロウソクも持っていききたい。食事や読書、日記を付けるにはライトの無機質な光より、揺れるロウソクの明かりの方がよく似合う。ハットのテーブルに座ってロウソクの明かりの下で食事をしたり、手紙を書いたりするのはいいものだ。とっても贅沢な気持ちになれる。この時間を過ごしたくてトランピングに出かけて行くのも事実。

ロウソクを使ったミニ・ランタンのようなものも売っているけど、小屋にはロウソク立てやその代わりになるワインの空き瓶があるからむき出しのロウソクで十分。

ただ、トランピング・ハイシーズンの12月から1月は日が長い。日没が夜9時すぎで10時ちかくまで明るい。この時期にはロウソクはいらない。むしろ明るいなかでいかに寝つくかというのが問題になる。ロウソクを買うならアウトドア・ショップより、町のスーパーのほうが安い。

〔雨具〕

非常に重要なアイテム。トランピングのメッカ、フィヨルドランド地方は非常に雨が多い。氷河で有名なウェストランド地方も同様で、トランピングに限らずニュージーランドを旅しようと思ったら雨具

を常時携帯するくらいの気持ちがいい。

レイン・ウェアというとゴア・テックス素材のものが最高峰といわれている。日本で買って上下セットで二万円から三万円もする高級品だけど、トランピングをしながら長期でニュージーランドを旅しようと思ったら買うだけの価値はある。

雨具というと雨の時に使うと思いがちだけど、防水透湿性のゴア・テックスの場合、蒸れが少ないので天気に限らず日常的に使える。寒かったときの上着として、ウィンドブレーカとしてなど。いざ雨に見舞われたら本格的な雨具として機能するから心強い。

ニュージーランドは大陸から離れた海洋性の気候で、気象の変化が激しい。朝晴れていても急に雨が降ったり時として夏でも雪が降ったりする。オールパーパスに使えるレインジャケットを常時持っていたい。

ちなみに雨具というと日本では傘だけど、ニュージーランド人は日常生活でもなぜかあまり傘を使わない。ちょっとした雨ならまったく気にしないで平気で歩いている。あまりにひどいときはレイン・コートのようなものを羽織ることもあるけど。そんなわけでニュージーランドでは折りたたみ傘は手に入りにくい。必要な人は日本から持って行った方がいいかも。

ニュージーランド製のゴアテックス・レインウェアもあるけど、雪山で使うようなしっかりしすぎているものばかり。軽量でザックのかたすみに入れておくようなものを望むなら日本製(モンベルなど)がいちばん。

〔サンダル〕

これがあるなしでだいぶ気分がちがう。ハットでのくつろぎを考えたら絶対に欠かせない小道具だ。数ドルで売っているビーチサンダルで十分。できれば靴下をはいたままはけるスリッパタイプがベスト。サンドフライは不思議と足首を狙って刺してくるのでそのガードとして。

〔洗面・身の回り品〕

ぼくが持っていたのは、石鹸・日本手ぬぐい・髭剃り・歯ブラシ・歯磨き粉・トイレトペーパー・プラスチックのコップ・洗濯洗剤・洗濯バサミといったところだ。

まずバスタオルはいらない。かさばるし、乾きが



ニュージーランドの便利商品、パッカライナー。ザックの中身を丸ごと包んでしまおうというもの。完全な防水を期待できる。

遅い。タオル1本あれば十分だ。体を洗うときに物足りなさを感じるけど、ぼくは日本手ぬぐいがけっこう使えると思っている。タオル以上にかさばらないし、ぶら下げておけば数時間で乾いてしまう。

石鹸。これひとつですべてをこなす。体を洗う、髪を洗う、髭剃り、洗濯。どこでも手に入るし、安いしこれがいちばん。髪が痛むという意見もあるけど、ぼくは不具合を感じたことはない。

あとちょっと便利なのが、プラスチックのコップ。これはトランピング用にセカンドハンドの店で\$1くらいで買った。宿に泊まっているときも洗面用に非常に重宝した。どこかに連泊する場合、コップに歯ブラシを立ててテントの隅にでもおいておけば、朝晩ガサゴソと探し回らなくていい。まあ、なくてもちっとも困ものではないけど。

あと重要なのはトイレトペーパー。不思議なことにニュージーランドの家庭にはティッシュ・ペーパーというものが常備されておらず、みんな家のなかで鼻をかむにもポケットのハンカチを使っている。そんな事情があつてか、ニュージーランドではポケット・ティッシュは手に入りにくい。そこでトイレトペーパーの出番となる。山では食器を洗うのにも使う。

〔デイ・パック〕

トランピングというより、旅する上であると便利だ。宿に荷物を置いてデイウォークや買い物に必要。小さく折りたためるデイ・パックも売られている。しかし実際のバックパッカーの姿を見ていると、移動

のときは食料などを詰めておなかの部分にしょって歩いている人が多かった。体のまえうしろにザックがあるわけで、想像すると奇妙なかんじがする。でも一般的なやり方らしく実際はそれほど違和感がない。

《パッキングのコツ》

おさらい程度にざっと書いておく。ふつうは寝袋をいちばん下に詰めて、ついで衣類、ストーブ・コッヘル類、食料と入れていく。原則は重いものはザックの上の方、背中寄りに詰めること。もちろんそれは原則で、使用頻度の高いものを取り出しやすいところに入れておく。たとえば雨具や水筒など。小物類 - カメラやザックカバー、ライト、行動食 - は雨蓋のポケットに入れておくといい。パッキングは繰り返すうちに経験的にうまくなっていくものだ。

なにより気をつけたいのは防水対策。日本ではザックカバーを使って、さらに寝袋や衣類はゴミ袋で包んだりする。しかしニュージーランドにはパックライナー<Pack Liner>というすばらしい製品がある。ゴミ袋ですべての荷物を包むという考えを発展させたもので、ようはバカでかい丈夫なビニール袋だ。測ってみたら60×150センチあった。重さは170g。これをすっぽりザックのなかに入れて、その中へ荷物を詰めていく。74リットルのザックで使っても十分に上部があまる。それを折り返しておけば、まっさかさまに水に落ちないかぎり中の荷物は安全だ。このおかげで腰まで水につかって川を渡るなんて芸当もできる。

ただし完全防水の欠点で、いったんなかに水が入ってしまった場合、排水できずにひどい目にあう。水筒や濡れた衣類はパックライナーの中に入れられないように気をつけていた。このパックライナー、トランピング用品店やDOCで手に入る。\$4前後くらい。繰り返しの使用に耐える。ぼくはこのパックライナーとザックカバーを併用していた。

そのほか緊急用として黒いゴミ袋を切りこみを入れてザックカバーがわりにするという方法も覚えておくといい。耐久性はないが、十分に使える。

【服装】

《1日の中に四季がある - ニュージーランドの気候》

ニュージーランドはニュージーランドは海洋性の気候で、変化は突然で激しい。また夏でも涼しく、朝晩は寒いくらいのことが多い。それが山ともなればさらに変化は大きい。常に防寒と雨対策は必要だ。低体温症 Hypothermia で毎年死亡者が出ている。つまりは凍死だけど、これはむしろ冬より夏のほうが多かったりする。とくに雨で体がぬれているときに起こりやすい。

場所によっては真夏にも雪が降る。標高の感覚が日本とはちがう。たいして標高のかわらない富士山とマウント・クック。かたや万年雪と氷河に覆われていることを考えればわかるだろう。ニュージーランドでは標高1000メートルを越えたら立派な高山だ。夏だからといって軽く考えないで夏場だからこそその注意が必要だ。

《ニュージーランドの定番ファッション》

ニュージーランドの定番スタイルといえば、短パンにTシャツだ。女性は短パンの下にタイツのようなものをはいている人も多い。長袖長ズボンというジャパニーズ・スタイルだと逆に浮いてしまう。ルートバーン・トラックでガイドツアーの日本人が、揃いもそろって長袖・長ズボン・軍手・帽子姿でちょっと異様だった。(それなりに意味があるとはわかるのだけど)

短パンとTシャツをベースにして、寒ければ重ね着をして適時調整していく。Tシャツは特に化繊のほうが汗の乾きが速くて快適だ。寒い時期にはポリプロピレンの薄手の下着(上下とも長袖)がいいというけど、ぼくは使ったことがないからわからない。寒さ対策として靴下は絶対にウールがいいという声もある。ぼくには違いがわからなかった。

《服装 ぼくの場合》

ぼくはあまり服装にはこだわらない。トランピングだからといって特別なものを用意していったわけではない。歩くとき基本はふつうのTシャツに短パンだった。寒いときはレイン・ウェアを羽織っていた。下半身は雨でも短パンのままが多かった。道が細くて草が多いときは保護のためにレイン・ウェア

の下をはいた。ハットに到着してくつろぐときには、Tシャツを着替えて薄めのスウェットパンツとカットシャツにフリース・ジャケットというスタイルで足元はサンダル。

翌日歩くときは、ふたたび昨日のTシャツと短パンに着替える。一瞬アセ臭いけど、着てしまえば気にならない。たとえ新品に替えたところで夕方にはまたアセ臭くなるんだから、洗濯物の数は少ないほうがいい。1週間近いトランピングならいざ知らず、数泊程度なら昼間用と夜用の二組の服でとす。もちろん予備用としては他に一式用意している。

服をこまめに洗濯したいと思ったら、化繊素材のを持っていけば、ハットについて軽く水洗いして干しておけば次の日には気持ちよく着られる。

《シャワー》

山歩きでは常識的なことだけど、山の中で体を洗ったりはしない。特にニュージーランドはそれほど汗をかく気候ではないのであまり気にならない。また小屋に泊まっている人も、みんな同じ状態なんだから気にする必要もない。とはいえ毎日トイレにこもって濡れタオルで体を拭いている几帳面な人もたまにいる。

かくいうぼくもトランピングの帰路にヒッチを予定している場合には最終日に水浴びをしたりした。ニュージーランドは真夏であっても川や海は冷たくて入るのに勇気が要る。ぼくは主に濡れタオルかペットボトルを使っていた。もちろん石鹸は使わない。ただ汗を流すだけ。それだけでもけっこうすっきりするものだ。

【食料計画】

山の食事はけっこう重要な問題だ。外国では、手に入るものも違ってくる。コース間隔の設定上、ハットですごす時間が長いことが多く、手持ちの食料がハットでのすごしかたに直結してくる部分もある。

《軽量コンパクト?》

山の入門書とかをみると、荷物は必要最低限なるべく軽く小さく、と書かれている。だからといってなんでもかんでも削ればいいというものでもない。大切なのはなんのためのトランピングかということ。また自分はどれだけの量を持てるのかを知ることだ。

ことに食事に関しては、スポーツとしての登山であれば高カロリーの宇宙食みたいな食料でいいかもしれないけど、トランピングはそんなストイックなスポーツではない。ぼくの価値観では、山のなかで食べることを、さらにいえばハットで過ごす静かな時間がとても重要だと思っている。たとえば早く到着したハットで、お茶を沸かしてクッキーを食べながら本を読んだり、夕食後にロウソクのしたで、お酒を飲みながら日記をつけたりしているとき、この上ない安らぎを感じる。そういった時間を演出する小道具として、付加的な食料や酒が重要になってくる。山だからといって、山用の特別な食事をする必要はない。極端なはなし、あれこれ調理器具や食材をたくさん持って行って、山小屋でパーティーを開いたっていいのだ。

だから、ぼくは体力の許すかぎり、たくさんの食料を持っていくことを勧めている。実際に一回でも



トランピング向けのインスタント食品各種

- (左) フリーズドライパスタ
- (中) マッシュドの素(粉末)
- (下) インスタントヌードル





朝食などに粉末ミルクをかけて食べるミューズリー（左）と、ミューズリーを棒状に固めたミューズリー・バー（右下）。手軽に歩きながらでも食べられるので、昼食や行動食に最適。

右上は、日本のものと遜色のないSunwhiteというブランドの米。1キロで\$1-30程度と安い。

トランピングをしたことのある人なら、お菓子類のあるなしの違いの大きさをよく理解できると思う。

《食料調達はスーパーで》

ニュージーランドではふつうのスーパー・マーケットでフリーズドライ食品が手に入るので便利だ。種類もそこそこあって値段は安い。

どこでも見かけるのはパスタやリゾットなどのフリーズドライ。いろんな味があって1袋\$2弱ぐらい。ぼくはけっこう大食いな方だけど、2袋分食べるとちょっと多目かなと感じる。バリエーションも豊富なので、長期にわたる場合とか荷物を軽減したいときには重宝する。またいつでも予備食としてこいつを3袋常備していた。

そのほかスーパーで買えるトランピング向けの食料は次のとおり。

[ミックスベジタブル(フリーズドライ)]

ひと袋100グラムで\$3弱。グリーンピースだけのものや、ニンジンやインゲンの混ざったものもある。ラーメンに入れたり、水で戻してサラダのようにしたり使い道はひろい。

[粉末のマッシュドポテトの素]

すこしの湯を加えてかき混ぜるだけで、マッシュドポテトが出来あがる。塩・コショウを加えて、ミックスベジタブルやマーガリン、粉末ミルクなどを入れるとかなり本格的になる。安いし軽いし膨れるから量もある。欧米人はよくこれだけを黙々と食べていたけど、ぼくは飽きてしまって長続きしなかった。

[インスタント・ヌードル]

日本と同じようなインスタント・ラーメン。マギー

製が有名でどこでも手に入る。味の種類は豊富だけど、ピザ味とか奇妙なものが多い。カレー、オリエンタル、チキン、ビーフ、フライドオニオンが無難なところか。扱っているところは少ないけど、ぼくのお気に入りにはYumYumというタイ産のラーメン。チキン味は日本のチキンラーメンに似ている。ヌードルにするときは必ずニンジンやタマネギ、キャベツなどを加えるようにしていた。

[ミューズリー]

ミューズリーとはコーンフレークの一種で、ナッツやドライフルーツなどいろんなものがミックスされていて、ずっしり食べごたえがある。主に朝食用に愛用していた。水に溶いた粉末のミルクをかけて食べる。そのままポリポリつまんでもいい。750g入りで\$5くらいから。量り売りもある。

[パン]

パン+ジャムやチーズというのも手軽でいい。さすがにパン文化の国で一斤が大きく種類もたくさんある。トランピングに向くのはおなじ750g入りでもふたまわりくらい小さな黒っぽい種類のパン。目が詰まっっていて少ない量で食べでがある。つぶれにくいのもいい。しっとりしたかんじでなにもつけずにそのままけっこう食べられる。

[米]

米はとても安い。1キロで\$1.30くらい。どこのスーパーでも手に入る。いろんな種類があるけど<Sun White>という銘柄がおすすめ。日本の米とまったくかわらない。山ではサーモンの缶詰と醤油で炊き込みごはんをよく作った。

[ミューズリー・バー]

ミューズリーをバー状に固めたもの。食べやすくおなかにたまるので、昼食用に便利だ。フルーツ味やチョコ味などいろんな種類がある。非常食としても常に何本か持っていた。

[粉末ミルク]

スキムミルクではなく一応ちゃんとした牛乳ができる。水だとやや溶けにくいのが難点。

[ドライフルーツ]

ビタミン補給源に限られるトランピングでドライフルーツは重要だ。スーパー・マーケットにいくといろんな種類のドライフルーツが置いてある。いちばん安いのはレーズンでこころおきなくどっさり食べられる。主に行動食として、休憩のときに食べていた。パッキングされたもの以外にも量り売りコーナーがあり、パイナップル、アプリコット、アップル、プラムなど好きなものを好きな量だけ買って便利。バナナチップもよく食べていた。

[粉末ジュース]

ぼくはあまり利用しなかったけど、これを愛用しているトランパーは多かった。1リットルに溶く粉末が数十¢で売っている。ためしにレモンジュースを飲ましてもらったら安っぽい感じはなく予想以上にいい味だった。

[その他]

粉末スープや、真空パックのサラミなども使える。チーズも1週間くらいなら大丈夫。真空パックのソーセージも開封しなければ経験上、1週間は平気だった。

《食料計画 ぼくの場合》

参考までにぼくが食べていた山でのメニューを紹介する。平均的な2泊3日の行程を想定する。

[持っていくもの]

インスタント・ラーメン4つ、ニンジン1本、タマネギ1個、ジャガイモ1個、オイルサーディン缶詰2個、オレンジ2個、パン1袋もしくは半分、マーガリン、ジャム、チーズ、チョコレート、ビスケット2パック、ミューズリー・バー4本、レーズン1袋、粉末スープ、粉末ミルク、紅茶、酒(ウィスキー375ml) フリーズドライ3食(予備食)、塩、コショウ
ぱっとみてかなり量があることに気づくと思う。いつなにを食べるということはあまり考えていない。最低限おさえているのは、夕食分として野菜たっぷ

りのラーメンが2回作れるという点だけ。あとは気が向くままに食べる。ハットにいる間は四六時中お茶とクッキーを食べているし、行動中はレーズンやミューズリー・バー、出発まえに作っておいたジャムサンドやチーズサンドをつまんだりする。オイルサーディンはラーメンに入れることもあれば、パンにのせて食べることもある。

結局のところ、持っていったものの全部は食べきれず、持って帰ってくることになる。ふつうにすべてを食べたとしても、さらに2、3泊は無理なくできるだろう。

この余裕がぼくにとっては重要だ。運動量の多いトランピングでは、食べるということの意味が日常とはだいぶ違う。そんななか豊富な食べ物に囲まれているとこの上ない安心感がある。くつろぎの気分が出てくるし、たとえ天気が悪化した場合でもどんとかまえていられる。それに泊まった場所が心地よかったですら、なんの気がねなく延泊できる。

もちろんトランピングが長期にわたるときには、本格的に食料計画を考えてフリーズドライを中心にするけど、それ以外はかなりアバウトだ。だいたいトランピング出発まえの手持ちの食料をベースにする。米が残っていれば雑炊のようなものにするし、野菜もあまっているものを持っていく。

山で作ったことのあるメニューはざっと次のとおり。たまご丼、炊きこみごはん、ラーメンライス、オイルサーディンの煮つけ、パスタ+野菜スープ、野菜炒め、海で採った貝の佃煮、肉じゃが、野菜のコンソメスープなど。

《調味料の持ち運び方》

ジャムやマーガリンはちきんとフタのできるプラスチック容器にうつしかえていく。バックパッカーズのフリーフードコーナーをチェックしていると、ほとんど空になった容器を見つけることができる。コショウはもともと容器が小さいのでそのまま持っていった。塩はフィルム容器へ。油はマーガリンで代用して、しょう油はスーパーで売っているプラスチック容器のままビニール袋で二重に包んで持ち運んだ。一部のトランピング用品店では空のプラスチック容器やチューブが売られている。

《水事情》

ハットには雨水タンクを利用した水道がある。ほとんどの場合、そのまま飲んで大丈夫だ。ただエイベル・タズマン・コースト・トラックのように、3分以上煮沸するように勧められている場所もある。

川などの自然水は原則的に飲まないほうがいい。ニュージーランドの小川などからジアルディア<Giardia>という寄生虫が発見されているからだ。日本語ではランブル鞭毛虫という。感染しても、健康な人なら潜在的なキャリアになるだけで特に症状が出ないことが多い。他の人に感染させる可能性があるものの致命的な問題はない。衛生状態の良くない国では住民の半数近くがキャリアというところもあるらしい。

寄生虫を大量に摂取したり、体力が落ちていると次のような症状が出る。脂肪性の下痢（独特の臭いがある）、腹痛（主に上腹部）、嘔吐、食欲不振、腹部膨満感など。潜伏期間は1～3週間。薬の服用で治療できる。

問題があるとすれば子供の場合で、特に6～10歳くらいの子供は感染しやすく発症率も高い。また

発育不振を起こし後々に影響する。

川の水を飲まなければならない状況はあまりないが、ハットによっては貯水タンクがなく、近くの川の水を利用することもある。その場合水の浄化が必要だ。3分間煮沸するのが一般的で、たまに浄水剤<Water Tablets>を使っている人もいる。ヨウ素<Iodine>を使った錠剤で、1リットルにつき1錠、50錠入りの小瓶が\$12ほどで売られている。手軽な半面、これで殺菌した水は茶色くなり、ひどく薬品くさい。非常事態を思えば我慢もできるけど、日常的な飲み水としては抵抗がある。ナチュラルザーというにおいと色を消す薬剤が\$9くらいで売られているが、こちらのほうは試したことはない。愛用者によると「完全ではないけどだいぶ良くなる。その水で粉末ジュースを溶いて飲めばぜんぜん気にならない」そうだ。そう話してくれた人はイスラエル人、元軍人の言うことなのでどんなもんだか。なお原料のヨウ素は甲状腺に障害を持つ人や妊婦の使用は禁じられている。

日本の海外旅行用品コーナーなどでも浄水剤は売られている。日本のは塩素を使ったタイプで、水道

ジアルディアと日本の検疫

ニュージーランド旅行の帰り、以前から気になっていたジアルディアについて知りたいと思って成田空港の検疫所に立ち寄った。トランピングのとき、めんどくさがって煮沸しない水をけっこう飲んでいたので、もしかしたら感染しているかもしれないと相談してみた。そうしたら、症状がでなければ気にしないでいいというのが検疫所の答えだった。

寄生虫学の本によると、ジアルディア症という病気は、原虫が体内に寄生した状態（キャリア）であっても健康な人にはなんら症状が出ないものらしい。単純に症状がないから感染していないということではない。そのあたりを突っ込んで聞いてみると、結局のところ検疫所の人にはジアルディアについてほとんど知らないようだった。

日本の検疫では、この病気を監視対象にしておらず、マニュアルにも具体的なことは書かれていないらしい。つまりジアルディアとはその程度の感染症であってほとんど気にする必要はないということなのかもしれない。ただ近年、WHOの基準がかわって、これからはジアルディアも国際的な視野に入るらしく、今後の対応は変わっていくはずだともいっていた。

個人的に調べたところによると、キャリア状態だと便中に嚢子が排出されつづけ、それから他人に二次感染させる恐れがある。子どもにうつしてしまった場合、発育不振などの害が顕著に表れることが多い。実際に保育所などで二次感染したという例が発生しているようだ。

検疫所の人によると、ジアルディアに感染したかどうかのテストは、難しいものではないものの、はっきりとそれを視野に入れた検査をする必要があり、現在の日本ではあまり例がないという。もし感染の心あたりがあるなら、海外旅行者保険がきいているうちに、ニュージーランドの病院でチェックしてきたほうが話は早いかもしれない。



NZで一般的なヨウ素系浄水剤。黄色いピンはナチュラルイザーと言って特有の薬品臭を消すためのもの。

水とおなじで味とにおいでなじみやすいが、使用期間が開封後1、2ヶ月と短い。またジアルディアに効かないタイプもあるので有効かどうかは製品ごとに確認する必要がある。

《食器の洗い方》

ハットでの夕食後、ニュージーランド人たちが食器を洗っているのを見て驚いた。

家庭用洗剤を持ってきて、ふだん家庭でしているような洗い方をしていたのだ。水を溜めたシンク(流し)に液体洗剤をたっぷり溶かして、なかにスパゲティを食べた後のベトベトの皿をつこんでゴシゴシこすっていた。もちろんあとはシンクのプラグを抜いておしまい。洗剤だらけの汚水は地面へ流れていった。

ハット・ワーデンさえも疑いもなくみんなの前でそんなことをしているから、最初はきちんとした浄化設備が整っているのかと思っていた。しかし聞くとうちやうちそういうわけではないらしい。

エンバイロメンタル・ケア・コード(Environmental Care Code)という自然保護十カ条みたいなのをアピールしている一方で、いったいなにを考えているのだろう。

はたして洗剤が大地に有害か無害かという科学的な答えは知らない。でもわけのわからない化学物質を自然界に垂れ流すのがいいこととは思えない。そこで日本式の食器洗いを推奨したい。

基本的に山の中では洗剤・石鹼の類は一切使わない。かわりに使うのはトイレトペーパー。それで

食器の汚れを拭き取っていく。何回か紙を替えればだいたいきれいになるはずだ。油汚れが気になるときは最後に湯をかけてから拭く。これで十分。完璧にきれいにするなんて観念は捨てたほうがいい。

ニュージーランドではハットに水道があって流しがあるから、つい大量に水を使ってしまいがちだけど、テント山行を考えてみるといい。使う水は全部担ぎ上げていく。水は貴重なもの、常にそういう意識を持っていたい。

《ハットのヒーターで調理できるか?》

一部オープン・ファイアーのところを除いて、ふつうのハットには薪を燃料にするヒーターがある。そいつを調理用に使えないかという話だが、現実的に難しいようだ。

バックカントリーハットに調理用ストーブを持たずにやってきた人がいた。彼の夕食の準備は薪割りからはじまった。準備が整ったところで着火。食料のパッケージを種火に火を起こそうとしていたけどうまくいかない。見かねたぼくは持っていた新聞紙をあげた。でも不慣れなのかなかなかつかない。

1時間以上たつてようやく火が安定した。でもヒーターは分厚い鉄でできている。なかなか全体が温まらない。上に載せたコッヘルの湯が沸いたのはさらに1時間以上たつてからだ。沸いたといってもブク、ブクとまばらに気泡があがる程度。完全な沸騰にはいたってなかった。彼はラーメンをゆでて、といよりはふやかして食べていた。翌朝、彼はまた薪を割りはじめた。今度はなにを作るのかと聞いたらコーヒーとの答え。なんだかわいそうになってガス・ストーブを貸してあげた。

そんなわけなので、バックカントリーハットでは自前の調理コンロは必需品と考えたほうがいいだろう。



第2章 旅のヒント

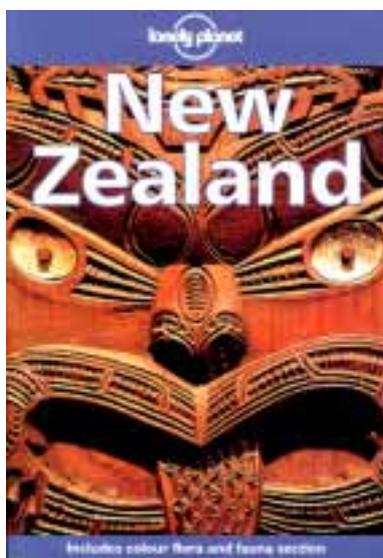
トランピング以前の旅行のテクニックについては逐一書かない。市販のガイドブックを参照してほしい。ここではふつうの本にはあまり載っていないような情報を中心に、旅のヒントとしてまとめた。

《まずはなによりガイドブック》

海外旅行のガイドブックと言ったらダイヤモンド・ビック社の「地球の歩き方」があまりに有名。でもしばしば「地球の迷い方」と陰口をたたかれているシリーズでもある。読者投稿をベースにしているせいかちょっとアヤシイ部分が多々ある。

それでも日本を出るまでは「地球の歩き方」は貴重な情報源だった。歴史やコラムのページはとてためになったと思う。でもニュージーランドに着いて現地の出版物やLonely Planet社のガイドブック "New Zealand" に触れるようになってからは、あまりに通り一遍のことばかり書いてある「歩き方」がバカらしくなって処分してしまった。

今と違って当時97～98年版までの「歩き方」はひどかった。なにせニュージーランドに2つしかない世界遺産のひとつ、トンガリロ・ナショナル・パーク Tongariro National Park のことすら載っていないありさまだったのだ。



バックパッカーのバイブルとして有名なロンリープラネット社のガイドブック。バジェット・トラベルのための実用的な情報から、片田舎の小さな町のことまでものすごい情報量が詰まっている。

それまで「歩き方」がすべてだったから、初めて聖書のように分厚いLonely Planetに触れたときには、ニュージーランドはこんなに見どころのある国だったのかと驚いた。格段にニュージーランドの見方が広がったのはこのときからだ。

現在書店に並んでいるバージョンはかなりマシになってきたけど、もし「地球の歩き方」に不満がある人はぜひLonely Planet社のシリーズをあたってみてほしい。ほかにも世界的に有名なガイドブックのシリーズに "Let's Go" や "Moon Publish社" のがあるけど、ニュージーランドに関していえばLonely Planetがいちばん実用的だった。またまだじっくりとは読み込んでいないが、"The Rough Guide" というシリーズのニュージーランド編もなかなか詳しく、おすすめできそうだった。

《 宿泊編 》

[ユース・ホステルとバックパッカーズのちがい]

ふつうの旅行者にとってもっとも利用価値が高いのがこのふたつだ。両者の設備に大差はない。しいていえばユース・ホステルのほうがハズレが少ない。どこも平均的にきれいで快適さが保たれている。一方、完全な個人経営のバックパッカーズの場合、きちんと選ばないとお世辞にも快適とはいえない場所もある。その半面、とても豪華でペンションと間違えるような場所もある。もしなんの予備知識なしに泊まるなら、ユース・ホステルを選べば、ひどく不快な思いをする可能性は低い。

ユース・ホステルは男女別のドミトリー（相部屋。もっとも一般的なスタイル）が基本。バックパッカーズの場合男女ミックスの場合がおおい。日本人感覚からすると驚くかもしれないけどニュージーランドでは特別なことじゃない。日本の女の子も最初は着替えるのにわざわざシャワールームに行ったりする

けど、しばらくすると人目を気にしながらもその辺でできる(?)ようになっている。

[テントサイトの勧め]

日本では考えられないけど、ユース・ホステルやバックパッカーズ(以後とくに区別しないときはまとめて"宿"と呼ぶ)にはテントサイトを備えたところもある。なんてことはない、ただ敷地のあいているところにテントを張らせてくれるだけのこと。でもこれがなかなか快適だ。

もちろん無料というわけではない。ドミトリーが\$15のところを、\$8~10くらい。共同のシャワーやキッチン、リビングなどは普通の泊り客と同様、自由に使える。

「自分のテントに泊まるのになんで\$10も払わなきゃならないんだ!」と思うかもしれないけど、ぼくは十分納得できる値段だと思っている。たとえばモーターキャンプ(キャンプ場)にテントを張ってもおなじくらいの料金を取られる。でもその快適さは宿のテントサイトの方がだんぜん上だ。モーターキャンプのキッチンには食器や鍋はないし、洗剤さえ置いてない。食後にくつろげるラウンジもない。シャワーも下手するとコイン式だ。宿だったら雨のときはラウンジのソファで夜を明かすことだってできる。

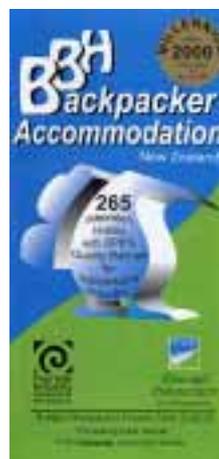
ドミトリーと比べてもメリットがある。夜おそく部屋に戻るときに気をつわなくてもいいし、荷物を散らかしっぱなしでも大丈夫。なにより完全なプライベート・スペースを保てる。しかも料金は安い。

そんなわけで、ぼくはもっぱら宿のテントサイトを利用していった。バックパッカーズのテントサイトの有無については、次に述べるB B Hのブルーブック Blue Bookに載っている。ユース・ホステルについてはニュージーランドのユース・ホステルガイド(現地のユースで無料でもらえる)に書かれている。バックパッカーズの場合、ブルーブックに特に記載がなくても頼んでみると庭があればOKしてくれることがおおい。

[バックパッカーズ 快適度の目安]

通称B B Hと呼ばれている組織がある。Budget Backpackers Hostels New Zealandの略で、ニュージーランド全国にあるバックパッカーズの組合のようなものだ。ここが発行している小冊子(通称Blue Book)は、全国221のバックパッカーズのリストを載せている。ユニークなのは各宿の好感度をパーセンテージで明示しているところ。たとえば1998年版では最高が93%、最低が30%となかなか手厳しくつけられている。信頼性はあると思う。この好感度は年に1度の利用者へのアンケートがもとになっている。1998年は2月24日に行われた。ぼくもたまたまホキティカのBlue Spur Lodgeでこのアンケートに遭遇して、今までに泊まった宿を思い出しながら点数をつけていった。

この小冊子にはテントサイトの有無(料金は載っていない)や、町からの無料送迎の有無などの情報も載っているのが重宝する。加盟バックパッカーズやインフォメーション・センターで無料でもらえる。



たぶん本邦初公開のB B Hのアンケート用紙。2000年度は2月22日に全国一斉に行なわれた。加盟・非加盟を問わず、全国のホステルがリストアップされており、自分が泊まった宿を思い出して10段階評価をつけていく。

宿を選ぶ上でとても使える2つの冊子。どちらも無料でもらえる。

ユースホステルのテントサイトの有無

場 所	ドミトリー	テント	コメント
Auckland-Parnell	\$ 17-18	×	部屋がいっぱいするときならテントOK。長期滞在者多し
Christchurch City Central	\$19	×	ふつうより安い窓のない秘密の部屋ある。
Christchurch - Arts Centre	\$17	×	博物館、アートセンターが目の前
Coromandel	\$15	\$9	キャンプサイトはひろい。ラウンジも広々としている
Dargaville	\$15	\$8	カウリガム細工ができる。連泊割引あり。
Dunedin	\$16	\$8	90年前の病院。ちょっと不気味なかんじ
Franz Josef	\$16	×	大きくて人気がある。夏は要予約。VBなし。
Gisborne	\$15	料金不明	テーブル少なく不便。
Greymouth	\$ 14-16	×	昔の教会でかわいらしいかんじ。歴代のVBあり。
Haast	\$15	\$9	夜11時過ぎ、キッチン・コモンルーム施設。サンドフライ
Hamilton	\$15	×	マネージャーのピート。日本語を話す
Havelock	\$15	料金不明	120年前の学校。趣がある。昔のVBあり。
Invercargill	\$15	×	いつも人が少なく快適。町から遠い。昔のVBあり
Kaikoura	\$17	料金不明	冬場、ラウンジからの景色すばらしい
Kaitaia	\$15	料金不明	
Kerikeri	\$15	\$9	ピッキングの仕事を求めて人が集まる。
Mt.Cook	\$20	×	料金は高いが、立派。サウナあり
Napier	\$15	×	陽気なマネージャーボブ
Nelson	\$18	×	気に入る人は多いが、ビジネスライクで気になった
New Plymouth	\$15	\$10	街から少し遠い
Oamaru	\$14	×	とてもフレンドリー。オーナーの娘日本のワーホリ経験者
Opoutere	\$15	\$10	すばらしい自然環境。カヤック無料。潮干狩り。昔のVB
Palmerston North	\$15	料金不明	ここの包丁は驚くほど切れる。昔のVBあり
Rotorua	\$17	×	ビジネスライクなかんじがした。
St.Arnaud	\$18	料金不明	せまい
Taupo	\$16	×	きれいで快適。チェックアウト後の施設利用にうるさい。
Te Aroha	\$12	×	ホームステイの気分で居心地が良い。3泊\$30。昔のVB。
Te Anau	\$16	\$10	VBにトランピング情報多し。テントサイトひろい
Tekapo	\$15	\$9	ラウンジからの景色最高。人気高し。
Wanaka	\$15	\$9	オフィスで日本の文庫本借りられる
Wanganui	\$15	\$10	B&Bをかねてて建物がお屋敷みたい
Wellington	\$19	×	ビジネスホテルのよう。数年まえまでのVBあり。
Whangarei	\$15	×	丘の上にあって歩きにはきつい

VB： ビジターズ・ブック

* 1997年、実際に訪れたところのみ記載

インターネットを通してブルーブックの最新情報が提供されている。

<http://www.backpack.co.nz/>

[予約について]

特に泊まりたい宿が決まっているなら電話予約を入れておいたほうが安心だ。ひどく込んでいる時期が人気のある宿でないかぎり前日で大丈夫。

電話予約は最初は不安だけど、"I'd like to make a reservation" とか "I wanna book" と一いえば、"today or Tommorrow?" "how meny nights?" "your name please." というふうシンプルに質問されるから順番に単語で答えていくだけでOK。

ユース・ホステルの場合はクレジットカードの番号を聞かれる。持っていなくても予約は可能。その場合は到着予定時刻を告げる。もしその時間になっても到着しないと予約を取り消します、ということだ。

電話予約も遠距離になると電話代がバカにならない。そこでユース・ホステルの場合、レセプションを通して予約をすると距離に関わらず全国一律\$1の手数料ですむ。しかし予約段階で宿泊料金を払ってクーポンを作ってもらうので、もし予定が変更になった場合はキャンセル料の問題があって面倒くさい。特に自分の車などで旅していると予定変更はよくあることだ。ぼくはもっぱら自分で電話予約していた。ちなみにユース・ホステルはインターネットで予約を入れることもできる。

<http://www.yha.org.nz/>

町のインフォメーション・センターを通して予約をする方法もある。おなじ市内であればふつうはタダでやってくれる。ニュージーランドでは加入電話からの市内通話は無料(基本料金に含まれている)なのだ。遠方になると手数料を取られることもある。

[盗難対策]

ドミトリーに泊まっている間、貴重品の管理とかどうするのかというのはすごく気になることだと思う。鍵のかかるスーツケースがいいとか本にはいるんなことが書いてあるけど、ニュージーランドはけっこうルーズで平気な感じだった。

国籍問わずバックパッカーズに泊まっている人の旅行カバンはトップローディングタイプのバック



リビングの快適さは重要なチェックポイント
写真はグレイマウスのユースホステル

パック。もちろん鍵なんかつけられない。中にはベッドの上に荷物を広げっぱなしの人もいるくらい。

ぼくは財布くらいは常時携帯していたけど、パスポートや航空券、トラベラーズチェックはザックの中。寝袋のスタッフバックに入れてザックの底の方に入れておいた。カメラも同様。そういった貴重品はすべてウェストバックや小さなデイパックにいれて四六時中持ち歩いている人もいた。

警戒するに越したことはないけど、そんなことで神経をピリピリさせているよりは、盗られたらいいや、と大きく構えているのも一興かと思う。いったいなにを盗まれたら困るかと考えてみると、パスポートは再発行できるし、トラベラーズチェックも再発行できる。ポケットの財布さえあればとりあえずはどうにかなる。そうやって考えていたら盗まれて絶対困るものといえば日記帳くらいだっことに気づいた。

反対によくあるのがキッチンや冷蔵庫の食料がなくなつたという話。名前を書いておいたのに牛乳がへっていたなんていうのは日常茶飯事。

こまかいことは気にしないようにしているけど、ビールやワインだけは神経を使っていた。未開封のボトルワインならともかく、缶ビールをむきだしで入れておくなつて言語道断。ビニール袋を二重くらいにして厳重に口を縛っておく。できれば中身が分からないようにするくらいの心構えが必要。あと開封済みの箱入りのワインもちょくちょく飲まれる。これも同様にビニールで厳重に。

[洗濯]

バックパッカーズには洗濯機があって\$1.50か\$2で使える。でも一人分の洗濯物だけを洗うのは不経済だ。一人で旅しているときはほとんど手洗いをしていた。ランドリー・ルームにはかならず深めの洗濯用のシンク(流し)がある。プラグ(ゴム栓)もあるし、湯が出るところがおおいので、それほど苦労することなく手洗いでできる。

ぼくはいつも濡らした衣類に石鹼をこすりつけて、もみ洗い、押し洗いをしていた。すすぎがたいへんだけど湯を使えば比較的楽。さすがにジーンズとか

トレーナー、フリースを洗うときには洗濯機を使った。

手洗いならふつうの固形石鹼で十分だけど、洗濯機用には粉末洗剤が必要になる。たいてい宿のレセプションで数回分くらいを売ってくれる。町のスーパーの方が割安だけど、1キロ単位になってしまう。人を募って何人かでシェアして買うといいだろう。テ・アナウのスーパーマーケットでは袋に小分けした洗剤が安く売られていて便利だった。

屋外に物干し台と洗濯バサミが用意されているが、たいていの宿に乾燥機がある。30分で\$2くらい。雨

お気に入りの宿

バックパッカーズにはオーナーの趣味が色濃く反映されているユニークな宿が多い。そんな場所を探して旅をするのもおもしろい。

ぼくのお気に入りは、南島のゴールデン・ベイ地方にあるザ・ヌーク The Nookとシャンバラ Shambhalaというバックパッカーズ。どちらもアート感覚あふれる魅力的な宿だ。

ザ・ヌークは若いドイツ人夫婦が切り盛りしている宿で、まず建物が家庭的でとてもきれい。室内は土足禁止で、トイレを汚さないように「男性も座って用を足してください」と張り紙がある。毎朝奥さんが掃除しているのを見ているとNZでは珍しい徹底した掃除ぶりに感心してしまう。

建物の内装はアーティスティックな小物であふれている。天上の照明の笠はチーズを削る金具を加工したものだったり、独特の形状・ペイントの椅子。なによりバス・ルームの幻想的な照明には感激した。どんなものかは自分の目で実際に見てほしい。

この宿のもうひとつの魅力は手作りケーキ。毎日ダンナさんが焼いている。一切れ\$1でNZでは久しく食べたことがない上品な甘さが嬉しかった。冷蔵庫の上においてあって、食べた分の自己申告制。そのほか手作りのパンやビール、ワインもある。

なにからなにまでオーナー夫婦の趣味というかんじで、とてもあたたかい。夫婦のプライベート・スペースはあるものの、トレイ・シャワー・キッチンが共用で、まるで個人宅にお邪魔させてもらっているような雰囲気がある。いつか夫婦でこんな生活をしてみたいなと思わせてくれる、そんな宿だ。

シャンバラはジョンというドイツ人アーティストが営む宿。建物の随所にはアジアに傾倒した彼のアートワークが飾ってある。バックパッカーズ棟は太陽電池を使ったバッテリー・システムで電気をまかなっている。それも手作りっぽくておもしろい。

この宿はファームのなかの広大な敷地の一角にあり、他からは完全に隔離されたプライベート・ビーチを持っている。そこでマッスル(ムール貝)を採ったり無料で貸してくれるのカヤックを楽しんだりできる。またホース・ライディングもできる。ぼくが馬に乗りたと言ったら、「鞍はあそこにあるから勝手に乗ってきな」と言われた。あいにく初心者だったら遠慮したけど、経験ある人なら、自由に広い敷地内を乗りまわしていいたい。

どちらの宿もぼくが行ったときは、「知る人ぞ知る」ちょっと特殊な宿だった。しかし今ではどちらもBBHのリストに載ってしまった。ザ・ヌークにいたっては「地球の歩き方」にも載っている。今後、どういった雰囲気に変わっていきってしまうのだろうか。



大手スーパーマーケットの
パッケンセーブ(左)とディ
スカウントストア、ザ・ウェ
アハウス(右)

のおおい地方では屋内の乾燥室が使えることもある。(テ・アナウ、フランツ・ジョセフ、マウント・クックのユース・ホテルなど)

[フリーフード・コーナー]

宿のキッチンには利用者が食料を置いておく棚がある。そこにフリー・フードとかスペア・フード(稀にコミュニティー・フードともいう)と書かれた一角がある。まだ食べられるけど不要になった食料を置いておく棚で、ここにあるものは自由にもらっにかまわない。みんな貧乏旅行をしている同士、ろくなものがないかと思いきや、けっこう掘り出し物があったりする。米やパスタ、カリフラワー、調味料、缶詰など。うまくすればこれらを使って食費を限りなくゼロにすることも不可能ではない。クライストチャーチやオークランドの宿では帰国間際の人がいるせいか、日本のレトルト食品をどっさり手にいれたこともある。1日数回はチェックするのが癖になってしまった。

[野宿]

ニュージーランドは治安が良いほうで、すくなくとも野宿 = 自殺行為という図式はない。熊や蛇などの危険な動物もいないから、郊外なら基本的にどこで野宿しても大丈夫だ。

野宿の機会がおおいチャリダー(自転車旅行者)によると、ファーム(牧場)にかけあってテントを張らしてもらいたいそうだ。ガレージを使わせてくれたり、家に招いてくれたこともあったという。

街中ではあまり野宿したくないけど、ウェリントンのフェリーターミナルの軒先で寝たことがある。船の到着がおそくて(本当は夜9時着がなんと夜中の

3時!) 他にいくところもなかったから寝てしまったけど、人には勧めない。

《 ショッピング編 》

[スーパーマーケットとのつきあい]

長期の旅となれば、基本は自炊だ。ニュージーランドは宿もスーパーマーケットも旅人にフレンドリーで、なんの障害もなく自炊しながら旅を楽しめる。ここでは日ごろお世話になるスーパーマーケット事情を紹介する。

ニュージーランドには全国チェーンの大型スーパーマーケットがいくつかある。よく目につく代表的なものは、パッケン・セーブ Pak'n Save、ビッグフレッシュ Bigfresh、ニューワールド New World、ウールワース Woolworth's、カウントダウン Countdown などだ。

倉庫のような大きい店舗で、はじめて入ったときはそのスケールにきつと感激すると思う。地元の人には車で乗りつけて1週間分かそれ以上のすごい量の買い物をしていく。

にもかかわらず、ありがたいことに野菜のほとんどは量り売り方式で、ジャガイモ1個、ジンジャーひとかけらの単位で買うことができる。1キロあたりいくらというように表示されているけど、たとえばジャガイモを1個持ってキャッシャー(レジ)に行けば、キャッシャー台に内蔵されている秤で計量されて値段が決まる。ときとして支払い額が\$1に満たないようなこともあるけどいやな顔をされたことはない。これらの大型チェーン店なら価格も全般的に安く、安心して買い物ができる。

どの店も週がわりで特売をやっていて、ひまがあれば何件かまわってみるといい。この特売の値引率がいちばん高いのが黄色が目印のパクン・セーブ Pak'n Saveだ。(パッキン・セーブと発音する日本人もいる) これだけは他のスーパーとはステータスが違う。泊まった町にこれがあるというだけで、うれしくて得した気分になってしまう。町にいくつものスーパーがあるなら、まずはパクン・セーブを覗いてみるといい。ただし、ミュージリーやドライフルーツなどの量り売りはあまり充実していない。また場所によってはプラスチック・バック(ビニール袋)が有料になるので注意が必要。僕の知るかぎり北島のロトルアが有料だった。

ニューワールド New Worldはクーポン券制度で値引きをしている。安いと思ってレジに並ぶとクーポンがなくて通常料金、「だまされた!」ということがあった。このクーポンは各家庭に無料で配られているものらしいけど、旅行中のぼくたちはなかなか手に入れる機会がない。でもスーパーのサービスカウンターに「ちょうだい」といったら、あっけなくもらえた。

ちょっと大きめの町ならこれらの大型スーパーが1軒くらいはある。しかしそれ以下の町では、ワンランク下のスーパーマーケット、スーパー・バリュー Super Valueしかないことが多い。規模がちょっと小さくなって料金も少し高めになるけど、そうたいした違いじゃない。

最悪なのはそのさらに下のランクに位置するフォー・スクエア Four Squareしかない町。このフォー・スクエアというのは街角にあるデイリー・ストアに毛の生えたようなもの。品揃えが悪い上に高い。とても日常的に買い物をする場所ではない。感覚的には観光地で150円の缶ジュースをしょうがなく買うようなかんじ。あらかじめわかっていたらかならず食料の買いだめをしてその地に臨む。何日か泊まるつもりならなおさらだ。これから行こうとする町にどんなスーパーがあるかというのは些細でも重要な問題なのだ。

こういったスーパーの情報はLonely Planet社のガイドブック "New Zealand" に載っている町の地図を丹念に見ていると書かれていることもあるけど完全ではない。やはり宿で会った旅行者から聞くのがいちばんだろう。ちなみにフォー・スクエアしか

かったいまましい町は、ざっと思い出すと、コロマンデル、ハブロック、カイコウラ、テカポ、フランツジョセフ、Fox Glacier、トゥアタペレなど。

[生活雑貨はThe Warehouseへ]

ザ・ウェアハウス The Warehouseも貧乏旅行者向けの使える店だ。その名のとおり「倉庫」のようなつくりで真っ赤な建物なのですぐわかるだろう。ちょっとした規模の街ならたいていチェーンを展開している。

扱っているものは生活雑貨全般。電気製品、衣類、キッチン用品、自転車、キャンプ道具、工具、文具、CD、お菓子の類など。特徴はとにかく安いこと。食料以外でなにかほしいものがあつたらまず覗いてみるといい。

ただし、あまりに安いので品質は保証の限りではない。地元の人がいうには、「安くていいけど、自転車とかは不安だから買わない」そうだ。

[ハマってしまうセカンドハンド・ショップ]

ニュージーランドはセカンドハンド・ショップ(中古屋)が充実している。ものを大切に作る国民性なのか、小さい町でもたいてい古着屋や古道具屋が店を構えている。で、これらがけっこう使えるのだ。

店にもよるが驚いてしまうのがその値段。古着屋の場合、Tシャツなどは50¢からあるし、せいぜい数ドルまで。ダンガリーシャツやジーンズなら10数ドル。店はたくさんあるし種類もおおいので選択の幅は広い。ふつうの店で服を買うのがばかばかしくなるくらいに安く手に入る。入国のときには最小限の服で来て、あっちで揃えるというのもいいと思う。こういった店はどこにでもあるが、"Salvation Army"など教会がやっているところは特に安い。

古道具屋というよりは質屋に近いような、きちんとした店構えのセカンドハンド・ショップもある。"Cash"などのチェーン店がそうで、制服をきた店員がいる店はオープンなかんじで入りやすい。貴金属や電気製品、カメラなどが主で、キャンプ道具が置いてあることもある。ここでは道具の下取りや買取にも応じてくれる。帰国まぎわには使えるかもしれない。

ニュージーランドで買うものの大半は、その旅かぎりのものなのだから、なにも新品である必要はな

い。どんなものでも、なにか買おうと思ったらまずセカンドハンド・ショップをあたってみることを勧める。

《 移動編 》

[車・モーターバイク]

つっこんでニュージーランドを旅行しようと思ったら車などは必需品だ。有名な観光地だけを周るといならともかく、ニュージーランドには日本のガイドブックにはない魅力的な場所がたくさんある。

レンタカーは時期にもよるけど1日\$40くらいからある。中古車売買もさかんで安いと\$600、だいたい2千から3千ドルくらいで買える。名義変更も郵便局にいて書類一枚で簡単にできる。

[道路事情]

ニュージーランドの道路の流れは速い。市内は50キロ制限だが、ちょっと郊外へ出ると100キロになる。100キロといってもほとんどの車はそれ以上で走っている。だいたい120から150キロくらいだろう。こっちが120で走っていてもすごい勢いで追いぬきをかけてくる。

道路の整備状況は悪くない。でも道路設計の理念が日本とはちがうらしく、ナチュラルというか強引というか、自然の地形そのままに道路が作られている。つまり運転しやすいような配慮がされていない。トンネルは全国に数えるほどしかなく、険しい山でも急なカーブを繰り返しながら延々のぼっていく。

気持ちよく100キロ以上で走っていると、いきなり看板が出てきて15キロまで減速しろなどとあってあせることがある。急カーブ注意ということなのだけど、日本の高速道路感覚でいると危ない。

またちょっと田舎の道路だと、羊の大移動で道路がふさがっているのに出くわすことがある。ニュージーランドらしくほほえましい。

一方、夜になると街以外、あかりはないので注意が必要。とくにボッサムという小動物の飛び出しが多く、道端にはたくさんの死骸が転がっている。



[モーターバイクはマイナー]

英語でオートバイのことをモーターバイク、正式にはモーターサイクルという。単にバイクというとふつうは自転車のこと。

バイクに乗る人はおどろくほど少ない。実用性を考えると車がベストなのはわかるけど、旅に利用する人もいないのは意外だった。よくニュージーランドは北海道に似ていると言われる。北海道といえば日本のライダーのメッカだ。だとすればニュージーランドもライダーがおおいと思ってしまわないか。ところが旅行中(それは2万キロという距離の移動でもあったわけだけど)、出会った日本人ライダーはたったひとり。そのほかオーストラリア人がひとり。これですべてだった。

道は決して悪くない。どこもおおむね100キロ以上でとばせるし、景色は雄大ですがすがしい。町と町のあいだもひどく離れているわけではないから、気楽に乗れる。なのになぜだろう?

ニュージーランド人のバイク乗りもいないことはない。でも例外なく彼らは革ジャンを着て群れをなして走っている。そう、ハーレー族。この国ではバイクはおじさんの趣味らしい。

[バイクを買う]

バイクショップは簡単に見つかる。中規模程度の町にならたいてい1軒はある。というのは一般公道では見かけなくても、牧場内で使うためにけっこう需要はあるのだ。

中古屋もあるが、総じて店で売っているのものは高い。いくらボロに見えても250ccクラスで\$2000以下は見つからない。

バイクの良し悪しがわかる人は、土曜日の新聞に

ある<Buy-sell>のコーナーを探すと、よりどりみどりでいろんなバイクが見つかる。連絡して試乗させてもらって決めればいい。

ぼくはバイクのことはぜんぜんわからなかったの、クライストチャーチに住んでいる間にいろんな人に声をかけておいて譲ってくれる人を見つけた。きちんとした店で高いお金だして買ってもハズレがおおいのがニュージーランドだけど、ぼくのは大当たりだった。すでに6万8000キロ走っているホンダのFT-500。値段は\$2000もしなかったのに、ぼくが走った2万キロの間、なんの不調もなかった。さすがにタイヤとか消耗品の交換はしたけど。実にラッキーだったと思う。

〔免許と排気量制限〕

ニュージーランドで車やバイクを運転するには、国際運転免許証を発行してもらう。これは日本の都道府県運転免許試験場に行って申請すれば即日発行される。運転できる種別が二輪、普通、大型、牽引などに分かれている。日本の自動二輪免許を持っていれば、その欄にスタンプが押されてニュージーランドでバイクを運転できるようになる。しかし国際免許証のどこを見ても排気量制限の記載はない。つまり、外国では日本の制限にかかわらず何ccのバイクでも乗ることができる、と僕は解釈している。実際、僕は日本の免許では乗ることができない500ccのバイクに乗っていたし、検問で引っかかって免許を提示したときももちろん何も言われなかった。ついでながらニュージーランドの免許制度でも排気量制限はない。あるのはLearner's license（仮免）では250cc以下しか乗れないということだけ。排気量制限は国際的にみるとちょっと特殊な制度らしい。

〔バイクの登録〕

バイクや車の名義変更は郵便局で行なう。備え付けの書類にバイクの登録番号や両者の住所氏名、サインをして提出すればそれでおしまい。手数料\$9.20。あっけなくバイクは自分のものになる。

車両の持ち主は半年に1回車検を受けなくては行けない。むこうではWOF<Warrant of Fitness>というが、これも簡単。WOFを発行できるバイクショップや試験場へ行って\$15を払うと、10分ほどでチェックが終わって証明書を作ってくれる。

チェック項目といってもウィンカー<Direction Indicator>が動作するか、タイヤが磨り減ってないかとかその程度。バイクを買うときによく「WOFが通ったばかりだから安全」などと言われるけど、WOFはあてにならないからそのつもりで。次回登録の更新をするときにはWOFの証明書が必要になる。登録はやはり郵便局で行なう。有効期限は半年と1年を選べて、料金はそれぞれ\$74.50と\$141.40。これは車もバイクもかわらない。なお車両を売り払うときは登録期限が1ヶ月以上残っていないと名義変更できない。

〔保険〕

ニュージーランドには強制保険に相当するものがない。というのは怪我についてはすべて国家が補償することになっているから。個人で契約する任意保険として対物保険や盗難、故障、火災などがある。

料金は驚くほど安かった。半年間のモーターサイクル保険で\$211。対物、盗難、故障、火災すべてを含んでだ。最低限、対物保険<Third Party>だけは入っておいたほうが安心だろう。

ニュージーランドは日本のように法律で基準が決まっているわけではないので、保険会社によって条件や料金が異なる。何軒かまわって話を聞いたほうがいい。ぼくの場合はクライストチャーチのバイク屋で<Swann Insurance>という会社の<Motor Cycle Insurance>に加入した。しかし後で知ったのだが、これはオーストラリアの保険会社で、ニュージーランドにはオークランドにしか支店がなかった。フリーダイヤルも設置していないので、もしトラブルがあったら面倒なことになるところだった。保険を選ぶときにはフリーダイヤルの有無や支店の場所の確認は重要だ。

〔交通違反でつかまったとき〕

いちど駐車違反でつかまったことがある。グレイマウスで、アーケードの下に駐車していて、戻ると切符が挟まれていた。2週間以内に\$40払えと書かれていたが、ぼくはすぐにその足で窓口になっている<Grey District Council>(県庁みたいなところ)に行った。そしてダメもとで言ってみた。

「たった5分だけの駐車だった。商店街の駐車スペースはすべて埋まっていたし、そとは大雨で、た



だお金を下ろすだけの用だった。なんとかならないか」

すると罰金を免除される余地があることを教えてくれ、意見陳述書のようなフォームを渡された。それを見て3人の係官が判断するという。宿にもどって慣れない英語で一生懸命いいわけを書いた。状況説明はもちろん、自分の旅のことを書いた。

「貧乏旅行をしていて、罰金の\$40というお金は1週間分の食費に相当する。自分はニュージーランドが大好きで、\$40あればさらに長く旅を続けることができる。あなたの国のすばらしいところをもっと見せてくれ」

文章が効いたのか、外国人だから大目に見てくれたのかわからない。数週間後にクライストチャーチの連絡先に手紙が届いて、罰金免除を知った。

このようにニュージーランドでは、杓子定期的にやるのではなくある程度係官の裁量に任されている部分がある。覚えておいて損はないと思う。

〔飲酒運転OK!?!〕

冗談ではなくニュージーランドでは飲酒運転が認められている。日本のように公共の交通機関が発達していないから致し方ない事情なのだろう。

飲酒OKといってもやっぱり限度があって、規定では「血液100ml中のアルコール濃度が80mgまで」となっている(二十歳未満の人は30mgまで)。一般的にビールなら数杯、ワインはグラス一杯くらいといわれている。もちろん個人差があるからただの目安に過ぎない。

大都市周辺ではときどき日本のように検問をやっ

ている。僕もウェリントンでいちど遭遇した。マイクのようなものを付き付けられたので日本のようにハーと息を吹きかけた。しかしどうもやり方が違ったようで検査を拒否していると勘違いされて腕を掴まれてしまった。むこうではマイクのようにして自分の名前を言うらしい。

この検査で引っかかるともういちどきちんと測定をして、それでも陽性のときは血を抜いて検査されるという。まあ噂だから本当かどうかは知らないけど。

〔バス・フェリー〕

バスといえば全国ネットのインターシティー Inter Cityが有名。でもバックパッカーでこれを利用する人は少ない。というのはシャトル・バスというもっと安い便が多数運行されているからだ。アトミック・シャトル Atomic Shuttleは比較的大きなネットワークを持っている。ほかにたくさんの小さい会社がある。人気路線ではインターシティー同様の大型車両を使うこともあるが、ほとんどはマイクロバスやワゴンを利用している。予約や詳細はインフォメーション・センターや宿のレセプションで行なう。

北島と南島を結ぶフェリーを利用する人は多いと思う。早めに予約をしておくとしゅーパーセーバー Super Saverと呼ばれる早割チケットを取れることがある。割引率によって席数が決まっていて、最大で半額になる。Tranz Alpineなどの列車、Inter Cityにもこの制度がある。

[ヒッチハイク]

ニュージーランドでは移動手段としてのヒッチが定着している。日本人でもヒッチで旅している人は少なくない。時間がある人にはとても良い手段・体験だとおもう。

ステート・ハイウェイ State Highway (国道)であれば、1日待つ覚悟があればまず拾ってもらえる。二度目にニュージーランドへ行ったときはヒッチを中心にまわっていたが、長く待って3時間ほどだった。車の絶対数が少ないのと車の流れが速いために、日本に比べると率が悪いように感じた。いつもテントと食料と水を持っていたから気軽にできたけど、それがなければちょっと不安だったかもしれない。当然雨の日は確率がガクンと落ちる。

ヒッチをするポイントは、見とおしのよい道路であること、路肩に駐車スペースがあること、というのが基本だろう。町のまんなかではなく郊外までいくこと。大きな街の場合は郊外まで市内バスを利用するのもひとつの手だ。ヒッチのポイントとそこまでの移動手段は、宿のレセプションに相談すれば教えてくれる。

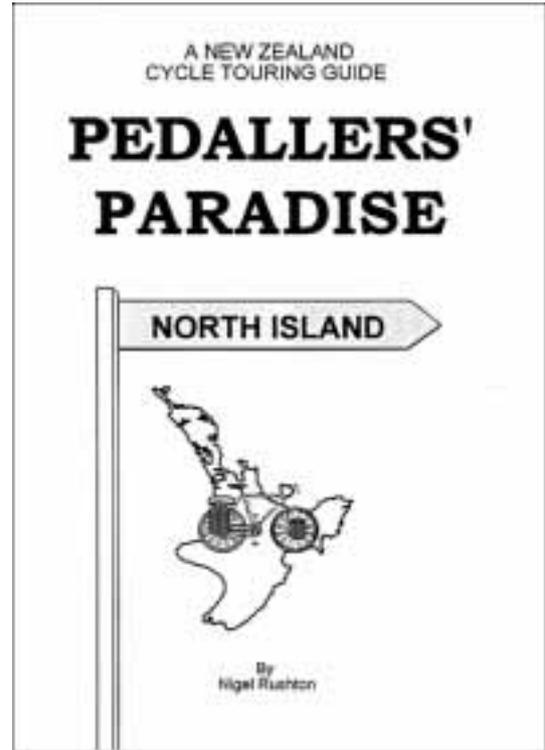
いちおう建前的なことを言っておくと、世界中どこへいってもヒッチハイクというのは薦められた行為ではない。ニュージーランドでは女の子ひとりというのを除けば犯罪に巻き込まれる心配はあまりない。でも地元の人々の運転の荒さは有名で、事故に合う可能性は非常に高い。リスクを負うことを忘れずに。

[自転車]

不思議とニュージーランドはチャリダー(自転車旅行者)が多い。日本はもちろん世界各国から集まってくる。ライダーがオーストラリアを目指すように、チャリダーにとってニュージーランドは一種憧れの地なのだろうか。

ぼく自身は自転車旅の経験はない。しかしモーターバイクで走っているかぎり、ニュージーランドの道は決してチャリダーにとって優しいものではないと思う。自然の地形そのままに、無意味に繰り返すアップダウンの多さと、傾斜の厳しさ。

日本で経験豊富なチャリダーが、数ヶ月あればニュージーランドを周れると踏んできたはいいいけど、意外と距離を稼げずに「3ヶ月のビジタービザがもう



すぐ切れる」と嘆いているのを何回も見た。

ニュージーランドは、長くても100キロ弱も走れば集落に着く。簡単な食料品が手に入る店やテイクアウェイ Take Away の店はかならずあるし、モーターキャンプなどの宿泊施設もあるから、ひどい過酷さはあまりない。根性さえあれば誰でもできる、のだろう。日本での経験もなくいきなりチャリ旅をはじめた女の子に何人もあって驚かされた。

サイクリスト向けに主用道路のアップダウンのチャートや途中の町の情報を載せた冊子がある。"a New Zealand Cycle Touring Guide - PEDALLERS' PARADISE" といい、チャリダーたちの一種のバイブル的存在らしい。Nigel Rushton という人が作った個人出版物で、テカポにある彼の経営する宿や、主要都市の本屋、インフォメーション・センターで手に入る。

日本から筆者に直接注文することもできるという。

筆者より直接購入

Nigel Rushton (ナイジェル・ラシュトン)

1 Aorangi Crescent, Lake Tekapo,
South Island, New Zealand

E-Mail: dabhand@voyager.co.nz

<http://www.voyager.co.nz/~dabhand/index.html>各ガイドブック(南島・北島)に対して千円札を
同封してください。ご自分の住所・氏名をはっきり
とお書き下さい。(日本語でも可)

[スモール・パーセル]

日本にちょっとした荷物を送る場合、スモール・パーセル Small Parcel が便利。ふつうの小包 Customs Parcel と違って、重量2kgまで、箱のサイズは縦横高さ合わせて900mmという制限があるけど料金は安い。たとえば日本宛てに2kgを船便で送る場合ふつうだと\$22、スモール・パーセルなら\$16で済む。

[旅先での手紙の受け取り方]

郵便局留めという方法もあるけど、ぼくはいつも宿宛てに送ってもらっていた。考えてみると、そのすべてがユース・ホテルだったように思う。別にユース・ホテルだったことに深い意味はない。ただユースであればあるていど公的なものなので、ちょっとくらい住所が間違っているても宛先だけで届くだろう、とおもったからだ。少なくともユース・ホテルでもバックパッカーズでもゲスト宛ての手紙を預かるのはごくふつうのことだ。

正式なやり方だかはわからないが、いつも次のように書いてもらっていた。

(例)

To: Ken AKIBA

C/O Napier YHA

277 Marine Parade, Napier

C/O というのは「気付」の意味だ。

宿に到着してチェックインをするときに「手紙きてない？」と聞けばいいし、場所によっては掲示板にピンで留めて公示していることもある。

[荷物を送るダンボールはスーパーで]

郵便で日本へ荷物を送る場合、手っ取り早くは郵便局 Post Shop でダンボール箱など梱包用品を買うことができる。すこしでもお金をかけたくなければスーパーマーケットへ行くといい。キャッシャーの外側の客が荷物を詰める台のしたあたりにダンボール箱が並べてある。これらは断りなく自由にもらっていったかまわないものだ。見当たらなければ手近な店員に聞けばどこにあるか教えてくれるだろう。ダンボール箱は英語ではカードボード・ボックス Cardboard Box という。

[郵便局でただでもらえるもの]

たいしたものではないけど、手紙に"By Air Mail"などと書くかわりに貼るステッカーが無料でもらえ

《 郵便局編 》

[日本へ封書は80¢でOK]

日本への手紙(封書)は\$1.50ということになっている。しかし実は80¢でも届く。これは航空便(Air Post)ではなく、飛行機の貨物の空きを見計らって発送するEconomy Post(日本でいうところのSAL便)扱いになるからで、公式には18~25日で着くことになっている。(航空便の場合は4~10日)

実際にぼくが日本へ帰ってきてから、ニュージーランドの友達から受け取った手紙を調べてみると、航空便でもエコノミー便でもかかる時間はほとんどかわらなかった。速いとエコノミーでも4日後に着いている。大きい荷物を送るならともかく封筒くらいなら、ほとんど待たされずに発送されるようだ。(時期によるかもしれない。クリスマス・シーズンは遅いだろう)

ハガキとエアログラムはエコノミー料金が規定されていない。すべて航空便扱いで\$1。世界どこ宛ても一律料金。でもたまに友達から80¢切手で届くことがある。

る。たいていはカウンターあたりにセロテープのような感じで置いてある。勝手に取ってきてかまわない。種類は航空便、エコノミー、船使用がある。ぼくはこれを封筒の口を留めるのに使ったりしていた。

ダンボール箱ももらえる。でもこれは半分インチキな裏技だ。荷物を海外に送る方法（航空便とか船便とか）にはいくつかあって、いちばん速い便（courier）は料金が高いせいか専用のダンボール箱がサービスでもらえる。真っ赤なダンボールで3種類の大きさがある。

本当はいけないんだけど、ぼくはこれを新聞紙で

カモフラージュして、船使用に使った。丈夫な作りなので、フラットの部屋でサイドテーブルがわりに使っている人もいた。

《 インターネット 》

ニュージーランドでは市内通話が基本料金に含まれているせいかインターネット普及率がたかい。大きい町にはサイバー・カフェがいくつもあり、インフォメーション・センター、ユースやバックパッカー

日本への郵便料金 (NZ\$)

	AirPost 4-10日	EconomyPost 18-25日	SeaPost 6-8週間
letters (封書)			
Medium	1.50	0.80	*
Large	2.50	1.50	*
X-Large	5.00	2.50	*
Small Parcel (kg) (簡易小包)			
0-0.1	2.50	1.80	1.80
0.1-0.25	7.00	5.00	4.00
0.25-0.5	12.00	9.00	7.00
0.5-1.0	19.00	12.50	10.00
1.0-1.5	27.00	16.00	13.00
1.5-2.0	35.00	19.50	16.00
Customs parcels (kg) (一般小包)			
0-0.5	17.00	13.00	10.00
0.5-1.0	25.00	19.00	14.00
1.0-1.5	33.00	25.00	18.00
1.5-2.0	40.00	31.00	22.00
2.0-2.5	17.00	36.50	26.00
2.5-3.0	54.00	42.00	30.00
3.0-3.5	61.00	47.50	34.00
3.5-4.0	68.00	53.00	38.00
4.0-4.5	75.00	58.50	42.00
4.5-5.0	82.00	64.00	46.00

封書サイズの上限 (mm)

	長さ	幅	厚さ
Medium	235	120	10
Large	325	230	10
Extra Large	385	260	10

ズにもコイン式の端末が置いてあることがある。図書館にも必ずある。

そうしたインターネット端末の最も有効な利用法はe-mailのやり取りだろう。長期旅行者のあいだではニュージーランド国内で知り合った人同士、また日本の友人との連絡に利用している人が多い。

旅行中でもメールアドレスの取得はおもいのほか簡単だ。アメリカの、

<http://www.hotmail.com>

<http://mail.Yahoo.com>

といったウェブサイトですぐ簡単にアカウントを開設できる。もちろん無料だ。

端末側のメールソフトによらず、ウェブサイトがそのままメーラーになっているので、ブラウザでインターネットに接続できる環境さえあれば、どこからでもメールの送受信ができる。もちろん日本に帰ってから、また別の国へいっても引き続き使える。

ただしあたりまえだけど、ページはすべて英語で、文章に使える文字も日本でいうところの半角英数字に限られる。つまり英語かローマ字で書かなくてはいけない。

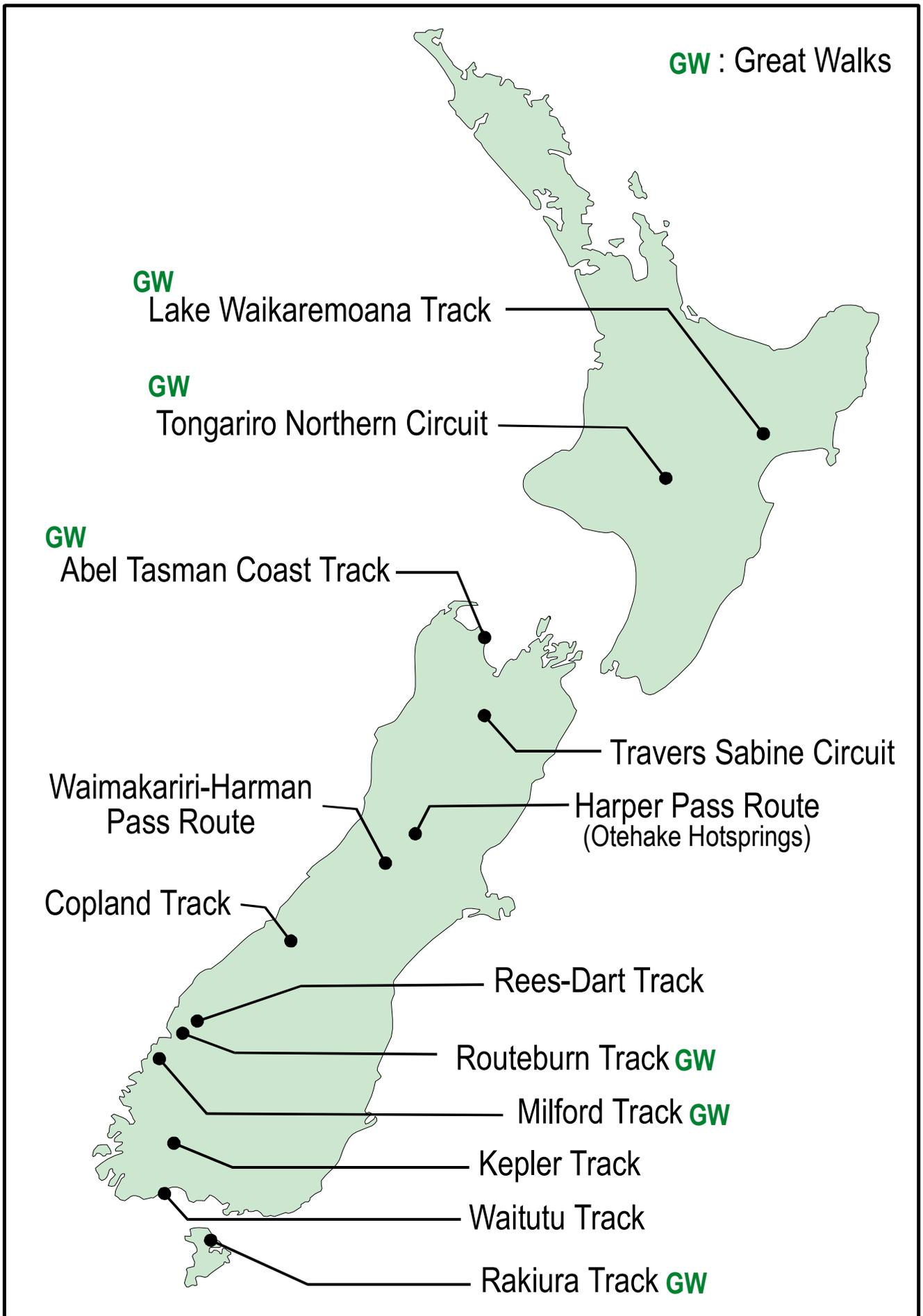
最近、Hotmailでは日本語モードが用意された。日本語環境の入ったマシンを使えば、ガイドやヘルプが日本語表示になり、送受信にも日本語を使える。日本に帰ってから引き続き使うつもりならHotmailのほうが便利だ。同様のサービスは日本国内でもあるし、さがせば世界中にたくさんある。

第3章 コースガイド

ニュージーランドには、実のところ100かそれ以上の「トラック」があって、それ以外にも全国にある900以上のハットをつないで、さまざまなトランピングを楽しめる。そのうち、僕がこれまでに歩いてきたコースを紹介していく。

本書で紹介するコース

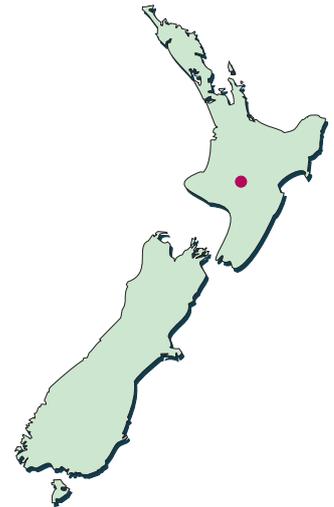
トラック	難易度	日数	特 色	おすすめ度
Tongariro Northern Circuit		4-5	荒々しい火山地帯と温泉	
Waikaremoana Lake Track		4	静かな湖畔	
Abel Tasman Coast Track		3-5	南国を思わせる海	
Travers-Sabian Circuit		5-6	山岳縦走	
Harper Pass Route		5-6	草原と温泉	
Waimakariri-Harman Pass Route		5-6	自然の厳しさと温泉	
Copland Track		2	雪山を眺めながらの温泉	
Rees-Dart Track		4-5	氷河、小気味よくかわる展望	
Routeburn Track		2-3	山岳展望	
Milford Track		4	太古を思わせる深い森	
Kepler Track		3-4	山岳縦走	
Waitutu Track		2-3	世界最大の歴史的な陸橋	
Rakiura Track		3	森の中の散歩道	



Togariro Northern Circuit

トンガリロ・ノーザン・サーキット

日数 4-5
 体力的難易度 易
 技術的難易度 中



概要

荒涼とした火山地帯を歩く。富士山そっくりのマウント・ナルホエ Mt.Ngauruhoe や、今なお蒸気を上げる噴火口レッド・クレーター Red Crater、茶色の台地にとつぜん現われる色鮮やかなエメラルド・レイク Emerald Lakes。世界遺産に選ばれるだけあってすばらしい景色が続く。ケタヒ・ハット Ketetahi Hut の近くには天然温泉も湧いている。

日程

マウント・ナルホエ Mt.Ngauruhoe を巻くように歩く周回コースで、国立公園のビジターセンターがあるワカパパ・ビレッジ Whakapapa Village を起点して4～5日でまわるのが一般的。途中に何ヶ所もアクセスポイントがあるので、夏季に運行されているバスを使えば比較的自由に計画を立てられる。見どころはトンガリロ・クロッシング Tongariro Crossing と呼ばれる特定の区間に集中していて、そこだけを日帰りでも歩くこともできる。北島でもっともすばらしいデイ・ウォークコースとして人気が高い。

ぼくは1泊目 Mangatepopo Hut、2泊目 Ketetahi Hut、3泊目 Waihohonu Hut を利用した。夏季のみ調理用ガス・ストーブが設置されている(12月～3月)。日本語表示のリンナイ製だったのは笑えた。Ketetahi Hut は他の小屋に比べて利用率が高く、夏季の週末はいっぱいになることがあるので注意が必要。ハット代は夏季シーズンは\$12。小屋に併設されているキャンプサイトは\$6

ベースになる町

最寄の町はワカパパ・ビレッジ Whakapapa Village。ここにはDOCのビジターセンターがある。ニュージーランドで最初の国立公園で、世界遺産にも登録されているこの地のビジターセンターは立派。この村はもともと人が住む村ではないので、生活臭のただようものはほとんどない。ホテルが一軒とDOC管轄のモーターキャンプ兼の売店(Whakapapa Holiday Park : 07-892-3897)があるだけ。夏季のみキャビンの一室がバックパッカーズ・ユニットとして\$12-50で泊まれる。あくまでモーターキャンプなのでキッチンに鍋などの調理器具はない。電熱器と給湯器だけがある。トランピングの間、余分な荷物を預ける場合はDOCで一回\$3。

トゥランギ Turangi の町をベースにする手もある。トゥランギはワカパパ・ビレッジとは違い、人の住んでいる町で、大手バス路線バスも乗り入れている。スーパーマーケットのNew World、DOCオフィス、バックパッカーズ、ユース・ホステルなどがある。夏季にはトンガリロへのシャトル・バスが運行される。



[トゥランギの宿]

・Bellbird Lodge

Cnr Tautahanga Rd &
Rangipoia Pl, Turangi
(07-386-8281)

\$15 テントサイト有

サイドトリップ

Mt. Ngauruhoe : 見事な円錐形の山で見るからに登りたくなってしまいう山。特別にルートがあるわけではなく、砂滑りのような急な斜面をひたすら上に登っていただけ。ふもとの South Crater から往復3時間弱。決して楽な道のりではない。靴に砂が入らないようスパッツ(gaiters)があると便利。

Ketetahi Hotsprings : Ketetahi Hut から10分ほどカーパーク方向に下ったところにある温泉。温泉というよりは地熱地帯という雰囲気。地面のあちこちに穴があいていてゴボゴボと煮えたぎった湯が湧き出している。源泉地帯から流れる小川をたどって、入浴に適した温度、深さの水溜りをさがす。適当な場所を見つけるのは難しい。湯は一見無色透明。しかしそこに真っ黒な泥がたまっていて身を沈めると泥水状態になる。タオルについた色はなかなか落ちない。温泉のある斜面からは眼下に Lake Rotoaria が一望できて気分がいい。日が暮れてくると遠くにタウポ (Turangi?) の町の明かりも見える。

ただしこの温泉、現在は立ち入り禁止になっている。というのはここは昔からのマオリの聖地だから。現在、このトンガリロ地方を巡って係争が起きている。マオリの人たちが入山禁止を求めているのだ。現時点ではトラック部分に限って特別にトランパーの通行が許可されているというのが現状。そういう事情を知っておいてほしい。また安全性の問題からも、かなり危険な場所であるのも確か。

Ohinepango Springs : Waihohonu Hut から往復1時間の清水。水量が多くて幻想的な美しさ。源泉からこんこんと湧き出す様が見てとれる。

トラック・ダイジェスト -1997年11月4日~7日

1日目 Wakapapa Village - Mangatepopo Hut 2時間40分

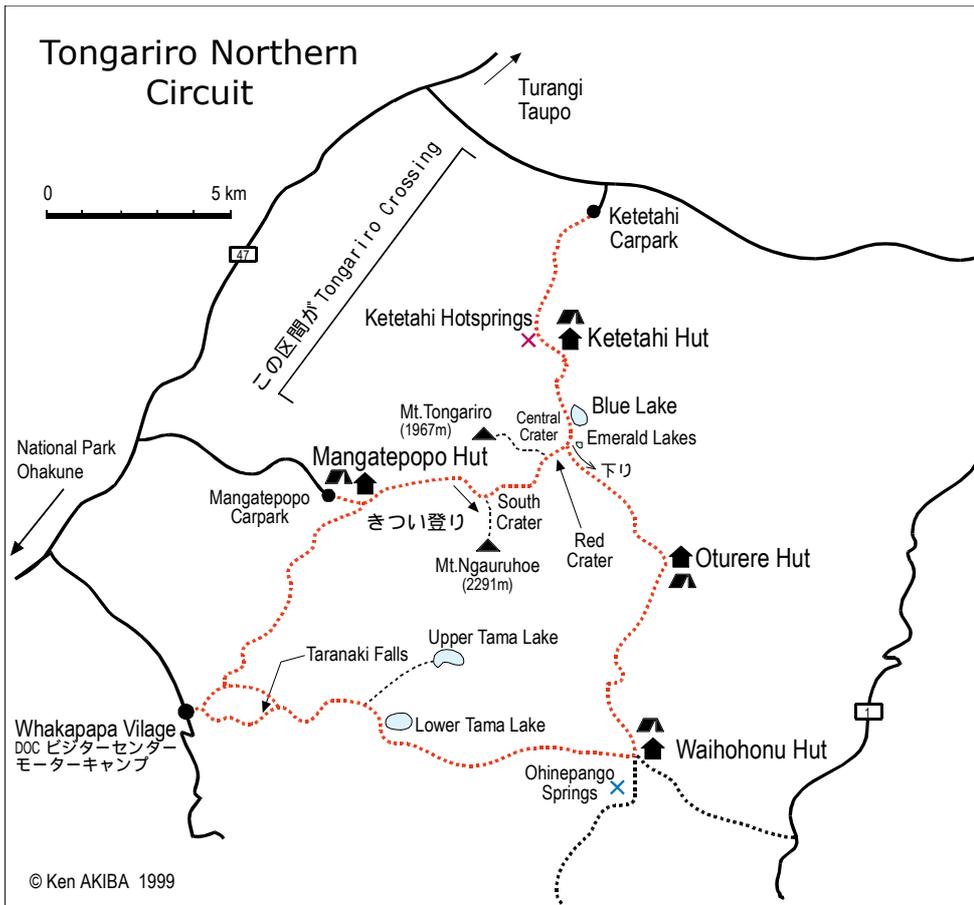
雲ひとつないいい天気。朝は冷えてTシャツ、ダンガリーシャツ、フリースジャケットでも少々寒かった。ワカパパ・ビレッジ Wakapapa Village のインフォメーションセンターに余分な荷物を預けて(\$3)、グレート・ウォーク・ハットパス(\$12 × 3日分)を買って10:05 出発。

舗装道路を少し歩くと左にトラックがはじまる。背の低い灌木ばかりの荒野のような場所を延々と歩く。あきれるくらいに平坦。右手に雪を戴いた富士山のようなきれいなシルエットの Mt. Ngauruhoe (2291m) が見える。そんな気持ちのいい、でもかわりばえのしない道を歩くこと2時間40分、マンガテポポ・ハット Mangatepopo Hut (24banks) についた。

時間があつたのでハットに荷物を置いて Mt. Ngauruhoe へ向かった。でも上に登るにつれて強風、寒さで断念。手が冷たく痺れてきた。やっぱり短パン、Tシャツ、フリース・ジャケットでは無理だった。でも2000m くらいは行ったと思う。

2日目 Mangatepopo Hut - Ketetahi Hut 4時間

朝8:45 出発。とても寒い。ハット内の気温は5 。ダンガリーシャツ、フリースを着て出発した。火山岩の堆積した荒涼とした大地を歩く。途中で



あるソーダ・スプリング Soda Springs は炭酸を含んだ泉ということだけ
 だ、崖の上から流れてくる川があるだけでなにが泉でなにが炭酸なのかわ
 からなかった。

サウス・クレーター South Crater の手前の登りはきつい。下から見上
 げると「本当にこれを登るのかよ」と思ってしまう。登り始めるとすぐに暑
 くなって上着を脱いだ。登りきると Mt. Ngauruhoe への登山口と正規トラッ
 クに分かれる。スノーポールをたどりながら広いクレーター(噴火口)を横
 断する。中は雪どけでぬかるんでいてブーツが重い。

クレーターの向こう端につくとふたたびさきほどの登りを思わせるような
 急斜面が待っている。

登りきってからレッド・クレーター Red Crater までの間がこのトラッ
 ク最大のハイライト。ダイナミックな景色を堪能できる。振り返れば美しい
 Mt. Ngauruhoe の勇姿が、レッド・クレーターからは硫黄くさい匂いと蒸気
 が立ち上る。そして突然眼下に現れる色彩鮮やかなのエメラルド・レイク
 Emerald Lakes。

エメラルド・レイクへ下りる斜面は急で砂が柔らかく積もっているから非
 常に歩きづらい。スパッツ(gaiters)があつたら便利だったかもしれない。
 斜面を降りるとトラックはケタタヒ・ハット Ketetahi Hut 方面とオトゥ
 レレ・ハット Oturere Hut 方面に分かれる。温泉に興味があつた僕はケテ
 タヒ・ハットに向かった。



レッドクレーター付近か
 ら見る Mt. Ngauruhoe



エメラルド・レイク

ケタタヒ・ハット Ketetahi Hut (24banks)へはセントラル・クレーター

Central Crater を横切っていく。クレーターは半分くらいが雪で被われていた。ブルーレイク Bule Lake への斜面をのぼり、あとは谷の斜面を巻くようにしてハットへいたる。ハットはタソック帯のなだらかな斜面の中腹に建っていた。この日の歩行時間4時間。標準では5～7時間とあったが、実にあっけなかった。

3日目 Ketetahi Hut - Waihohonu Hut 5時間

8:05 出発。来た道をエメラルド・レイクまで戻る。昨日下ってきたつづらおりの道の登りがきつい。

高台にあるエメラルド・レイクの脇からオトゥレレ・ハット Oturere Hut 方面へ左の斜面を下る。このとき眼下に開ける景色がダイナミックですばらしい。トルコあたりの岩石砂漠を思わせるような荒涼とした大地が広がっている。

斜面を降り、平らな砂地の上をスノーポールがオトゥレレ・ハットまで続いている。ケタタヒ・ハットからオトゥレレ・ハット Oturere Hut (24banks)まで2時間40分。

その先も似たような砂漠のような景色が続く。途中で帯状になった針葉樹林帯を通過した。森の中はちょっとしたのぼりになっている。樹林帯を抜けてもう一度別の樹林帯へ入ると、ワイホホヌ・ハット Waihohonu Hut (24banks)の屋根が見えた。この日の歩行時間は5時間。

4日目 Waihohonu Hut - Wakapapa Village 4時間

最終日。7:35 出発。淡々とした道がダラダラと続く。結局タラナキ・フォールズ Taranaki Falls の分岐点まで一本調子だった。時期的に雪をかぶった山が見えていたのがせめてものなぐさめだった。

風がとても冷たい。出発時で4℃、その後で9℃くらい。しかし風のせいで体感温度はマイナスになっていたと思う。鼻水は止まらないし、手は動かない。耳はしもやけになってしまった。

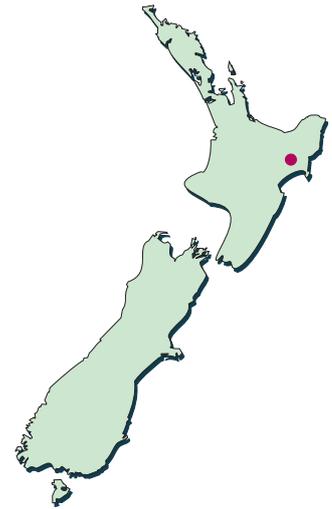
村のすぐ手前にあるタラナキ・フォール Taranaki Falls の分岐でトラックは2つに分かれる。滝の上側に行くか、下に行くかというだけの違いで、歩行時間はかわらない。下のルートのほうが滝を真正面に見えて面白いかと思う。

出発地点の Whakapapa Village に着いたのは11:30、歩行時間は4時間だった。

Lake Waikaremoana Track

レイク・ワイカレモアナ・トラック

日数 4
 体力的難易度 易
 技術的難易度 易



概要

北島にふたつあるグレート・ウォークのひとつ。このトラックのカラーは一言でいうと「静」。湖の周りを3/4周するトラックで、最初に登るパネケリ・レンジ Panekeri Range (山脈) 以外はおおむね平坦。とくに華やかなものはないけど、しずかで落ち着いたきれいな森と湖畔の景色が続く。湖沿いにいくつもテントサイトがあるので、のんびりとキャンプを楽しむつもりでいくといいかもしれない。釣りをする人には文句なしに良いところだと思う。北島にあるもうひとつのグレート・ウォーク、トンガリロ・ノーザン・サーキット Tongariro Northern Circuit が動的でダイナミックなのに比べるとやや地味なのは確か。

日程

トラックはどちら方向からでも歩ける。ここではDOCのプロシユアに従ってオネポト Onepot からスタートする。3泊4日で歩けるが、途中にある5つのハットの間隔が中途半端でどこに泊まるか迷う。ぼくは次のように歩いた。1泊目はPanekiri Hut、2泊目Matauiti Hut、3泊目Whanganui Hut。この行程だと2日目がちょっときつく、7～8時間歩くことになる。

ベースになる町

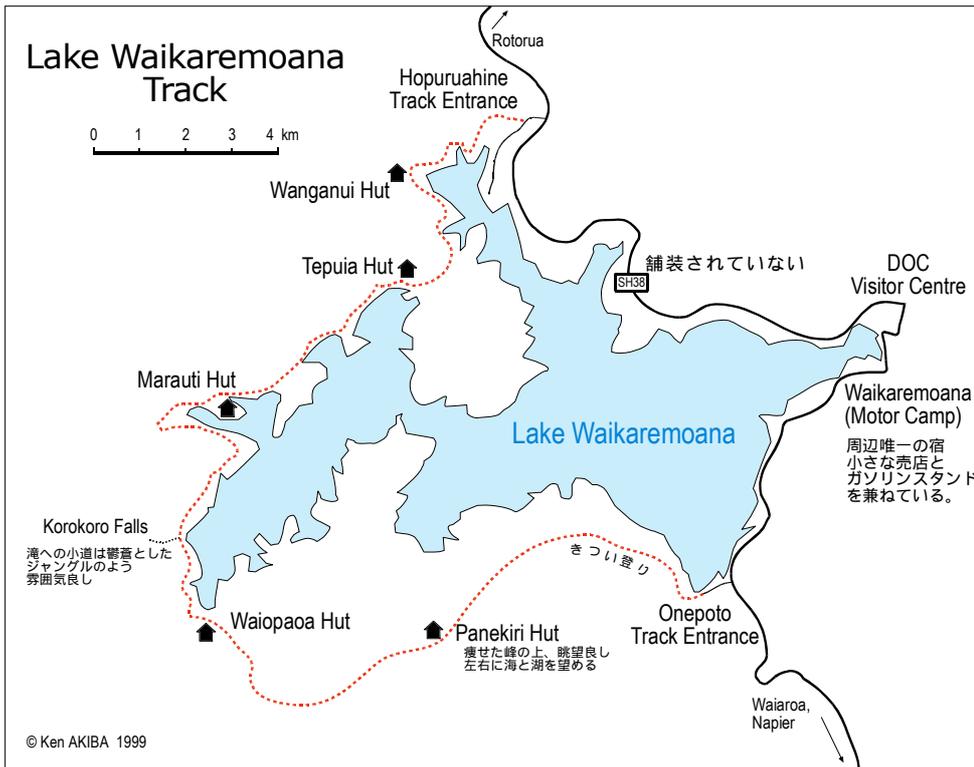
このあたりはきわめて辺鄙な場所で集落はない。湖畔にあるDOC経営の *Waikaremoana Motor Camp* (06-837-3826) が周辺唯一の宿泊施設。テントサイトは\$7-50、キャビンは\$40(2人)。キッチンに食器類はなく電熱器と給湯器のみ。荷物を預かってもらう場合一回\$3。食料調達はモーターキャンプの売店のみ。限られたものしか手に入らないので事前の買いだめは欠かせない。3キロほど離れた場所にDOCビジターセンターがあるが、ハットパスはモーターキャンプの受付でも買える。

アクセス

国立公園にアクセスする唯一の道路SH38は、その大部分が未舗装。ワイカレモアナに行くためには夏季のみ運行されるインターシティー Inter City のバスを利用するか、自分の車で行くしかない。バスはロトルア Rotorua からワイカレモアナ・モーターキャンプまでをピストン運行している。朝8:50ロトルア発、12:30ワイカレモアナ着。ふたたびロトルアに戻るのは夕方4:00。片道\$45。夏のハイシーズンならともかくふだんはこの道路を通る車はほとんどない。ヒッチハイクはかなり難しいと思う。

モーターキャンプからトラック入り口へは、スタートのOnepotoまで9キロ、Hopuruahineは15キロある。初日と最終日の歩行時間は長くはないの





で、時間的には歩きのアクセスも可能。モーターキャンプからボートによる送迎サービスがある。どちらのトラックエンドまでも \$20。

トラック・ダイジェスト -1997年10月2日～7日

1日目 Onepoto Track End - Panekiri Hut 5時間

トラックエンドのオネポト Onepotoまで歩くつもりでいたが、運よくすぐに車に拾ってもらえた。

トラックはすぐに急な登りになる。尾根にそってひたすら森林地帯を登っていく。ある程度標高をかせぐと湖に面した絶壁の上に出る。ここからの景色がこのトラックのハイライトのひとつ。荷物をおろして崖のふちに腰をかけるとつい時間を忘れてしまう。レンジに乗ってからさらに森林のなかを行くと標高1180メートルのパネキリ・ハット Panekiri Hut (36 banks)に着く。ハットは痩せた峰の上であり、両脇に海と湖が見えて気持ちがいい。

2日目 Panekiri Hut - Marauti Hut 7時間

朝、海から昇る日の出を見ようと思ったが寝過ごした。しばらくレンジ(山脈)にそって歩くが、やがて急な下りになる。ここからはいままで見られなかった湖の西のほうを眺望できる。3時間ほどで湖畔に下りてワイオパラ・ハット Waiopara Hut (22 banks)に着く。ここからはずっと湖沿いを歩いていく。いたるところに小川が流れ、じめっとした熱帯のような雰囲気。とくにサイドトリップでいくコロコロ・フォール Korokoro Falls(滝)への道の雰囲気がいい。原生林に分け入っている気分だ。途中に飛び込みたくなるような小さな滝や淵がたくさんあった。湖畔にテントを張ってのんびり

りするのもいいんじゃないかと思った。分岐から滝まで往復1時間半。

その先、小さなアップダウンが多く、ぬかるんでいる箇所も多くやや疲れる。マラウイティ・ハット Marauiti Hut (18 banks)に着くまでにプライベート・ハットとDOCのベース・ハットがあって、ちょっとまぎらわしい。

3日目 Marauiti Hut - Whanganui Hut 4時間半

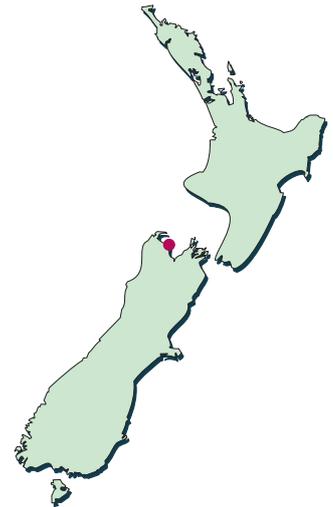
草原地帯を抜けて、ふたたび森の中へ入る。大きな高低差はないが、小さなアップダウンが多い。とくに景色に変化もなく、ときどき湖が見え隠れする道を淡々と歩いていく。テ・プイア・ハット Te Puia Hut (18 banks)へは2時間半くらい。さらに2時間でワンガヌイ・ハット Whanganui Hut (18 banks)に着く。ワンガヌイ・ハットは水道が外にありテーブルも小さく、これまでの他のハットに比べて設備がすこし劣る。

4日目 Whananui Hut - Hopuruahine Track End 3時間

最終日の行程はみじかく、2時間ほどで船着場につく。陸路で戻る場合は、さらに1時間歩いてHopuruahine Bridgeへ。そこから車道に出て、モーターキャンプまで約15キロ。道は決して平坦ではない。ロトルア～ワイカレモアナを結ぶバスの通過時間に合わせて行くのもひとつの手だ。

Abel Tasman Coast Track

エイベル・タズマン・コースト・トラック



概要

海がきれいな海岸沿いのトラック。南島の北端、年間をとおして天気が安定した温暖な地域にある。南国を思わせる海の美しさはさることながら、山のなかもジャングルのような植生で太古を思わせる。海や川での水遊びや、干潟で採り放題の貝(コックルスが主)も魅力的。途中にたくさんのキャンプサイトとハットがあり、トラックへのアクセスポイントも複数ある。ポートによるトランスポートが充実しているので、誰でも気軽に楽しむことができる。森の中を歩いたり砂浜を歩いたり、干潟を渡ったりと日本の山歩きにはない変化を楽しめる。道はよく整備されて子供でも問題なく歩ける。ニュージーランドでもっとも多くの人に歩かれているコースということで、1999年度より、山小屋およびキャンプサイトが予約制になった(夏季シーズンのみ)。ウォータータクシーを使って、日帰りで歩く場合は従来どおり許可はらない。

日程

トラックへのアクセスポイントが何箇所もあり、ポートのサービスもあるので、日帰りから数泊まで、さまざまな予定が立てられる。トラックをすべて歩こうと思ったら、南端のマラハウ Marahau から、北の岬をまわってワイヌイ・ベイ Wainui Bay のカーパークまで、というのが標準だ。

この場合4日から5日かかる。しかしワイヌイは交通の便がよくないので少し手前のトタラヌイ Totaranui で切り上げる人も多い。ここはナショナルパークのベースになっているところで、DOCのキャンプ・グラウンドや売店などがあり、いつも人でにぎわっている。

トラックはおおむね平坦で歩きやすいので、急ごうと思えばいくらでも速く進める。しかし遊べる場所が多いので、できれば時間をかけてゆっくりまわりたいところだ。途中に干潮のときしか渡れないポイントが2カ所あるので、それによっても計画が左右される。

ベースになる町とアクセス

この地方の路線バスの多くはネルソン Nelson を起点にしている。ネルソンは大きな街だ。国立公園から70キロ近く離れているが、街の便利さを考えたらネルソンベースで行動するのもいいと思う。Abel Tasman Coachlines (03-548-0285) がネルソンとトラックの両エンド(マラハウ Marahau とワイヌイ Wainui) を結ぶバスを運行している。いちばん距離のあるネルソン - ワイヌイ間の料金で片道 \$26。

[ネルソンの宿]

- ・Paradiso : 42 Weka St. Nelson (03-546-6703) \$16 テントサイト有
古い邸宅を改装したバックパッカーズ。プールやサウナがあり、B P lisäksi



1999年度の夏からミルフォード・トラックなどと同様、ハットの予約システムが導入された。キャンプサイトも同様。

ハット : \$14
テント : \$7

らぬゴージャスな雰囲気。人が多いのが難点。

・Nelson YHA : 59 Rutherford St. Nelson (03-545-9988) \$18

広々とした人気のユースホステル。雰囲気が気に入って長期滞在する人もおおい。でもちょっとビジネスライクなのが気になった。

僕はネルソンからさらに50キロほど公園に近いモトゥエカ Motuekaを基点にした。田舎町だけど、大型スーパーマーケットのニュー・ワールド New Worldがあって便利だ。インフォメーション・センター、銀行などもある。なによりここにあるバックパッカーズではトラックまで無料で送迎してくれるのが大きかった。

[モトゥエカの宿]

・The White Elephant : 55 Whakarewa st, Motueka

(03-528-6208) \$16 テントサイト有

とても広い庭で芝生のテントサイトが快適。トラックへの無料送迎有り。キッチンの使い勝手が悪いのが難点。

トラックの入口はモトゥエカからさらに15キロほど先のマラハウ Marahauにある。ここは小さな集落で町としての機能はほとんどない。バックパッカーズとモーターキャンプがあるので、事前に食料調達をしておけばベースの町としても使える。バックパッカーズで簡単な食料も売っているが品揃えが悪いし、高い。

[マラハウの宿]

・The Barn Backpackers : Harvey Rd. Marahau

(03-527-8043) \$15 テントサイト有

トラックの南端側になると僻地の趣が強くなる。このあたりはゴールデン・ベイ地方 Golden Bayといわれているが、そこで唯一町と呼べるのがタカカ Takakaだ。中型スーパーマーケットのスーパー・バリュー Super Valueがあり、DOC オフィス、銀行もある。芸術家の集う町としても知られ静かながら活気のある町だ。

[タカカの宿]

・Annie's Backpackers : 25 Motupipi St. Takaka (03-525-8766) \$15

町のほぼ中心にある。

以上、紹介した町はすべて Abel Tasman Coachlines(03-548-0285)のバスが停まる。その他いくつかのバス会社がこの地域を運行している。

ハット

ハットは5つあり、それぞれバンク数(ベッド数)は、Anchorage(24 Banks), Bark Bay Hut(25), Awaroa(25), Whariwharangi(20)。グレート・ウォーク・ハットだが、クッキング・ストーブはない。キャンプ用コンロの持参が必要。一泊\$14。1999年度夏より、ミルフォード・トラック、ルートバーン・トラックに続いてハットとキャンプサイトの予約制が導入された。事前にD

OCやインフォメーションセンターに問い合わせ、予約の空き状況を確認、ブッキングしておくことが必要。

Awaroa Hut の近くには民間のバックパッカーズもある。Awaroa Lode & Cafe (03-528-8758)。一泊\$20(12月25～2月28日は\$25)。ベッド数が限られるので予約は必須。

このトラックは、夏場にはいつも人でごった返していると思ったほうがいい。ハットを利用するなら、早めに到着しないとベッドを確保できないこともありうる。とくにAnchorage HutとTorrent Bay Hutが要注意。天気の安定した地域なので最初からテント泊のつもりで行ったほうがいいかもしれない。

キャンプ・サイト

トラック上にはたくさんのキャンプサイトがある。テント泊の場合キャンプ・パスを買っておく。1泊\$6。ぼくが泊まったところを中心に簡単に紹介しておく。

Anchorage: ハットのちかくのひろいキャンプサイト。屋根のついた炊事棟がある。ボートで乗りつける人が多く、明らかにトランピングじゃないような豪華なテントサイトが目立つ。子供たちがサッカーをしたりしてちょっと落ち着かない。

Te Pukatea: アンカレッジのキャンプサイトから山を越えて20分ほどのキャンプサイト。こぢんまりとして静かだが、カヤッカーばかりでちょっと世界が違うかんじ。水道はアンカレッジに戻らないとない。

Tonga Quarry: 林のなかと砂浜にサイトがある。ちょっとサンドフライが気になるけど、広々として気持ちの良いキャンプサイト。トイレ・水道有。うしろに小川が流れていて、水浴びも可能。

Onetahuti Beach: ひろい海岸。だだっぴろくて殺風景なかんじ。裏の林の中に水浴びに適した小さな滝がある。トイレ・水道有。

Anapai Bay: まっしろな砂浜で、林の中に隠れるようにキャンプサイトがある。

Mutton Cove: ちいさな海岸段丘に位置する。このあたりまでくると人影も少なくプライベートビーチのような気分になる。トイレ・水道有。

AnchorageとMutton Coveのキャンプサイトではハット・ワーデンのチケットチェックがあった。

その他

[干潮時間を調べる]

コース上で干潮時しか渡れないセクションが2カ所ある。アワロア・ベイ Awaroa Bay についてはどの本でも書かれているが、その手前のオネタフティ・ビーチ Onetahuti Beach(Big Tongaともいう)も要注意だ。ビーチの北端部分の通過は満潮時には濡れる覚悟が必要。アワロア・ベイの通行可能時間(干潮の前後2時間)を目指して歩けば問題ない。

潮のひいた干潟を歩くといっても、ところどころに流れが残っている。

まったく足を濡らさずに歩けるとは思わないほうがいい。本来なら靴のまま水に入るべきだけど、抵抗があるならサンダルを持っていくことを勧める。とくにアワロア・ベイは貝殻だらけなので、はだして歩くと時間がかかるし、あげくのはては貝殻で足を切ってしまう。

アワロア・ベイはとてもひろい湾で、ルートを見失いやすい。対岸にオレンジ色の目印があるが、双眼鏡でも使わないと見えない。DOCのプロシユアに加えてコンパスがあればいいけど、なければ先を歩く人を見つけるか足跡と勘を頼りに進むことになる。

このほかトレント・ベイ Torrent Bay とバーク・ベイ Bark Bay は、干潮時に湾内を横断してショートカットすることができる。

[飲料水 煮沸は必須]

エイベル・タズマンではハットの水道の水でさえ3分以上の煮沸が推奨されている。マトン・コーブ Mutton Cove で気づいたのだが、夜になると10匹以上のポッサムが現われた。こいつらが寄生虫媒介の原因なのだろう。

このトラックを歩くためだけにクッキング・ストーブを買うのがバカバカしいという人には、近隣のバックパッカーズでレンタルも行なっている。浄水目的だけなら Portable Aqua などの浄水剤がトランピング・ショップで手に入る(たぶんネルソンまで戻らないと手に入らないと思う)。浄水剤で消毒した水は猛烈にまずい。

トラック・ダイジェスト -1998年1月6日～9日

1日目 Marahau - Anchorage 4時間

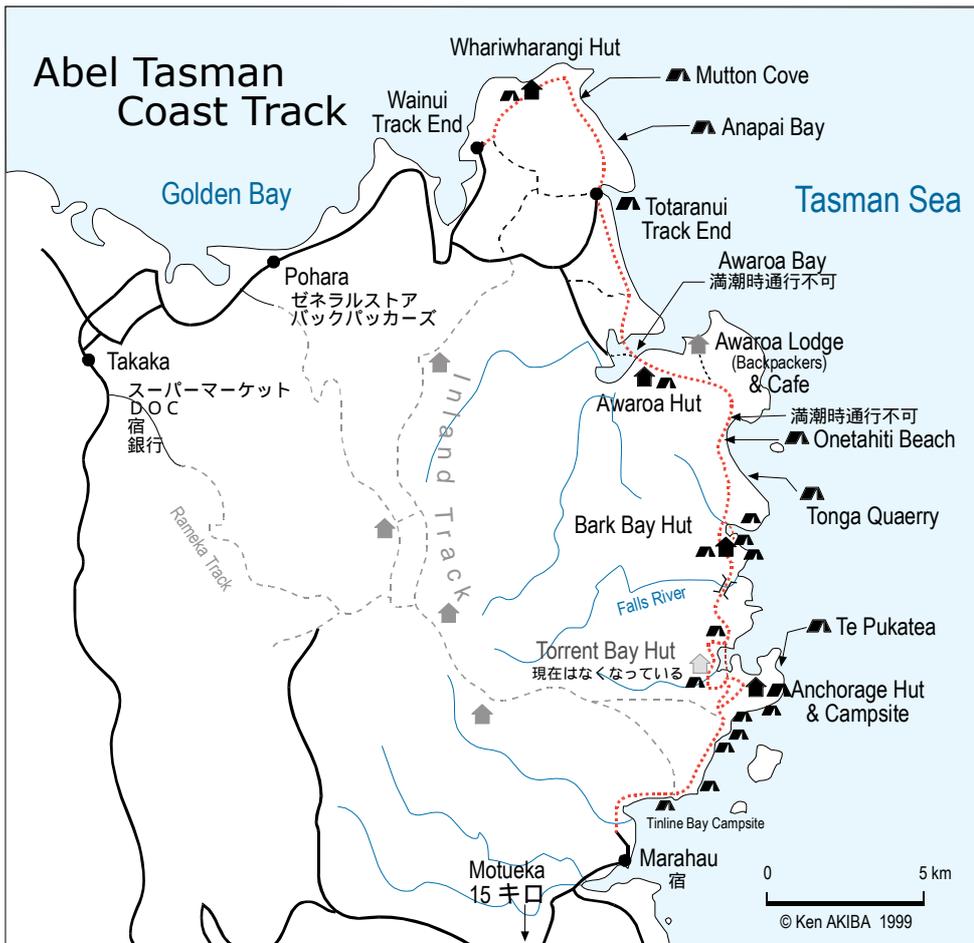
バックパッカーズのオーナーに送ってもらい、トラックの入口、マラハウ Marahau に降り立った。天気が安定していると言われる地域なのにあいにく小雨のバラつく曇り空。マラハウはモーターキャンプ、バックパッカーズ、土産物屋があるだけの小さな集落だ。集落のはずれにひときわ立派なシェルターがあり、エイベルタズマン・コースト・トラックが始まる。

シェルターからは潮の引いた湾に行く木道がつづく。ほどなくして登り加減のトラックが始まる。歩きはじめて30分もするとトラック脇にキャンプサイト(Tinline Campsite)が現われる。こんな中途半端な場所に泊まる人がいるのかなと思ったら、まばらながらもいくつかテントが張ってあった。

エイベル・タズマンコースト・トラックは海沿いを歩くトラックだ。かといってずっと砂浜や岩場を歩くというわけではないらしい。むしろジャングルという雰囲気のある場所が多い。あたりは大きなシダの目立ち、南国のや太古の森を思わせる。チョロチョロと小川が流れ、小さな滝がいくつもある。ときどきそのシダの向こうに海と空のきれいな青が顔をのぞかせる。

次のコーナーを曲がったらどんな景色が見えてくるんだろう、そんな期待を抱かせる海と山の変化に富んだトラックが続いていく。トラックの整備状況はよく、舗装されていないだけの歩道といってもおかしくないくらいの快適な道だ。

やがて森を抜けて広々とした丘に出る。丘を登りきると眼下にトレント・ベイ Trrent Bay とアンカレッジ Anchorage の一大パノラマが広がる。湾



内にはたくさんのヨットが見えた。あとは眼下の海まで一気に下っていく。

アンカレッジ・ハット Anchorage Hut は砂浜から一段上った林の中にある。近くに林と芝生の広々としたキャンプサイトがあり、たくさんの人がテントを張っていた。しかしどうみてもランパーではない人が多い。大きな家型テントをデンと構えて鉄板でステーキを焼いている家族や、サッカーに興じる子供たち、冷えたビールをおいしそうに飲む人。ほとんどはカヤックや自家用ヨットで来た人で、ここぞとばかりに贅沢なキャンプを楽しんでいる。

そんななかランパーならではのつつましい食事をするのはちょっと寂しかった。

2日目 Anchorage - Tonga Quarry (Campsite) 5時間

アンカレッジのビーチから岬をひとつ越えるとトレント・ベイ Trrent Bay に出る。潮が引いていれば(干潮の前後1時間)この湾を横断して時間を短縮できる。湾内にオレンジ色のディスクのついたポールがたっているのをそれを目印に広い湾内を歩いていく。水が干上がっているとはいえ所々に流れが残っている。積もるようにたくさんの貝殻が落ちているので裸足で歩くと非常に危険。サンダルがあると便利。なければ靴のまま入るかせめて靴下だけでも履いておいたほうがいい。

広い湾を渡りきると船着場があり、小さな集落があった。どんな人たちが

と鮮やかな青の海。ここからの見下ろすビーチの景色がエイベルタズマン・コースト・トラックの代表的な風景といわれている。

美しい景色を堪能したあとは一気にビーチへ下りていく。オネタフティ・ビーチには広々としたテントサイトがあり、裏の森の中には水浴びに適した小さな滝がある。まさに理想的な海水浴場なのだが、ニュージーランドの水は真夏でも冷たく、水に入るには勇気が要る。

オネタフティ・ビーチの北端部分に小さな流れがあって、満潮時には通行が難しい。引潮の3時間以内が安全圏と言われている。

トラックはビーチを離れて緩やかに登って行く。やがてトンガ・サドル Tonga Saddle(260m)を越えて下り始めると、正規トラックと民間のアワロア・ロッジ&カフェへ分岐がある。どちら行っても結局道はつながるから問題ない。アワロア・ロッジ&カフェは国立公園のなかに突如として現われる民間の施設で、冷えたビールや食事がとれる。もちろん適当とはいいがたい値段なので誘惑に負けそうな人は最初から避けたほうがいいのかも。

アワロア・ベイは大きな湾で、内陸のルートはなく、潮の引いた湾を横断する以外に道はない。(ボートを使うという手段もあるけど)干潮時間の前後2時間が横断可能。とにかく広い湾で、横断ルートにはオレンジ色のサインがついたポールがたっているけど、わかりにくい。干潮のピークでも膝下くらいの深さの流れがあちこちに残っているのでその覚悟は必要。湾を渡りきり、山の中のトラックを抜けるとあとはずっと海沿いのコースが続く。

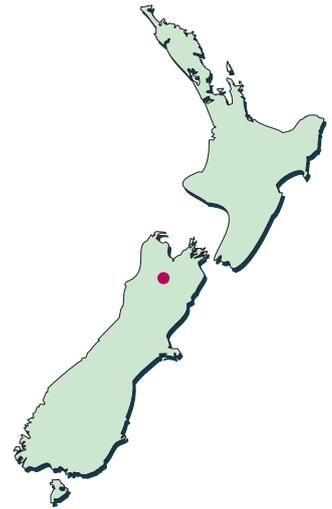
トタラヌイ Totaranui はタカカ Takaka 方面からの道路がつながっており、エイベルタズマン・ナショナルパークのベースとも言える場所で、いつも人で賑わっている。大きなDOC直轄のモーターキャンプ、ビジターセンター、公衆電話などがある。ネルソンからのバスやウォータータクシー(ボート)の便も頻繁にあって、ここでトランピングを切り上げる人も多い。

トラックはここからさらに北に延びているが、この先を歩く人は少ない。だからこそ本来の静かなエイベルタズマン・コースト・トラックの雰囲気を楽しめるとも言われている。たしかにトタラヌイ以北はこれまでと雰囲気がだいぶ違った。目の前の景色はすべて自分のものという雰囲気、自然と自分が一対一という感覚。静けさをこよなく愛するという人にはぜひ歩いてもらいたい場所だ。ただ残念ながら僕は相棒の都合でトラックを完歩せず、マトン・コーブ Mutton Coveでキャンプして翌日トタラヌイに引き返してしまった。

Travers-Sabine Circuit

トラバース・サバイン・サーキット

日数 5-6
 体力的難易度 中
 技術的難易度 難



概要

中級者から上級者にかけて人気のあるバックカントリー・トラック。南島の中央を走るサザンアルプスの最南端にあたるネルソンレイク・ナショナルパーク Nelson Lakes National Parkにあり、本格的なアルパイン・クロッシングが楽しめる。セント・アーナード St.Arnaud の町をベースにした完全な周回コースでアクセスが容易。DOC 公式コースガイドではTraversとSabineの二つの谷をまわってくるのが標準になっている。でも両谷の間にあるアンジェラス・レンジ Angelus Rangeに沿って戻ってくるのがお奨め。このセクションはトラックではなくルートになる。視界が良好なら問題ない。アンジェラス・ハット Angelus Hut は山脈上のカルデラ湖(?)のほとりにあるハットで、ロケーションがすばらしい。ここをベースにあたり山々を散策するのもおもしろい。

ベースになる町と宿

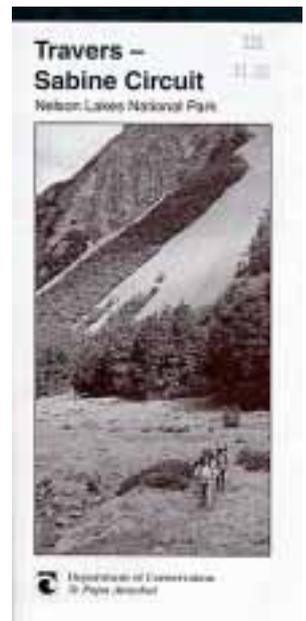
レイク・ロトイチ Lake Rotoiti のほとりにあるセント・アーナード St.Arnaud の町。ここにはDOC ビジターセンター、バックパッカーズ、ホテル、ユースホステル、レストラン、ゼネラルストアがある。トラック入口のKerr Bay湖畔にDOCのモーターキャンプがあり、数ドルで泊まれる。コイン式のホットシャワー、調理用電熱リング、給湯器のあるキッチンがあり、夏はたくさんのキャンパーでにぎわっている。

- *The Yellow House St.Arnaud* (03-521-1887) \$18
泊まるとはいないのだが覗いてみるかぎりリビングもベッドルームもせまく、快適には見えなかった。
- *Alpine Chalet* \$18
ゼネラルストアの向かいにあるレストランの二階がバックパッカーズになっている。広くてきれいで快適。ただシャワーがコイン式だったり、ちょっとビジネスライクな所が気に障る。

アクセス

セント・アーナード St.Arnaud へは、ネルソン Nelson からバスが出ている。*Wadsworth Motors* (03-522-4248)。運行は月・水・金曜日で片道\$12。*Nelson Lakes Transport* (03-548-6858)はネルソンから日曜日以外毎日運行していて\$18。ピクトン Pictonからは*The Nelson Lakes Shuttles* (03-521-1887)が月・水・金曜日に運行、片道\$23。その他ピクトンとグレイマウス Greymouth を結ぶ路線が使える。

セント・アーナードからトラック入口 Kerr Bayまでは歩いて10分ほど。



Kerr Bay からポートサービス *Water-Taxi* (03-521-1894)を利用して最初の湖沿いの2時間分をショートカットすることも可能。Lake Head Hut 付近まで\$10(ただし他に利用者がいない場合は\$40)。反対側のトラック・エンドにあたる West Bay までは\$8(同\$36)。

ハット

Lakehead Hut(35bunks): カテゴリー2。長逗留する釣り人やハンターが多い。

Coldwater Hut(6bunks): カテゴリー3。

Hopeless Hut(12bunks): カテゴリー3。サイドトリップでいく。人が少なくダイナミック景色を独り占めできる。

Cupola Hut(8bunks): カテゴリー3。サイドトリップ。小屋はきれいとはいえないが「山小屋」というかんで味がある。ロケーションもいい。

John Tait Hut(35bunks): カテゴリー2。草原に建つ大きくて立派な小屋。

Upper Travers Hut(14bunks): カテゴリー2。岩肌が剥き出しの山に囲まれたハット。

West Sabine Hut(10bunks): カテゴリー2。

Sabine Hut(10bunks): カテゴリー2。

Speargrass Hut(6bunks): カテゴリー3。

Angelus Hut(30bunks): カテゴリー2。ロケーションも居住性も申し分ない。ここへ泊まるのがトラックのハイライトといってもいいくらい。

Bushline Hut(?): カテゴリー3。プラットホームタイプのベッドで10人くらいは収容可能だったと思う。町から数時間でつくハットだが、ロケーションがよく、利用者も少ないのでけっこう穴場。



John Tait Hut



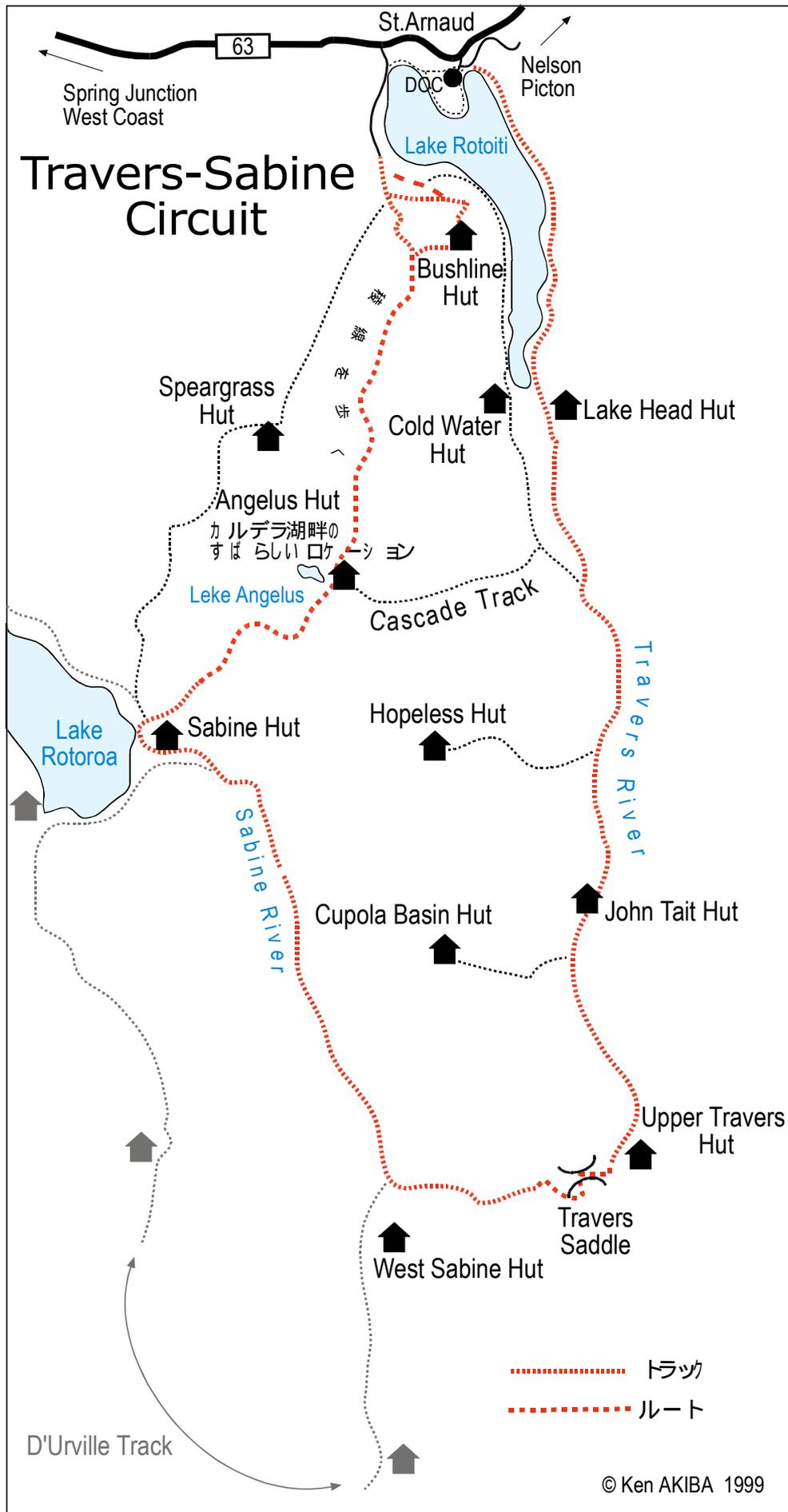
Angeius Hut

トラック・ダイジェスト -1998年3月18日~23日

ロトイチ湖畔のキャンプ場脇からトラックが始まる。最初は湖に沿ってひたすら平坦な森の中を歩いていく。湖のどん詰まりにあるレイクヘッド・ハット Lake Head Hut までは2時間。ハットは草原の中にあり、ここから先はトラバース・バレー Travers Valley (谷)をトラバース・サドル Travers Saddle (鞍部)までさかのぼっていく。両脇を山脈に囲まれた草原の谷をいく。広い谷底は奥に行くにつれて狭まっていく。John Tait Hut までは6時間から8時間。距離はあるがそれほど苦労せずに歩けるはずだ。山の岩肌が迫ったアッパー・トラバース・ハット Upper Traverse Hut まであまり高低差がない。しかしハットを過ぎるとすこしづつ登り始めて、最後はガレ場のような急な斜面を経て、トラバース・サドル Travers Saddle につく。実は僕はこの先には行っていない。引き返してカスケード・トラック Cascade Track を使ってアンジェラス・ハット Angelus Hut へ向かった。ただの気まぐれで他意はない。



Kerr Bayトラック入口付近から望む Lake Rotoiti。正面の谷が Travers Valley。





息を呑むようなすばらしいロケーションに建つ Angelus Hut

アンジェラス・ハットへ通じるルートは3本あり、ふつうはトラバース・サドル Travers Saddle を越えて West Sabine Hut、Sabine Hut に泊まり、Mt.Cedric を経て Angelus Hut へ行く。Sabine Hut から Angelus Hut までは「トラック」ではなくスノーポールなどでマーキングされた「ルート」になっている。道は荒々しいもののマーキングがしっかりしているので天候さえ良ければ問題なさそうだった。

一方、ぼくが使ったカスケード・トラック Cascade Track はアンジェラス・ハット Angelus Hut へ通じる唯一の「トラック」だが、決して楽な道ではなかった。森の中のマーキングは分かりにくいところもあり、ブッシュライン(森林限界)を越えてからはマーカーがあるもののかなり険しい急な登り。ひどい強風もあいまって身の危険を感じたくらい。John Tait Hut から6時間半かかった。

Angelus Hut には2泊して、一日を辺りの散策にあてた。ダイナミックなロケーションで、近くの岩山に登ってポーとしていても気分がいいし、Mt.Angels や Mt.Cedric への登山もいい。

帰路は天候に問題がなければレンジにそってセント・アーナード St.Arnaud へ戻る。この日の行程は両脇の切れ落ちた峰歩きが大部分。天上界の人になった気分を満喫できる。その日のうちに町に戻ることはできるが、途中のブッシュライン・ハット Bushline Hut もおすすめの小屋のひとつ。レイク・ロトイチ Lake Rotoiti を見下ろす斜面にあり、地形図どおりの湖の形を実感できる。夜になると真っ暗ななかにポツリと光る町の明かりがきれい。中途半端な場所にあるので利用者は少ないようだ。

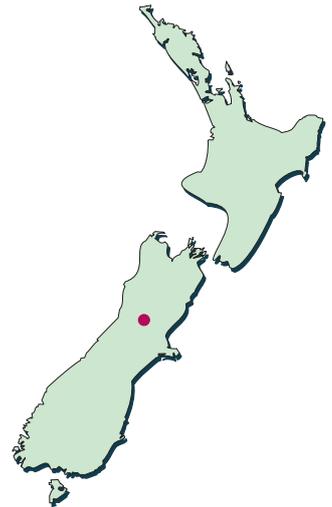


Traverse Saddle はあいにくの曇り空だった。

Harper Pass Route

ハーパー・パスルート

日数	4-5
体力的難易度	中
技術的難易度	中-難



概要

アーサーズ・パス Arther's Pass とルイス・パス Lewis Pass をつなぐ 80 キロの直線トラック。かつてウェスト・コーストへのアクセス手段として使われていた歴史的なコースでもある。トラックのほとんどは川沿いや森の中、草原で、険しい箇所はほとんどない。このトラックを歩く日本人はシーズンに 10 人以下で、そのほとんどは途中にある天然温泉が目当てのようだ。

日程

4泊5日で抜けるのが標準。このルートはハーパー・パス Harper Pass という 962 メートルの小さな峠を境に、アーサーズ・パス・ナショナルパーク Arther's Pass National Park とレイクサムナ・フォレストパーク Lake Sumner Forest Park にまたがっている。峠を境にトラックの様子もだいぶ違う。

ルイス・パス側はほとんどが森や草原で、トラックやルートマーカーがしっかりついている。川にはつり橋が架かっているので雨でも問題なく歩ける。

アーサーズ・パス側はタラマク・リバー Taramaku River に沿って進む「ルート」が大部分で、洪水が頻発するためにルート・マーカーは期待できない。地形図の携行が望ましい。川の渡渉があり、大雨のときは停泊を余儀なくされることもある。

アーサーズ・パス側からスタートすれば問題の部分は初日だけなので、天気の様子を見ながらこっち方向からスタートするほうが良いと思う。



ベースになる町

アーサーズ・パス方面からとルイス・パス方面、どちらからでも歩ける。それぞれ最寄りの町はアーサーズ・パス・ビレッジ Arther's Pass Village とハンマー・スプリング Hanmer Springs。最寄りといってもどちらもトラック入り口から数十キロ離れている。町の規模はハンマー・スプリングの方が大きい。いずれにしても食料調達はクライストチャーチなど大きな街で済ましておいたほうが良い。アーサーズ・パスで手に入る食料は極端に限られる。

アーサーズパス・ビレッジ Arther's Pass Village

ユース hostel とバックパッカーズ、DOC ビジターセンター、カフェ、レストラン、ゼネラルストアがある。ゼネラルストアで食料品は買えるが、缶詰やヌードルなど乾物が中心で値段も高い。ホワイトガソリンは置いてあったが、ガス・カートリッジは見かけなかった。

宿はユース・ Hostel とバックパッカーズがあり、どちらにもテントサイ

トがある。トランピング目的でいくなら Mountain House Backpackers (03-318-9258)がおすすめ。マネージャーが山に詳しく、夜などゆっくり相談にのってもらえる。彼は土日にはDOCオフィスで働いていて、なにかと頼りになる。

集落のまんなかにパブリック・シェルター Public Shelter というキャンプ場のようなものがある。シェルターは扉のしまる広いホールのような建物で、電灯と水道、テーブル、イスがある。原則的にシェルター内の寝泊まりは禁じられているが、その周辺でテントを張ることができる。1泊\$3。

ハンマー・スプリング Hanmer Springs

古くから知られる温泉保養地。ホーストレッキング、ラフティングなどのアクティビティーでも有名。中規模スーパーマーケットのFour Squareがある。安くはないが基本的な食料品は揃う。宿はモーターキャンプやバックパッカーズ、ユースホステルなど複数ある。

アクセス

アーサーズ・パス側のトラック入り口は、アーサーズ・パス・ビレッジから20キロほど西のエイケンズ Aickens というところにある。貨物列車の駅があるが町としての機能はまったくない。そこへの交通は、クライストチャーチ Christchurchとグレイマウス Greymouthを結ぶバスを利用する。大小いくつかの会社が定期便を運行しているので途中ドロップ・オフを頼む。率はあまりよくないが一本道なのでヒッチも可能。また列車トランツ・アルパイン Tranz Alpineで下車することもできる。

下表のほかインター・シティー Inter Cityのバスが、Christchurch 9:00am Arther's Pass 11:22am Greymouth 1:25pm、また午後の便として 2:25pm-4:27pm-6:35pm で運行している。

ルイス・パス側のトラック入り口はウィンディー・ポイント Windy Point と呼ばれている。近くにアウトドア・スポーツの研修所のような建物がある以外はなにもない原野だ。そこへはクライストチャーチとネルソンを結ぶ定期バスを利用する。行きはドライバーに言って途中でおろしてもらえばいいが、帰りはバスが通過する時間を見計らって、道路から合図して停まってもらう。国道からすこし入ったところにバス停のようなシェルターがあるが、

Coast to Coast Daily Bus Service 0800-800-847(Free Phone)

Christchurch	8:30am	5:40pm	
Arthers's Pass Village	10:30/11:00	3:00/3:30	\$25
Aickens	11:30頃通過	2:20	?
Greymouth	12:30着	1:15	\$35

Alpine Coachs 0800-247-888 (Free Phone)

Christchurch	2:45pm	12:20	
Arther's Pass Village	5:00	10:00	\$25
Aickens	5:20頃通過	9:20頃通過	?
Greymouth	6:30	8:30am	\$35

バスをつかまえるには道路脇まで出ていなくてははいけない。

White Star Bus (03-323-6165)がクライストチャーチに向けて1:25pmに、ネルソン Nelsonに向けて11:30pm頃に通過する。料金はクライストチャーチへが\$22、ネルソンへが\$41。また Mount Cook Landline (0800-80-0737 Free Phone)がネルソンへ12:00頃、クライストチャーチへ2:15pm頃通過する。他に East-West Shuttle (03-364-8721)もこの区間を運行している。

予約を入れていなければ、バスの時刻より早めにいってヒッチを試みるのもひとつの手だ。車の流れが速くて難しいが、逆にふだん人がいるような場所ではないので、緊急事態かと思って停まってくれることがある。

ハット

ルート上には8つのハットがある。多少ルートを外れるものを含めればさらにいくつかの利用できる小屋がある。アースーズ・パス方面から紹介していく。

Kiwi Hut (6banks): カテゴリー3。リバーベッド(川床)からかなり奥まったところにあり見つけづらい。中途半端な場所で利用頻度はひくい。

Locke Stream Hut (18banks): カテゴリー2。通常なら1泊目に利用するハット。広くて快適。水はすぐ下の川までくみにいく。国立公園ベースにつながる無線機あり。

Harper Pass Shelter (2 banks): とてもちいさなシェルター兼ハット。2段ベッドがひとつあり、マットレスは意外ときれいだった。狭いが宿泊に耐え得る。ファイヤー・プレイスあり。

Camerons Hut (4banks): カテゴリー4。とても古いハット。ベッドが4つあるが、床板が金網でボロボロの布製マットレスが3枚あったが使わない方がマシという感じだった。ファイヤー・プレイスがありぼくが行ったときにはハット内に薪が常備されていた。新聞紙やケロシン(灯油)が入った小瓶もおいてあった。しかしとにかくボロくて汚い。

No.3 Hut (18banks): カテゴリー3。通常は2泊目に利用する。本来は別な建物だったのではないかと思うようなかわった造りのハット。ぼくが泊まったときにはホース・トレックのツアーが利用していて、僕は小部屋のほうに追いやられてしまい、あまりよく観察できなかった。NZでは珍しく蚊がうるさかった。

Hurunui Hut (20banks): カテゴリー2。ゆったりとしていて快適。通常は3泊目に利用する。この少し先にNo.2 Hut というのがあったが現在は焼失している。

Hope Kiwi Lodge (24banks): カテゴリー2。ロッジという名のとおり広々としていて快適。他のハットとは明らかに異なる造りになっている。

Hope Halfway Shelter (6banks): かつてのハットで、現在はシェルター扱いになっている。ヒーターとマットレスが撤去されているが、木板のしっかりしたバンク・ベッドがある。特別に汚いわけではないのでロールマットを用意すれば快適に泊まれる。



Kiwi Hut



Locke Stream Hut



Camerons Hut



No.3 Hut



Hope Kiwi Lodge

地形図

1/50,000 地形図の場合、トラックをカバーするにはトポマップ Topomap 260-K33 (Otira)とL-32、L-33の3枚が必要。L-33の範囲はHarper Pass

の付近のごく一部だけで無駄が多い。1/80,000のパークマップ Parkmapなら273-01(Arther's Pass)と274-16(Lake Sumner Forest Park)の2枚でカバーできる。パークマップは「ルート」も部分も破線で描かれていてコース取りの参考にはなるが、等高線が甘くて地形が読みにくい。全行程分の地形図は必要ないと思うが、Locke Stream Hutから国道73号(SH73)までのルート部分だけは用意しておきたい。(Topomap 260-K33 (Otira)もしくはParkmap 273-01(Arther's Pass))

《サイド・トリップ》

* オテハケ・ホットスプリング Otehake Hotsprings

タラマク・リバー Taramaku River に流れ込む支流オテハケ・リバー Otehake River の上流に天然温泉が湧いている。川の中州(ちょっとした森になっていて小島と言った方がいいかもしれない)の縁に湧く温泉で、とてもきれいな硫黄泉。深さもあって完成度の高い温泉だった(ただし増水すると水没するのでコンディションの保証はしない)。

行き方は正規のハーパー・パス・ルートから外れ、オテハケ・リバー Otehake River をたださかのぼるだけ。場所は地形図のマークを頼りに特定するしかない。上級者向けなので、地図が読めて各種状況判断ができる人以外は行かないこと。本格的な川の渡渉がなんどもある。深さは最低でもモモくらいで流れがきつい。いちど渡渉ポイントを読み間違えて胸まで浸かってしまった。

オテハケ・リバー Otehake River へはLake Kaurapataka を経由するトラックを利用してもいいし、タラマク・リバー Taramaku River との合流から直接さかのぼってもいい。

タラマク・リバーとの合流からさかのぼる場合は、途中なんの目印もないので自分の判断でルートを決めていく。上流に向かって左岸をいき、吊り橋(Otehake Bridge)の手前くらいで右岸に渡るといいだろう。

どちらの行き方も吊り橋の下をくぐってからは合流して、4回くらい渡渉を繰り返しながらオテハケ・リバーを上っていく。温泉は吊り橋から1時間くらい。エイケンズ Aickens のトラック入り口からはからは6時間くらい(Lake Kaurapataka を経由するトラックを利用)。

小島の森のなかにキャンプに適した平地がある。ハーパーパス・ルート Harper Pass Route 上のキウイ・ハット Kiwi Hut を利用して日帰りで行くこともできると思う。ただしサンドフライが多いので、快適に入浴できるのは日没後。つまりテント泊のつもりで行くのが望ましい。

増水していると危険だけでなく温泉自体が水没してしまうので、くれぐれも気象情報には注意してほしい。



きれいな硫黄泉のオテハケ・ホットスプリングス



Lake Kaurapataka 方面への分岐点



温泉から歩いて1分のテントサイト。小島の中にある。

トラック・ダイジェスト -1999年2月14日～19日

1日目 Aickens Base Hut (SH73) - Locke Stream Hut 6時間

ここでは、アーサーズ・パス方向からスタートする行程で紹介していく。エイケンズ Aickens の駅から1.5キロ西にあるDOCのベース・ハットがトラックの入り口になる。ベース・ハットというのは作業小屋というか倉庫のような建物で人が駐留しているわけではない。アーサーズ・パスから車で行く場合、Aickens 駅を過ぎて線路をわたり、そのあとに見えるふたつめの建物がベース・ハットだ。駐車場とインテンション・ブックの記帳台がある。

マーカーのついたフェンスに従って牧草地をまっすぐ進む。すぐにオティラ・リバー Otira River にぶつかる。この川は事故が多いので有名。流れがきつく、雨が降ると首くらいまでの深さになる。僕は3週間日照りが続いたあとに行ったが、膝上くらいの水位だった。もしここが渡れないときは、上流3.5キロに対岸へわたる橋があるが、そこからつづくトラックは決して楽な道のりではない。その後も川沿いを歩いていくことを考えると出発そのものを見合わせたほうがいい。

話は戻る。うまく川を渡れて対岸に行っても特に目印はない。地形図を頼りにちかくにあるシェルターを探す。シェルターの前から踏み分け道が続いている。このあたりにはイラクサというのだろうか、刺のある灌木が群生していて歩きにくい。最初は比較的是っきりしていたトラックも、やがてあいまいになって消えてしまう。川の右岸の森林帯に沿って歩くつもりで行けばいい。Lake Kaurapataka への分岐には森林帯ぎりぎりのところにサインポストがある。通常はそのまま川沿いを進んでいく。

オテハケ・リバー Otehahe River とタラマク・リバー Taramaku River の合流のやや先の左岸にキウイ・ハット Kiwi Hut がある。スタートから3時間くらい。そのまえにもTaverners Hut という小屋があるがプライベート・ハットなので利用できない。

このあたりからはもうトラックはほとんど見分けがつかなくなり、歩きやすそうな場所を選んで上流を目指していく。草原地帯を目指せば誰かが歩いた踏み跡が見つかることもある。

タラマク・リバーの河原が狭まってきたら右岸にロック・ストリーム・ハット Locke Stream Hut へつづくトラックが現われる。ちょうど Locke Stream(沢)がタラマク・リバーに合流するあたりだ。ハットまでもう少しと思ってしまいが、ここからが長く感じる。途中、正規トラックと増水時の迂回トラックにわかれるので注意。

2日目 Locke Stream Hut - No.3 Hut 6時間半

ハットの先からトラックが続いている。ときどき河原へ降りたりしながらややラフな道が続く。下草とクモの巣の多さに閉口した。1時間半ほどで吊り橋をわたる。このあたりからすこしづつハーパー・パス Harper Pass(峠)へ向けて登りはじめる。それほどきつい傾斜ではない。峠まではハットから3時間。



Aickens のベースハット
(トラック入口)

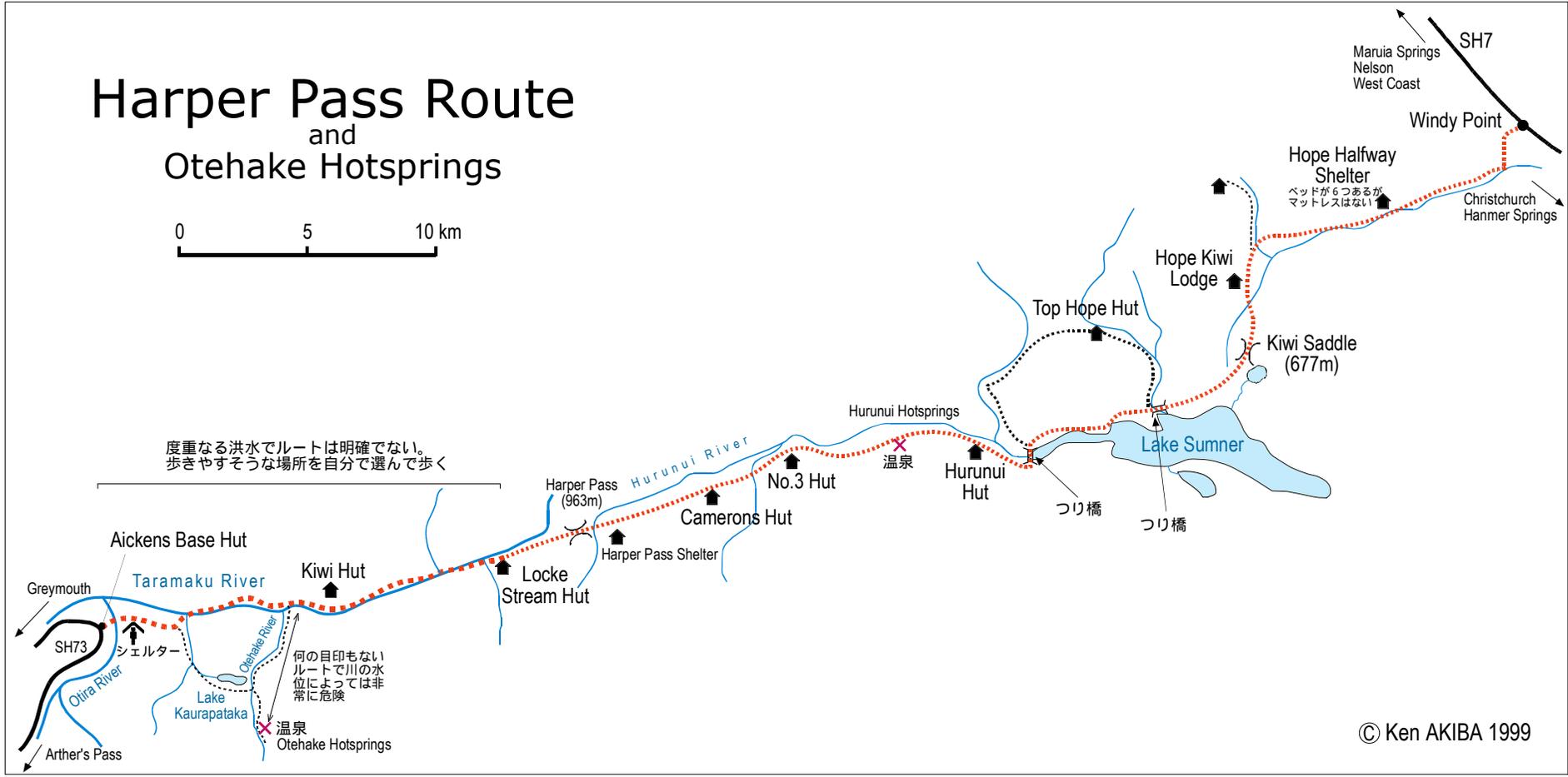
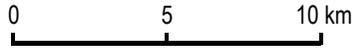


オティラ・リバーのクロッシング。このときは水量が極めて少なかった。通常は腰近くまであり、事故の多い非常に危険な川。



Locke Stream Hut 内部
広くて快適だった。無線機も備えつけてられている。

Harper Pass Route and Otehake Hotsprings



© Ken AKIBA 1999

ハーパー・パスからはフルヌイ・リバー Hurunui River に沿っておりていく。わかりにくいところもあるがきちんとトラックは続いている。パス(峠)から30分ほどでハーパー・パス・シェルター Harper Pass Shelter に着く。ガイドブックには15分と書かれているが、30分はみたほうがいい。ガイドブックやDOCのプロシユアにはシェルターのほかに、6人収容のハット(4人という本もある)があると書かれているが現在はなくなっているようだ。



現役引退し、現在は無料で泊まれるキャメロンズ・ハット。このようにひどくきたない。

森の中の気持ちのよいトラックがつづく。森を抜けて広い草原へ出るとポツリと建つキャメロンズ・ハット Camerons Hut が見える。ハットはあまりに古く(1947年の年号の入った *New Zealand Forest Sarvis* のプレートがあった)汚く、とても泊まる気にはなれない。

キャメロンズ・ハットから30分、ふたたび森の中に入ってウォーク・ワイヤー Walk Wire をわたる。ウォーク・ワイヤーは3本ワイヤーの簡易吊り橋だ。森を抜けて草原へ出ると、わだちのはっきりした4WDトラックにでる。No.3 Hut はすぐだ。Camerons Hut から1時間。



ウォーク・ワイヤー。綱渡りのようにして渡る簡易つり橋。

3日目 No.3 Hut - Hurunui Hut 3時間半

このあたりになると牧草地のような平原になる。実際に牛が放牧されていて牧童たちが4WDの車や3輪バギーで乗り入れてくる。トラックも4WDのわだちと入り乱れて分かりにくくなっていく。黄色いラインの入ったボールがウォーキング・トラックの目印だ。ハットから15分ほどで4WDトラックとの分岐に出る。そこには "Hotsprings 2hr" のポストが立っている。

トラックはほとんどの部分が河原に沿った森の中だ。小さなサイド・クリーク(沢)がたくさんあり、細かなアップダウンが多い。途中にある温泉を見落とさないようにずっとトラックを歩いたが、河原のほうが歩きやすそうだった。結果的にはなるべく平坦な河原を歩いて、川のカーブで行く手を阻まれたらトラックへ戻る、という歩き方がベストのようだ。



4WDトラックとの分岐点

No.3 Hut から2時間で温泉、フルヌイ・ホットスプリングス Hurunui Hotsprings につく。森の中のトラックを行っていると、道がわかれ、河原へ降りる道とそのまま森の中を上に向かって延びる道の両方にオレンジ色のマーカーがついている場所にする。さてどっちに行ったらいいだろうと迷うわけだが、ここが温泉への分岐点。よくみるとサインポストも立っているのだが、文字の部分が落ちていて分かりにくい。

河原へおりずに上へのぼると、すぐにさざなみのように斜面を流れ落ちる小さな沢に出る。この沢の水がすべて温泉で、途中をせきとめて小さなプールが作られている。深さ、湯温は申し分ない。2人でゆったり入れる広さで、無理すれば4人くらい入浴可能。まわりは森で視界がひらけないのが残念。昼間はサンドフライが多い。



フルヌイ・ホットスプリングス。小さいが深さがあるって快適に入れる。

温泉への分岐から下ると河原へ出る。地面はごつごつしているが誰かがテントを張った跡があった。サンドフライのことを考えると、このあたりで泊まってサンドフライの活動の鈍くなった夜にゆっくり入浴するのがベターかもしれない。

ふたたび森に入り、抜けると広々とした牧草地。ジェイソンのような茶色

の体に顔だけが白い牛がたくさんいる。ここに反対側から来た人のための "Hotsprings" の看板がある。ここからは明確なトラックはなくなり、白黄白のストライプのポールを目印に牧草地のなかをつきっていく。それがずっと続く。フルヌイ・ハット Hurunui Hutまで10分とある看板を過ぎて、車両通行止めのフェンスを過ぎると丘を越える林道のような道になる。看板からハットまで20分かかった。

4日目 Hurunui Hut - Hope Kiwi Lodge 5時間半

ハットがある森を抜けて Hurunui River を渡る吊り橋まで30分。この付近には No.2 Hut というのがあったが今は火事で焼失して、ただの牧草地になっている。

対岸へわたると、いろんな道が入り乱れていて分かりにくい、とにかく草原をまっすぐ抜けて奥の森林帯の縁までいく。そこまで行けば森のラインに沿うようにポールの目印が続いている。ハットから約1時間半で Macs Knob へ分岐のサイン・ポストがある。その10分後に崖を巻くために森へ入る。ポイントには大きなオレンジの丸いマーカーがある。川のほうを歩いてみると見落としてしまうのでかならず森の縁に沿って歩くこと。森の中にはオレンジの三角マークがついている。約1時間で Three Mile Stream の吊り橋につく。

橋をわたるとキウイ・サドル(峠) Kiwi Saddle(677m)への登りが始まる。単純な登りではなく、なんだか登っては下ってを繰り返すので、やけに長く感じる。1時間20分で "Lookout" の看板。サドルについたのかと思ってしまうが、実はまだ先で、さらに30分かかる。キウイ・サドル Kiwi Saddle とは魅力的な名前だが、とくに展望がきくわけでもなく、いまいちパツとしない。

下りは急で短く10分ほどで草原へ出る。これまでの漠然と広い谷からするとこじんまりとしていて、箱庭のような美しい草原。ホープ・キウイ・ロッジ Hope Kiwi Lodge までは1時間くらい。きちんとトラックに沿って歩くこと。草原だからどう歩いても行けそうな気がするが、トラックを外れると湿地があったりして意外と歩きにくい。

5日目 Hope Kiwi Lodge - Windy Point (SH 7) 4~5時間

最終日はクライストチャーチ Christchurch へ向けて1:25pm頃に通過するバスを捕まえるために早目に出発した。ハット周辺は4WDのトラックがいろいろと走っていて分かりにくい、ウォーキング・トラックはハットから森に沿って伸びていく。目印としてポールが続いている。

1時間半くらいでホープ・ハーフウェイ・シェルター Hope Halfway Shelter につく。本によってはハットとして書かれていることがあるが、いまはマットレスとストーブが撤去されてシェルター扱いになっている。6つのバンク・ベッドが残っているので宿泊も不可能ではない。キャメロンズ・ハット Cameron's Hut に比べたら雲泥の差できれい。地図を見るとシェルターの少し手前に温泉マークがある。これはわずかに湯が染み出しているだけで入浴できるような温泉ではない。



キウイ・サドル近くの Lookout からの景色



キウイ・サドルを下りると現われる草原。



広々とした Hope Kiwi Lodge。この日の泊り客は自分一人で怖いくらいだった。



広いベッドルームがふたつある。いくつかシングルベッドもあった。

シェルターを過ぎると川を離れて内陸へ入っていく。ルートマーカ―が頻繁についているが、間違っただみ分け道が多いので注意が必要。ふたたび川が見えて、その後ミツバチの羽音が響く不思議なブナ林を通る。

シェルターから1時間50分、森を抜けた。草原のはるか向こうの下に国道が見える。ここからは4WDの砂利道が続いている。国道脇のシェルターについたのは40分後だった。朝7:50に出発して、12:30着だった。

ンク・ベッドが残っているので宿泊も不可能ではない。キャメロンズ・ハット Cameron's Hut に比べたら雲泥の差できれい。地図を見るとシェルターの少し手前に温泉マークがある。これはわずかに湯が染み出しているだけで入浴できるような温泉ではない。

シェルターを過ぎると川を離れて内陸へ入っていく。ルートマーカーが頻繁についているが、間違った踏み分け道が多いので注意が必要。ふたたび川が見えて、その後あたりはマヌカの森になる。マヌカはニュージーランド特産のハチミツの原木。森中にミツバチの羽音が響いている。

シェルターから1時間50分、森を抜けた。草原のはるか向こうの下に国道が見える。ここからは4WDの砂利道が続いている。国道脇のシェルターについたのは40分後だった。朝7:50に出発して、12:30着だった。

Waimakariri-Harman Pass Route

ワイマカリリ・ハーマン・パス・ルート

日数 4-5
体力的難易度 難
技術的難易度 難

概要

アーサーズ・パス・ナショナルパーク Arthurs Pass National Parkの代表的なルート。同地方でも比較的難易度が高く、上級者に人気がある。ほとんどの部分がなんの目印もなく、基本的に地形図を頼りに歩いていく。途中ふたつのアルパイン・クロッシングを含む。ジュリア・ハット Julia Hutの近くにある天然温泉も楽しみのひとつ。多様なサイドトリップもアレンジでき、遊びがいがあるコース。ルートのほとんどは川沿いなので、トランピング中は常時靴が濡れた状態になる。

日程&ハット

通常は4泊5日で歩けるが、川の渡渉が多く、増水時には停泊を余儀なくされる。ハットはCarrington Hut、Julia Hut、Seven Miles Hut、Carroll Hutを利用するのが一般的。他にもルート上にAnti Crow Hut、Mid Tipo Hut、Dillions Hutがある。なお地形図に記載されているGreenlaw Hutは現在はなくなっている。

Anti Crow Hut (6 banks): カテゴリー3。あまり利用されないらしく汚い。水道なし。

Carrington Hut (36 banks): カテゴリー2。大きくて快適なハット。無線機あり。

Julia Hut (6 banks): カテゴリー3。比較的新しい。近くにOld Julia Hutが残っていてそちらは無料で泊まれるがマットレスなし。歴史の遺物というかんじで汚い。

Mid Tipo Hut (6 banks): カテゴリー3。Julia Hutから2時間半ほど先にあるハット。

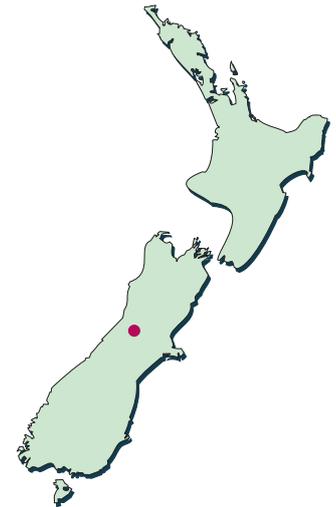
Seven Miles Hut (6 banks): カテゴリー4、無料。ベッドはあるがマットレスなし。お世辞にも快適とはいえない。水は離れた川まで汲みにいく。ふつうのハットのつもりで行くと愕然とする。

Dillions Hut (6 banks): カテゴリー4。Seven Miles Hutのクリークをはさんで対岸にある。僕には見つけれなかった。汚さはどっちもどっちという話。

Carroll Hut (8 banks): カテゴリー3。Kelly Saddleの近くにありロケーションがいい。貯水タンクがなく、すぐ横を流れる沢水を使う。Kelly Shelterのトラックエンドまでは2時間弱なので、ここに泊まる必然性はあまりない。

地形図

地形図はトポマップ Topomap 260-K33 (Otira)1枚ですべてをカバーする。実際の地図を見てもらうとわかるけど、Harman PassやKelly Rangeのあたりはルートを示す破線すら描かれていない。パークマップ Parkmapの"Arthur's Pass National Park"には大雑把ながらすべてのルートが載っ



オフィシャル・コースガイドは50¢。地図は載っていない。



上:Carlington Hut
中:Julia Hut
下:Seven Mile Hut

ている。もっともラインが太く、等高線も甘いので地形図としての実力は劣る。

ベースになる町

アーサーズ・パス・ビレッジ Arther's Pass Village が最寄の町。ハーパー・パス・ルートの項目を参照のこと p.69

アクセス

僕はクロンダイキ・シェルター・トラックエンド Klondyke Shelter Track End からスタートした。ビレッジから SH73 (国道73号線) を8キロほどクライストチャーチ Christchurch 寄りにあるワイマカリリ・リバー Waimakariri River の右岸にある。シャトルバスなどでドロップオフしてくれるが、距離のわりには高い料金を請求される (\$15 くらい)。ヒッチでもいいが、2時間くらいなので歩いたほうが早いかもしれない。

もう一方のケリー・シェルター・トラックエンド Kelly Shelter Track End は、同じく SH73 ぞいで、アーサーズ・パス・ビレッジから20キロ弱、峠の向こう側にある。ビレッジに戻るには、ヒッチかバスを捕まえることになる。バスは Greymouth - Christchurch 間で複数社が運行しているので、1日何回かのチャンスがある。詳しくは前出のハーパー・パス・ルート Harper Pass Route の項目を参考にしてほしい。 p.70

ヒッチもそれほど好条件とはいえないが、雨が降ってない日中なら問題ないだろう。最悪の場合3キロ歩けばオティラ Otira の集落があり、ゼネラルストアや宿 (ホテルのバックパッカーズユニット) がある。

温泉について

通常の日程で歩くと2泊目にあたるジュリア・ハット Julia Hut の近くのタイポ・リバー Taipo River 沿いに温泉がわいている。ハットから15分ほどの川ふちで、水際ギリギリなのですこしでも増水したらすぐ水没してしまう。基本的に手掘りで、好天が続いた後なら誰かが掘ったプールが残っているかも知れない。近くにさびたシャベルが転がっている。岩場なのであまり深く掘ることはできず、寝そべってなんとか全身が浸かる程度。温泉は硫黄を含む透明な湯で、触れないくらいに熱い。地面と岩の割れ目からすこしずつ染み出している。川から冷水の引き込んで適温に調整する。湯に浸かって空を眺めていると気分がいい。景色は清楚で美しい。熱くなったら川に飛び込んで、また湯に戻るということを繰り返していると、すぐに何時間もたってしまう。



ジュリア・ハットちかくの温泉。本当に川すぐ縁にある。

サイドトリップ

このルートは実に多彩なアレンジが可能だ。一般的なサイド・トリップをふたつだけ紹介する。いずれも1泊目のカーリントン・ハット Carrington Hut からスタートする。

[White River to Barker Hut]

カーリントン・ハット Carrington Hutからホワイト・リバー White River をさかのぼっていったどんづまりにバーカー・ハット Barker Hut がある。下から見上げると岩山のとっぺんに建つ仙人の住処のよう。まわりにはたくさん氷河があり、ごく間近に見られる。ハットのロケーションは最高によく、泊まるだけのを目的で行ってもいいくらい。ただしルートはかなりラフで険しい。ルートファインディングができないとハットにつくこと自体むずかしい。僕は空身で行って往路に4時間かかった。全装備を担いで行った人は7時間かかったそうだ。ハット直前の最後のセクションは岩登りに近く、荷物が不安定だと危険かもしれない。ハットは一般に開放されているクライストチャーチ・マウンテナリング・クラブのプライベート・ハット。ベッド(6人)+マットレス、トイレ、雨水タンク、無線設備、蛍光灯がついている。

[Waimakariri falls]

こっちのほうへは足をのばしていないのだが、この滝を見るのを目的で来る人も多い。ちかくに山小屋もあり、ここをベースにこの地方の最高峰 Mt. Rolleston(2271m)に登ることも可能(登攀登山の完全装備が必要)。また Waimakariri Col を越えて Otira の集落へ抜けることもできる。

トラック・ダイジェスト -1999年2月7日~12日

1日目 Klondyke Shelter - Carrington Hut 5時間半

ワイマカリリ・リバー Waimakariri Riverにかかる橋のたもとからスタートする。ここでふたつの選択がある。もし川の水量が少ないなら右岸のクロンダイキ・シェルター Klondyke Shelter から上流に向かって右側の河原を歩いていく。適当なところで対岸に渡って上流を目指す。水量、場所にもよるが膝くらいの深さ。

雨の後などで川の渡渉が難しそうなら橋を渡って左岸の Wet-Weather Track(増水時迂回路)をいく。このルートはリバーベッドのやや上方のブッシュに作られたトラックで、歩く人は少なく、荒れているところもある。ずっとこれを歩きつづけるのは根性があると思う。途中からリバーベッドに下りられるところがたくさんあるから、川を渡る水位に自信がなければ、とりあえずこっちからスタートして、様子を見ながら河原へ下りたほうがいいかもしれない。

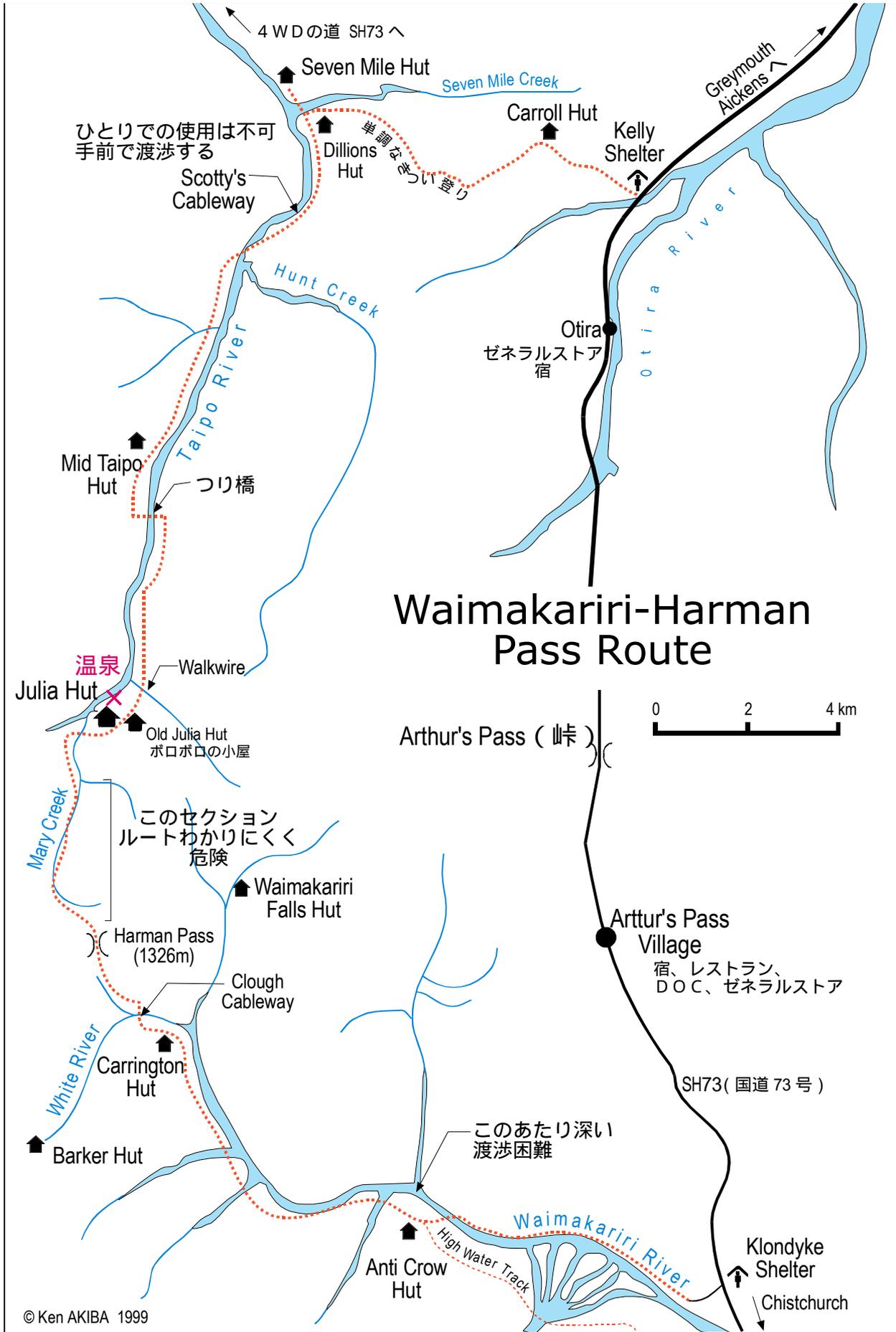
ここでは低水量の通常ルートに従って書いていく。クロンダイキ・シェルターからつづく未舗装道路を行き、突きあたりから川床を歩いていく。川幅が広くどこが川筋なのかわからないかもしれないが、とありあえず右岸に沿って歩いていく。やがて対岸に Jordan Stream から広がるこんもりと盛り上がった三角州のターキー・フラット Turkey Flat が確認できる。それ



すばらしいロケーションに建つバーカー・ハット



広い河原のワイマカリリ・リバー。名前が長いので地元ではワイマックと略す。



Waimakariri-Harman Pass Route

を通り過ぎたあたりからすこしずつ左岸へ近づいていくといい。僕はアンチ・クロー・ハット Anti Crow Hut のところで完全に左岸へ渡った。ふつうのコンディションであれば、ほとんどの場所で問題なく渡ることができるが、Crow River の合流付近は水量・水深もあるらしいので注意。

その後は左岸のリバーベッドをひたすら上っていけばいい。途中、川のようにみで通行不能なところもあるが、探せばすぐに巻き道が見つかる。カーリントン・ハット Carrington Hut は川のやや左内陸にあり、そこへの分岐から白い目印のポールが続いている。

2日目 Carrington Hut - Julia Hut 7時間

よく整備されたがトラック森の中をホワイト・リバー White River へ続いている。リバーベッドへ出てからはところどころにケルンとマーカールがあり、ケーブルウェイ Clough Cableway へ続く。ケーブルウェイというのは、川を渡るための滑車のような乗り物。かごの中と両岸に手回しのハンドルがあり、それをまわして移動する、真中まではたるみで簡単に行けるが、そのあとののぼりがきつい。ストッパーがあるわけではないので、手を離そうものなら真中まで引き戻されてしまう。かつてドイツ人がワイヤーを掴んでおさえようとして指を落としたという話を聞いている。一人の力で渡りきるのは難しい。

ふつうのコンディションなら川の渡渉も不可能ではないので、ひとりなら素直に川を渡ったほうがいい。ケーブルウェイの70メートルほど下流が渡渉ポイントだ。もし不可能なら、ハットで水が引くのを待ったほうがいい。

ケーブルウェイを下りたところから Taipoiti River に向けて短いトラックが伸びている。しかしそれを使うよりはいったん河原へ下りて Taipoiti River をさかのぼったほうが楽だ。ところどころにケルンのマーカールがある。

その先地形図にルートが記されていないが、最初は右岸を登っていけばいい。川のやや上方のガレ場に踏み分け道ができています。岩壁によって行く手が阻まれたら対岸にわたる。それを繰り返して上流へのぼっていく。洪水の後でなければクロスポイントにケルンの目印があるはずだ。

川筋を外れてハーマン・パス Harman Pass (峠) へ向かうポイントはケルンが示している。Taipoiti River は上流で二又に分かれているが、上流に向かって右側が本流で、左の流れは岩の隙間から流れ落ちる滝のような形で流れ込んでいる。その滝のすこし先の棚をのぼっていく。地形的にどうみてもそこしか登れないので、すぐに分かる。

棚を登りきるとタソック帯が広がっていて、いくつかのケルンとうっすらとした踏み跡がハーマン・パスへ続いている。左手の谷下に流れる川は、上流の方で渡ることになる。

ハーマン・パス Harman Pass にはひととき大きなケルンと白いポールが立っている。左手のアリエルス・ターン Arieles Tarns (水溜り・池) のまわりにはいくつかのテントを張った跡があった。ルートはターンとは反対の右手に行く。このあたりは踏み跡もケルンもないので分かりにくい。

眼下にこれから行くマリー・クリーク Mary Creek のほぼ前景が見える



Anti Crow Hut
見ての通りあまりきれいな小屋ではない。



Clough Cableway
楽しそうな乗り物だけど、重労働に加えてけっこう危険。



ハーマン・パス

ので大まかなルートどりを考えて歩を進める。本当に下りていいのかと考えてしまうほどの急な下りでマーキングもない。枯れ沢のような谷の部分にそって下りて行くと、やがて斜面の中間くらいに白いポールが立っているのが確認できる。間隔は広いがその後クリークに下りるまでに数本のポールが立っている。

マリー・クリーク Mary Creek の右岸につくと、すぐに向こう岸へ渡るポイントがあり、そこからすこし上の台地に向けてタソックの中の踏み分け道が続いている。しかし背の高いタソックで途中で道を見失ってしまった。やむなくふたたびリバーベッドに戻って下っていった。

クリークがおおきく右にカーブするあたりからはずっと右岸を歩いた。途中行く手を阻まれるということにはなかった。地形図にあるように途中から左岸にトラックが始まるので、そのやや手前から渡っておいたほうがいい。トラックの始まる直前あたりは水量が多くて、渡渉困難と思われる。

トラックに入ってしまうと、格段に歩きやすくなる。はっきりと道筋が分かるので気持ち的にも安心する。急な上りと下りをすぎると、まもなくジュリア・ハット Julia Hut に着く。



ジュリア・ハットの近くに Old Julia Hut が残っている。こちらは無料で泊まれるが、きたない。下の写真のようにマットレスはなく、ベッドは金網が剥き出しになっている。それでもジュリア・ハットがいっぱいでこっちへ泊まった日本人がいるらしい。ハット・ブックに書いてあった。



3日目 Julia Hut - Seven Miles Hut 6時間

はっきりとした森の中のトラックが続いていく。ジュリア・ハットから30分弱でウォーク・ワイヤー Walk Wire を渡る。ウォーク・ワイヤーというのは川に3本のワイヤーを張った簡易つり橋で、綱渡りのようにして渡っていく。

さらに森の中のトラックを歩く。こんどはちゃんとしたつり橋があり、タイポ・リバー Taipo River を渡る。ミッド・タイポ・ハット Mid Tipo Hut はもうすぐだ。ウォーク・ワイヤーから2時間弱。草原の中のこじんまりとしたハットで悪くない。泊まる予定のセブン・マイル・ハット Seven Mile Hut には貯水タンクがなく、水を煮沸しなければならないので、できればここで多めに補給していくといい。

ハットのある草原を過ぎると再び河原を歩くが、20分ほどでゴルジュを巻く内陸のトラックへ入る。それを抜けると黄色い花が咲く広々とした草原が広がっていた。草が風にいっせいなびいていて美しい。

この先、スコッティーズ・ケーブルウェイ Scotty's Cableway でタイポ・リバー Taipo River を対岸に渡ることになっているが、このケーブル・ウェイはかごの中にハンドルがついていないので、一人では使えない。

DOC のルート・ガイドによるとケーブル・ウェイを使わない渡渉ポイントはミッド・タイポ・ハットから1時間ほどのハンツ・クリーク Hunts Creek 付近ということになっている。ぼくはそのクリークのやや手前の中州がある部分で渡ったが、奥のほうの流れは速く水量もありうねっていた。時間をかけてポイントを検討していちばん渡りやすそうな場所を選んだつもりだったが、すこし危険を感じた。このとき2週間以上雨が降っておらず、最大限に近いくらい水量が少ないときだったのだが、そんなかんじだった。この渡渉ポイントがベストだったのかは今でも疑問に感じている。

ハンツ・クリーク Hunts Creek とタイポ・リバー Taipo River の合流付

近からバンク状に小さな台地が延びている。踏み分け道があったから、それに沿って歩いたが、やがて小道は小さな崖に阻まれて行き止まりになった。やむなくすこし戻って堆積土砂で崩れやすい小さな崖を下りて、歩きにくい川の淵を歩いた。

崖を過ぎ、ふたたびフラットに入ったが背の低いトゲのある木の林で歩きにくい。途中からDOCのポール・マーカーが現われたが、間隔が開きすぎていてあまりあてにならない。

スコッティーズ・ケーブルウェイ Scotty's Cableway のすこし手前に Flood Route (増水迂回路) の入り口があるが、コンディションに問題がなければ河原へ出て、ケーブル・ウェイの下を歩いていったほうがはやい。

次のフラットは一面のイラクサ畑で、ルートどりには苦勞する。人が歩いた跡や4WDのあと、DOCのマーカーなどが所々にある。いっそのこと川ギリギリのバンク下を歩いたほうが楽だったかもしれない。

セブン・マイル・クリーク Seven Mile Creek はリバーベッドは広いが川幅は1メートル、深さも膝下くらい。渡ると、遠くにセブン・マイル・ハット Seven Mile Hut が見える。セブン・マイル・ハットはあまりにボロボロで汚い。マットレスもないので快適な睡眠にはキャンプ用ロールマットなどが必要。トイレも水道施設もない。水は15分ほど離れた川まで汲みに行く。

4日目 Seven Mile Hut - Carroll Hut 6時間

この日の行程は、ほとんどが急な道のぼりになる。ふたたびセブンマイル・クリーク Seven Mile Creek を渡って、対岸を上流に向けて歩く。リバーベッドが狭くなり、川の両岸が平行になる手前で、右手のバンクに "Access to Kelly Range" のサインポストがあり、トラックが始まる。

山へ入ると鬱蒼とした不気味な雰囲気、両脇を削られた狭い切通しのようなトラックに行く。昔の鉱石採掘場の跡だ。マーカーとして白いブリキのプレートが木に打ちつけてある。一ヶ所、倒木によって分かりにくいところがあった。

展望のきかない単調できつい登りが続く。登りはじめて2時間半ほどで左手が崩落したような絶壁になり、視界が開けてきた。いよいよブッシュ・ラインを越えるのかと思ったらふたたび森林のなかに入ってしまった。森林限界の上に出たのはさらに1時間後だった。ちょっとしたノブ(地形上の突起)があって、そこから出発地点のセブン・マイル・ハットが見え、さらに遠くタズマン海さえ一望できた。

ブッシュ・ラインを越えると背の高い草地で、依然登り続ける。目印のポールが立っているが、ルートはわかりにくく、時に草をかきわけながら進む。

このあたりから地形図上のルートの記載がなくなる。ポールはケリー・レンジ Kelly Range(山脈)上の大小いくつかの池(Tarns)まで続いているが、その先は見当たらなかった。天気が良ければ勘頼りでもハットにたどり着けるかもしれないが、常識的に考えて地図とコンパスは必須だ。レンジをケリー・サドル Kelly Saddle(鞍部)まで行けば、キャロル・ハット Carroll



あまりにきたないセブン・マイル・ハットの内部。タダだからいいもののお金を取ったら怒る。



ケリー・レンジへ登る途中。うしろを振り返ると広い谷が広がり、向こうにはタズマン海まで見える。

Hutへ続くトラックが見つかる。

キャロル・ハットはひろい台地の草原にぽつりと建つハットで、ロケーションがすばらしい。ただ、ここからSH73沿いにあるトラック・エンド、ケリー・シェルター Kelly Shelterまで1時間半ほどの下りなので、必ずしもここに泊まる必要はない。

5日目 Carroll Hut - Kelly Shelter (SH73) 1時間半

ハットが建つ台状のフラットから急な下りになる。すぐにブッシュラインに入り、ひたすら下っていく。1時間半もすればトイレのあるキャンプグラウンドを経て、State Highway 73(国道73号)に面したケリー・シェルター Kelly Shelterに着く。シェルターは3面を囲われた建物で中にベンチがある。寝袋を広げて寝ることは十分可能。



キャロル・ハット
台地の上であり、奥に見える峰との間は深く切れこんでいる。

Copland Track

コップランド・トラック

日 数 2
 体力的難易度 易
 技術的難易度 中

概要

快適な天然温泉のあるトランパーの間でひそかに人気のトラック。もともとはコップランド・ルート Copland RouteというMt. Cookとウェスト・コースト West Coast をむすぶ登攀器具が必要な難関コースだった。今ではその西側部分だけの往復がコップランド・トラック Copland Trackとして広く一般に歩かれている。

このトラックのハイライトはウェルカム・フラット・ハット Welcome Flat Hut ちかくに湧く天然温泉。岩盤を掘って作られた温度の異なるいくつかのプールがあって、目の前にはシェラ山脈の荒々しい岩肌、遠く谷の奥の方には万年雪や小さな氷河も望める。

特に日本人の間での人気は上昇中。近いうちに「地球の歩き方」に載ってしまうのではないかという勢いで広まっている。もっとも誰でも気軽に行かれるものではなく、バックカントリー・トラックに慣れているひとでないと、片道7～8時間はかかるちょっとしんどい道のり。10月から4月まで歩ける。それ以外の季節は雪に覆われて危険。

日程・ハット

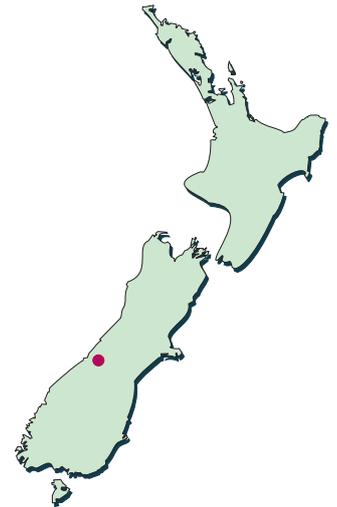
ルートはマウント・クック方面まで続いているが、アイス・アックス、クランポンcramp-on(アイゼン)なしに行かれるのは2つめのダグラス・ロック・ハット Douglas Rock Hut の少し先まで。

ふつうは温泉のあるウェルカム・フラット・ハット Welcome Flat Hut に1泊して温泉に入って帰るか、そこで数泊してダグラス・ロック・ハットの方までデイ・トリップを楽しんだりする。国道からウェルカム・フラット・ハットまでは健脚の人で6時間、ふつうで7～8時間。さらにダグラス・ロック・ハットまでは2～5時間かかる。

いずれのハットもカテゴリー2で、一泊\$10。ウェルカム・フラット・ハットにはワーデンが常駐している。二階建ての大きなハットで約30人収容。ヒーターの燃料として石炭が用意されている。一方おなじカテゴリー2でもダグラス・ロック・ハットは小さく、カテゴリー3なみ。12人収容。国立公園ベースにつながる無線機が備えつけてある。

ベースになる町

最寄りの町はフォックス・グレイシア Fox Glacier。バックパカーズやガソリンスタンド、食料品店、バーやレストラン、DOCオフィスがある。中規模スーパーマーケットのFour Square があってトランピングに必要なひととおりの物は買えるが値段は高い。隣り町フランツジョセフ Franz Josef のFour Squareの方がやや整っている。大手スーパーマーケットや銀



ウェルカム・フラット・ハット



ダグラス・ロック・ハットの内部

行はホキティカ Hokitika かワナカ Wanaka まで行かないとない。

近隣のDOCのビジターセンターでトラックの解説プロシユアが50¢で手に入る。トラックの最新コンディションも掲示板に張ってあるのでチェックしておくこと。また歩き始める前にはインテンション・カードの提出が求められている。

アクセス

南島のフォックス・グレイシア Fox Glacier から約26キロ南のところからトラックが始まる。大手バス会社インター・シティーが "Copland Track" として正式なバス・ストップにしている。8:00 Franz Josef 発、8:45 Fox Glacier、9:05 Copland Track その後3:50にQueenstown。もしくは8:15 Queenstown発、2:45 Copland Track、そして3:20 Fox Glacier、3:50 Franz Josef 着。料金は不詳だが、聞くところによるとフォックス・グレイシアからコップランド・トラックまで片道\$20くらいとか。その他いくつかあるウェスト・コーストを運行するシャトル・バスが途中ドロップオフ、ピックアップしてくれる。

雨の多い地方なのでヒッチは当てにしないほうがいいと思うけど、天気さえよければたぶん大丈夫。国道から奥まったところにトラック入り口とカーパークがあるが、道路脇にはバス・ストップの小さなシェルターがある。このあたりはサンドフライが多いので、あまり落ち着ける場所ではない。

地形図・資料

地形図はTopomap 260-H36 (Mount Cook)。DOCのプロシユアは "The Glacier Region" という折りたたんでいないA4サイズのシリーズのなかの "Copland Track to Welcome Flat and Douglas Rock Huts"。似たのがたくさんあるので分かりにくい。このプロシユアを置いてあったのはHaast、Fox Glacier、Franz JosefのDOC。聞けばあるのかもしれないけど、他の場所では見かけなかった。



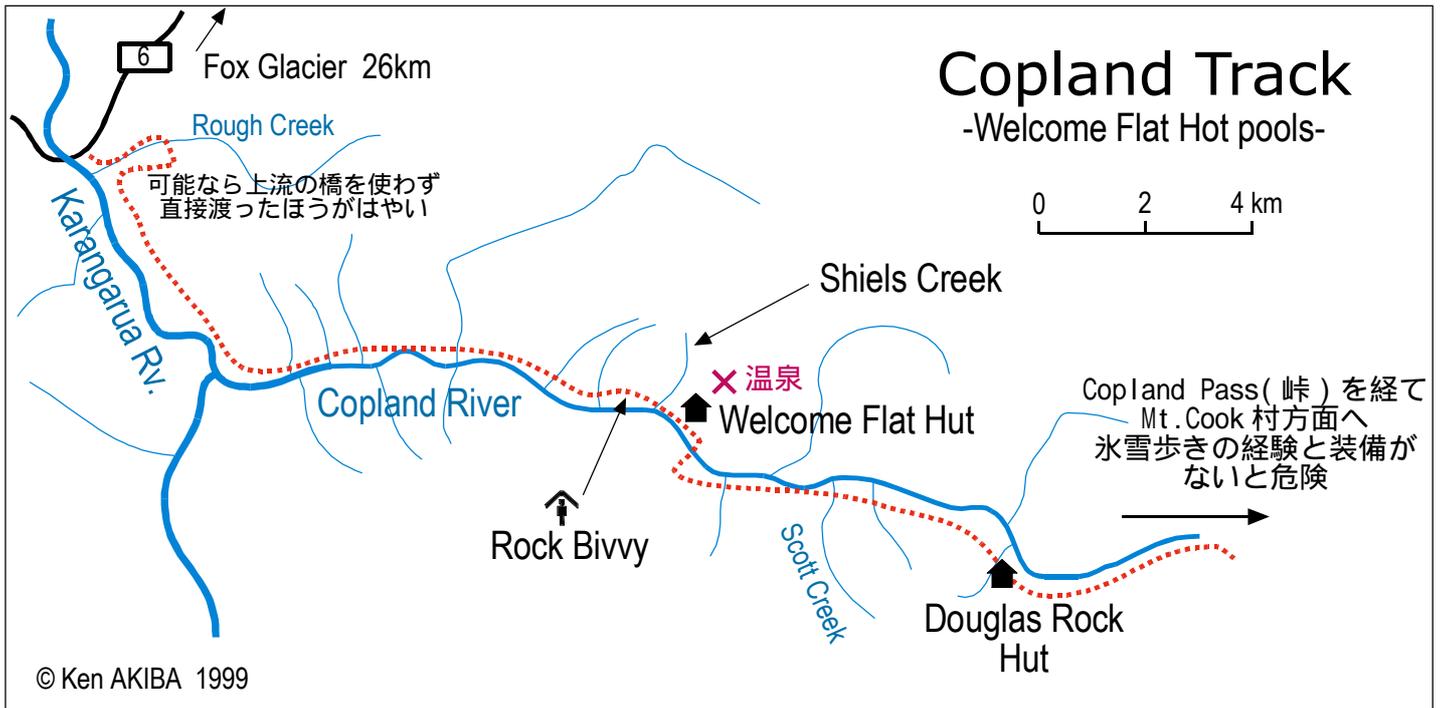
注意

このトラックは温泉目当てでとかくトランピングに不慣れな人もいてしましやすい。99年11月に改訂されたLonely Planet社の "Tramping in New Zealand" では、難易度Mediumになっているが、おなじMediumであってもルートバーン・トラックやケプラー・トラックとは根本的に違うので注意が必要。グレート・ウォークではないのでトラックの整備状況がまるで違う。いちおうルート・マーカーがついているが、小川で道が寸断されていたり、間違った踏み分け道が何か所もあるので、初心者でしかもグレート・ウォークしか知らない人にはちょっと危険かもしれない。特に気象条件のきびしい地域でもあるので、あまり安易には考えないでほしい。

トラック・ダイジェスト -1998年2月26日～29日

国道SH6から少し奥に入ったカーパークからトラックが始まる。地図で





は、すぐ横をながれるラフ・クリーク Rough Creekを30分ほどさかのぼって上流の橋を渡るように描かれている。しかし特別に水量が多くなければ、カーパークから川を直接対岸へ渡ったほうがはやい。ふだんなら膝下くらいの水量。オレンジ色の大きなマーカーのところから森の中へトラックが続いている。

そのあと森、草原、河原など景色を変えながらコップランド・リバー Copland River をさかのぼっていく。森の中には踏み分け道とマーカーがしっかりついているが、河原へでてしまうとほとんど目印がない。ふたたび森林帯へ入るポイントにはオレンジのマーカーやケルンが立っているが、注意しないと見落としてしまう。

コップランド・リバーに流れ込む支流をいくつか渡るが、ほとんどの沢は足を濡らさず飛び石伝いに渡れる。水量が多いときは少し上流にあるつり橋を利用する。ただウェルカム・フラット・ハットの30分くらい手前のShiels Creekには橋がない。(もしかしたらもう修復されているかもしれない) おおきな岩がゴロゴロしている急な谷川で雨で増水すると通行不能になる。クリークの10分くらい手前にシェルター (Rock Bivvy) があり、いざとなったら水が引くのを待つことができる。しかし雨をしのげるだけ岩屋なので、快適な宿泊は望めない。

ウェルカム・フラット・ハット Welcome Flat Hut の先はトラックの整備状況が極端に悪くなる。小さなアップダウンが増え、下草に覆われて歩きにくい。スコット・クリーク Scott Creekのように渡渉が必要な川もある。地図上の距離は短いが、ウェルカム・フラット・ハットまでの行程より苦労するかもしれない。

ダグラス・ロック・ハット Douglas Rock Hut の先はコップランド・パスの手前の谷のどん詰まり (標高約1400メートル付近) まで行くことができる。雪に覆われた斜面には雪崩の跡があったりして迫力のある景色を楽し



Architect Creekに架かるつり橋



ウェルカム・フラット サザンアルプス直下でガスがかかりやすい。晴れていればこの先にアルプスの山々の勇姿が望める。

めるといふ。



いくつかのプールがあり、源泉からの距離で温度が異なる。手前がいちばん広いぬるめのプール。右の写真で僕が入っているのも同じ場所。



雲がかかってしまっているが、晴れていれば奥のほうに夏なお雪をかぶった山が望める

ハット・ワーデン

ハットに何日も泊まりこんで、日夜活躍しているハット・ワーデン。聞くところによると、彼ら、彼女らは1回で1週間近く駐留しているらしい。

そうなるに気になってくるのが彼らの生活。食料とかシャワーとかどうしてるんだろう？

すべての秘密はワーデンが寝泊りしているプライベート・ルームにある。実はあの部屋にはひそかに快適な居住空間が作られているのだ。

彼らの食事を見ていると、肉類を含め日常食べているものとほとんどかわらない。冷蔵庫の強みだ。太陽電池とバッテリーで電気が使えるようになっている。もちろんホットシャワーだってある。これはガスを使っているようだ。

ところで、それらの食料はどうやって運んできているのかは知らない。1週間分も担いでくるのだろうか？（場所によってはヘリを使っているらしいが）

ハットワーデンの仕事といえば、朝はハットの掃除をして、日中は鎌やシャベルを持ってトラックの整備。夜には利用者のチケットを確認して、ときとしておしゃべりを楽しむ。山が好きな人には魅力的な仕事かもしれない。

ワーデンはワーデンでそんな生活をエンジョイしているようだ。ウェルカム・フラット・ハットでうらやましいような光景を見てしまった。本当は内緒なのかもしれないけど暴露してしまう。

山道を6時間歩いてハットについたら、まずビキニの水着が目に入った。ワーデンのプライベートルームのポーチに干してあった。ワーデンは女性なのかと思った。実際ケプラートラックやルートバーン、ミルフォードでは女性ワーデンにお世話になった。しかし夕方になってチケットの確認にきたのは制服を着た若い男性だった。そして翌朝、ハットの掃除をしていたのは私服の若い女性。そう、ワーデンの男性は奥さんだか彼女だかをハットに連れてきていたのだ。

翌日の日没頃、彼女がひとり水着で温泉のほうへ歩いていくのが見えた。そのころワーデンはチケットのチェックをしていたが、そのあともくすくす話もしなかったと思うと、案の定、水着に着替えて温泉の方へ足早に消えていった。

いいな～というのが正直なところ。こんな人もろくに来ないようなところ彼女と二人だったら最高に幸せだろう。

ぼくは4日間ハットにとどまった。ぼくが帰るのおなじ日、その女性はワーデンの任務交代より一足先にハットを出て行った。Fairydownのザックを背負った彼女は、とにかく歩くのが速かった。あっという間に見えなくなってしまった。通い慣れた道、なのだろう。

Rees-Dart Track

リーズ・ダート・トラック

日数 4-5
 体力的難易度 中
 技術的難易度 易



概要

バックカントリー・トラックのなかではかなり有名なコース。草原、森林、山岳地帯と小気味よく風景がかわり、歩く人を飽きさせない。次々に現われる氷河の景色はダイナミックで、ときどき氷河の崩れる雷のような音が谷に響く。

トラックはよく人に歩かれていて難易度も高くない。しかし、これほどの景色がこんなに簡単に見られていいのだろうかと思ってしまうくらいにすばらしい。位置的にはルートバーン・トラックのとなりにあたるが、そのダイナミックさは比ではない。

ベースになる町

クイーンタウン Queenstownが便利。トラックへのバスもここから出発する。クイーンズタウンはニュージーランド指折りの観光地で、食事や宿泊に困ることはないが、すべてにおいて物価が高いのは事実。スーパーマーケットはFour Square程度しかなかったが、いまは大手スーパー(New World?)が建設中とのこと。トランピング用品店が何軒もあり、DOCオフィスも目抜きどおりにある。

クイーンズタウンの50キロほど先にあるグレノーキー Glenorchyも基点にできる。町といえるほどの規模ではないが、DOCビジターセンター、モーターキャンプ件ゼネラルストアがあり、クイーンズタウンの喧騒を避けて、こっちに泊まる人も多い。食料はなるべくクイーンズタウンかそれ以前に調達しておいたほうがいい。宿はGlenorchy Holiday Park and Backpackers (03-442-9939)とGlenorchy Backpackers Retreat (03-442-9902)。クイーンズタウンからバスで\$10。一本道なのでヒッチも容易。

アクセス

トラック入口へはクイーンズタウン発グレノーキー経由のバスが出ている。途中まではルートバーン・トラックへ向かう人たちと一緒に、グレノーキーで小さいバスに乗り換える。トラックのリーズ・バレー Rees Valley 側の入り口はマディ・クリーク Muddy Creek (通称 Rees ともいう)、ダート・バレー Dart Valley 側の入り口はチャイナマンズ・ブラフ Chinamans Bluffで、どちらもクイーンズタウンから\$20。グレノーキーからなら\$10。

さらにリーズ・バレー側は4WDで25 mile hutまでの送迎サービスもある。またダート・バレー側には、チャイナマンズ・ブラフの手前のサンディ・ブラフ Sandy Bluffとグレノーキーを結ぶジェット・ボートもある。料金はバスとおなじで、アクティビティとしてのジェットボートを楽しむことを考えるとお徳。ほとんどの人はこっちを利用していた。以上のサービ



クイーンズタウンの宿についてはルートバーン・トラックの項目を参照 [p.94](#)

スはすべて *Backpacker Express* (03-442-9939)。行きの予約は必須だが、帰りはほぼ毎日バスが運行されているので、予約なしでもなんとかなる。ダート・バレーのあたりはラフティングやカヤックのフィールドになっているので、そうした関連の車の出入りはある。しかし大部分が未舗装道路で一般車の出入りは少ない。ヒッチハイクはむずかしいだろう。

ダート・バレーからの帰路にカヤック・ツアーを組み入れることもできる。詳細は *Fun Yacks* (03-442-3734)。

サイドトリップ

リーズ・ダート・トラック Rees-Dart TrackはRees Valleyをさかのぼって、Rees Saddleを越えてDart Valleyに沿って戻ってくるというトラックだが、途中からカスケード・サドル Cascade Saddle経由でワナカ Wanaka 方向へ抜けることもできる。このルートは高低差が大きく経験者向き。しかしダート・ハット Dart Hutをベースにしたカスケード・サドルの往復はポピュラーなサイド・トリップとして知られている。ダート・グレイシア Dart Glacier (氷河)の末端部分から脇を巻くようにして、氷河全景を眺めるカスケード・サドルまで登る。谷の反対側にはロブ・ロイ氷河 Rob Roy Glacierなどで有名なモツキツキ・バレー Matukituki Valleyが広がる。

本を読むかぎり、このカスケード・サドルへのコースは「ルート」で難しいと思っていた。しかし実際は踏み跡やポールがしっかりしているので「トラック」と言っていいくらいに分かりやすかった。行きに3時間くらいかかったが、最後の1時間の登り以外はおおむね平坦。途中でも谷の岩壁にへばりついたような小さな氷河が所々で見られる。ダート・グレイシアの末端付近でルートを外れれば高い氷壁をまじかに見ることができて、サドルまで行かなくても十分に楽しめる。

地形図

Topomap 260-E40 (Earnslaw)と 260-E39 (Aspiring)の2枚で全トラックをカバーする。カスケード・サドルまでも含む。とくにAspiringの方は氷河の多い険しい地形で、地図を眺めて景色を想像するだけでも楽しい。

サンドフライ

嬉しいことにこのトラックにはサンドフライがほとんどいなかった。ふつう休憩で足を止めると、数分でどこからともなくサンドフライが集まってきて、おちおちと休めないことがおおいのだが、このトラックではあまり気にならなかった。ハットに着いてから短パン一枚で日光浴をするという、他ではなかなかできない優雅な時間を持てた。

日程・ハット

トラック上には4つのハットとひとつのビヴィー Bivvy (岩屋)がある。

Twenty Five Mile Hut (8banks): 地元のトランピング・クラブのハットで一般も利用できる。あまりきれいとはいえないハットだが、平たい石を積み重ねた煙突が味がある。マットレスが4枚あった。料

金不詳。トラックから案内板にしたがって斜面を10分ほど上ったところにある。

Shelter Rock Hut (20banks): カテゴリー2。通常1泊目に泊まるハット。サドルの手前にあり、あたりを山の岩肌に囲まれたロケーション。キッチンとは別棟になったバンクルームが2部屋あり、非常にゆったりとしたベッド配置。他のハットとはちがう贅沢な雰囲気。

Dart Hut (20banks): カテゴリー2。カスケード・サドル方面との分岐点なので混むことが多い。ワーデンが駐留している。トイレは水洗式で紙が置いてあった。

Daleys Flat Hut (20banks): カテゴリー2。ワーデンが駐留していた。

Rock Bivvy: Dart Hut と Daleys Flat Hut の間にある。ほかのビヴィーとは違って、入口に風除けの石が積んであり、かまどのようなものも作られていた。とはいえ快適に泊まるためには広めのグランドシートとキャンプ用ロールマットが必要。中は広く、本来の就寝スペースとは別に背の低い二人用テントを張れるくらいのスペースがある。



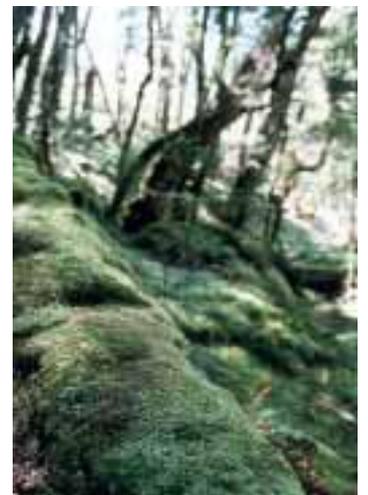
ダート・ハット

トラック・ダイジェスト -1999年3月2日～6日

1日目 Muddy Creek Carpark - Rock Shelter Hut 6時間

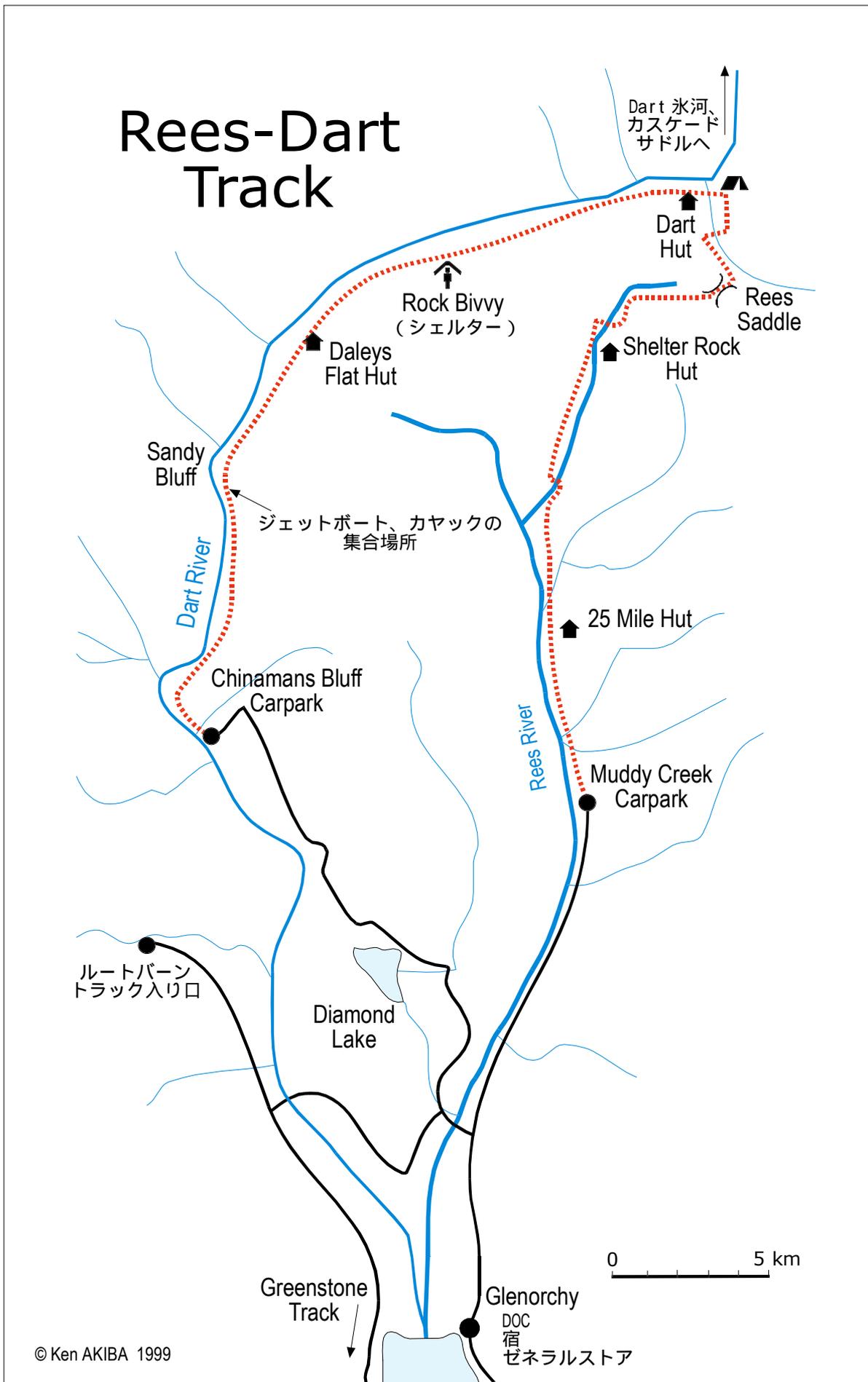
通常、バスはマディ・クリーク Muddy Creek と呼ばれる場所で停まる。カーパークの奥のほうにトイレがある。広々としたオープン・フラットを進んでいく。谷の左手は険しい山脈で、氷河をかぶった三角形のきれいな形のピークが見えて、これから先どんな景色が広がるのかと期待させてくれる。途中一ヶ所、川の縁ギリギリを歩くちょっと危ないところがあった。目印のポール数は少なく、間違った踏み分け道が多いので注意が必要。ひらけた谷をさかのぼっていただけだから致命的なことはないけど、湿地帯にはまってしまう可能性がある。1時間半から2時間でTwenty Five Mile Hut の分岐につく。ハットはトラックから丘を10分ほど上ったところにある。ドラマ「北の国から」に出てくるような平石を積んだ煙突があって雰囲気のある小屋。余裕があったら見に行ってみるといい。

分岐から1時間半ほどオープン・フラットを歩くとゲートがあり、そこから正式なトラックが始まる。ここからは森の中。吊り橋をわたるとマウント・アスパイアリン・ナショナルパーク Mt. Aspiring National Parkに入ったことを示す標識がある。よく整備されたトラックで森の雰囲気も良い。ときどきフラットに出たりしながら谷の奥にあるシェルターロック・ハットを目指す。



2日目 Rock Shelter Hut - Dart Hut 5時間

ハット周辺は高い山に囲われているので日が射すのが遅い。夏とはいえ日があたらない朝は寒い。9時くらいに出発したがちょうど進行方向から斜めに日が射ってきてまぶしくて周りがよく見えなかった。マーカーを見落とし



て何度か道を間違えた。今日はリーズ・サドル Rees Saddle(1471m)を越えるが、のぼりはとても緩やか。サドルのすぐ手前は急なのぼりになるが、急なのは時間にして20分くらい。サドルと名のつくところは険しいというイメージがあったが、あまりにあっけなく最上部へ着いてしまった。左手の奥のほうにこれまでになく大きな立派な氷河が見える。谷に沿って下っていくトラックもはっきりと見える。

下りはギザギザの岩盤が剥き出しになった急なところがいくつあって、雨の時にはすこし危険かも知れない。このセクションがトラックのハイライトだ。サドルから見えていた氷河に覆われていた山が、進むにつれて少しずつその姿をあらわしてくる。楽しい下り道だ。ここは是が非でも晴れた日に歩きたい。サドルから1時間弱でひとつめのつり橋を渡る。このあたりが氷河の景色のピーク。ひとつめの橋から1時間でダート・ハット Dart Hut につく。ハットの手前にキャンプ指定地があり、水道が引かれている。ハットは川の近くにあり、サンドフライもあまりいないので河原で水浴びしたり昼寝したりしてくつろげる。

3日目 サイドトリップ Cascade Saddle 3時間半(往路)

ハットからすこし戻り、キャンプサイトのなかを突っ切っていく。森を抜けてダート・リバー Dart River に出ると背の高い草原のなかを踏み分け道が伸びている。本来はポールだけのルートらしいが、たくさんの人が歩いているのでしっかりと踏み分け道がついている。ケルンも頻繁にあるので気象条件が悪くなければ迷う心配はない。ダート・リバーはダート・グレイシア Dart Glacier に端を発する川で、土砂で汚れた氷河の末端部分が見えてくるあたりから、右の斜面を巻くようにのぼりが始まる。あまりに表面が汚れているので最初は氷河というのが分からないかもしれないが、上り始めて30分もするとクレバスで波打っている氷河の本体が見えてくる。最上部のサドルまで行かなくても斜面の中腹あたりから氷河の全景が見える。



リーズ・サドル



サドルから下るに従い、次第にダイナミックな氷河が姿を現してくる。



サドルの反対側には広大なモトゥキトゥキ・バレーが広がる



カスケード・サドルから見るダート・グレイシア

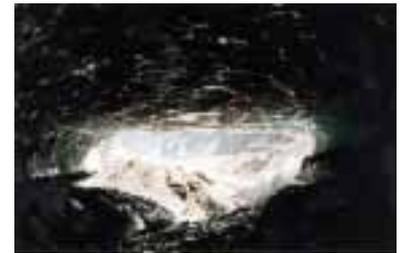
正式なルートからは外れるが、簡単に氷河の末端部分に近づくことができる。目の前で見える氷河の壁は予想よりはるかに大きい。遠くから見ると灰色に汚れて岩のように見えたターミナルも近くで見ると確かに氷なんだとわかる。氷河の壁の上にはこれまで削ってきた土砂が堆積していて、それが常に滑り落ちてきている。ぼくが見ている間にも車くらいの大きさの岩が落ちてきて驚いた。氷の壁にぽっかりとあいたトンネルがあった。中へ入ってみると表面とは裏腹にどこまでも透き通ったブルーの世界。イメージしていたとおりの氷の世界があった。が、しかし常にいろんなものが滑り落ちてくるのをすり抜けて入るので非常に危険。一般に薦められるものではない。

ポールでマーキングされたルートは、サドルの向こう側のモツキツキ・バレー Matukituki Valley へ抜けるためのもので、それに沿っていくとどこまでも行ってしまう。ルート上にはとくにカスケード・サドルと書かれたプレートはないので注意。それにサドル自体はルートから少し外れた場所にある。「着いた」という達成感があまりわからないのが残念。サドルの反対側は険しい崖になっていて、足もとのすくむ眼下にはモツキツキ・バレーのパノラマが広がる。

サドルまでは3時間半で着いたがこれは早い方だと思う。往復で8時間くらいをみて、朝早めに出発したほうがいい。



ダート氷河の末端部分
岩のようだけど、実はこれぜんぶ氷。



氷河のトンネルの内部
どこまでも透きとおった幻想的なブルーの世界だった。

4日目 Dart Hut - Daleys Flat Hut 5時間

ハットからはずっと森の中を歩く。2時間45分で森を抜けてCattle Flatに出た。ここからは延々と草原帯に行く。1時間ちょっとで標識がありロック・ビヴィー Rock Bivvy (岩屋) まで10分とある。トラックを外れてややのぼり気味の森へ分け入っていく。雨だったのでビヴィーはちょうどいい休憩場所だった。切り株でできた腰掛がいくつかあった。

ビヴィーを過ぎてすこしくと増水時には渡渉が難しそうな川がひとつあった。男ならなんとか飛び越えられるが、ぼくが行ったときちょうど雨で、先を歩いていたアメリカ人カップルの女の子が渡れずに苦労していた。

ビヴィーの次のフラットを越えて、ふたたび森に入る。小さなフラットを過ぎて、次のフラットの向こう端ギリギリのところにDaleys Flat Hutが建っている。森の影になっているので直前まで見えない。



ダート・ハット付近の森

5日目 Daleys Flat Hut - Chinamans Blaff 5時間半

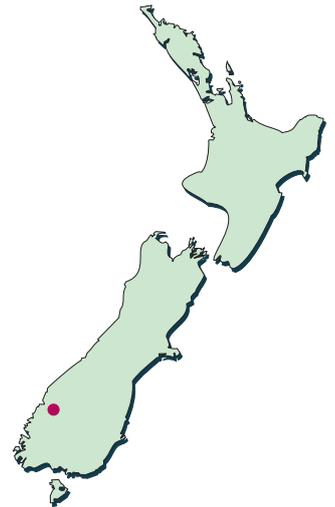
最終日はバスの時間に合わせて少し早めの8時半に出発した。1時間ちょっとでサンディー・ブラフ Sandy Blaff の入り口に着いた。ジェットボートかカヤックを予約している場合はサンディー・ブラフが集合場所と指示される。ただし集合場所はこのブラフ(崖)を越えた向こう側になる。前出のアメリカ人カップルは場所を勘違いしてボートに乗り損なってしまった。このサンディー・ブラフを越えるのは極端に険しい。まさに崖でロープが張ってあるが重い荷物があるときつい。上りはゆっくり行けばいいのだが、もし反対方向から来て下るなら雨天時はかなり危険だと思う。同ブラフを越えるのに30分。ジェットボートとカヤックとピックアップ場所にはちゃんと看板が出ている。

バスのピックアップ場所であるチャイナマンズ・ブラフ Chinamans Blaff は先ほどとは違って崖の斜面を巻くわけではなく、平坦な道が続く。シャトルバスのピックアップ場所はチャイナマンズ・ブラフと指示されるが、実際のピックアップ場所はさらに20分ほど歩いたチャイナマンズ・フラット Chinamans Flat になる。このあたりはラフティングやカヤックのフィールドになっているようで、ツアー客の団体やそのバスが何台か出入りしていた。

Routeburn Track

ルートバーン・トラック

日数 3
 体力的難易度 易
 技術的難易度 易



概要

ミルフォード・トラックと並ぶニュージーランドの代表的なトラック。キー・サミット Key Summit(919m)とコニカル・ヒル Conoccal Hill(1515m)からの山岳風景がすばらしい。が、しかし他の部分はとくにどうってことはない平均的なかんじ。高低差はあるが整備状況はよく、距離も33キロと短いのでそれほど苦労することなく歩ける。ただしミルフォード・トラック同様に小屋の予約が必要なのと、スタートとエンドが離れているのが難点。

日程

トラックは山脈を越える33キロの直線的なコース。その両端をふつうの道路で移動しようとしたらひどく大回りしなくてははいけない。およそ距離300キロ以上。

そこで、ふつうは2泊3日の一方通行で抜ける。クイーンズタウン方面の交通は限られるので、バスの本数が多いテ・アナウ方面を出口にしたほうが計画にゆとりができる。無理をすればデイ・ウォークないし1泊2日で歩くことも可能だが、バスの時刻を考えると現実的ではない。

トラックの両端が離れているので、トランピングに不要な荷物をどうするかという問題があるが、泊まっている宿で相談すればバス会社と連携して反対の町まで送ってもらえるそう。料金は大きさに関わらず1回\$6程度と聞いている。

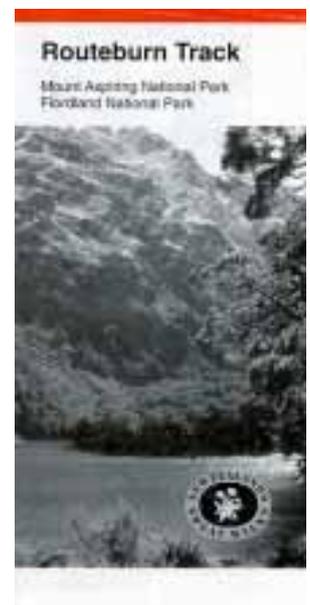
どちらかの町をベースにしてそこに帰りたい場合、予約をしておけばバスを乗り継いでその日のうちに帰ることもできる。

単純にトラックを往復するという手もある。そのほか多少日程に余裕があるなら、隣接するケイプルス・トラック Caples Track やグリーンストーン・トラック Green Stone Track につないで5日くらいで戻ってくるプランも人気がある。グリーンストーン・トラックほとんど平坦でとても簡単に歩けるトラックだ。それなのに森の雰囲気はルートバーンよりきれいだった。

ベースになる町

それぞれのトラックエンドに近い町はテ・アナウ Te Anau とクイーンズタウン Queenstown。近いといっても100キロ近く離れているが、トラック入口までの交通はすべてこれらの町がベースになっているので支障はない。

どちらもある程度の規模の町で、豊富な種類の宿とスーパーマーケット、銀行、DOC オフィス、ガス・カートリッジなどが買えるトランピング・ショップがある。



宿

〔Te Anau〕

- ・ *Te Anau YHA* (Youth Hostel) 220-224 Milford Rd. Te Anau
(03-249-7847) \$16 テントサイト有

テントサイトの広々とした大きな宿。いつもトランパーでにぎわっている。30年ほど前からビジターズ・ブック(寄せ書き帳)が残されていて、トランピングの参考になる情報が多い。町の中心から10分ほど離れていて少し不便。言っておけばバスは宿の前でピックアップ/ドロップオフしてくれる。

- ・ *Te Anau Backpackers Lodge* 48 Lakefront Drive, Te Anau
(03-249-7713) \$16

町のほぼ中心にある。買い物にもDOCに行くにも便利。

〔Queenstown〕

- ・ *Queenstown YHA* 88-90 Lake Esplanade (03-442-8413) \$18-\$19

とてもきれいで大きい。でも人が多くいつも騒がしい。値段も高め。

- ・ *Edz Lakeside Backpackers* 18 Lake Esplanade (03-442-8976) \$15

クイーンズタウンで2番目に安いバックパッカーズ。客層にややルーズな雰囲気は漂うが立地条件と値段を考えればそう悪くはないと思う。

アクセス

テ・アナウ側のトラック入り口はザ・デバイド The Divide と呼ばれている。テ・アナウとミルフォード・サウンドを結ぶミルフォード・ロード Milford Road の途中にあり、両地をつなぐバスが停まる。いくつかの会社が多数運行しているので時間帯はいろいろ選べる。料金はTe Anau ~ The Divideで\$20くらい。観光客が頻繁に走っているためヒッチハイクも難しくない。

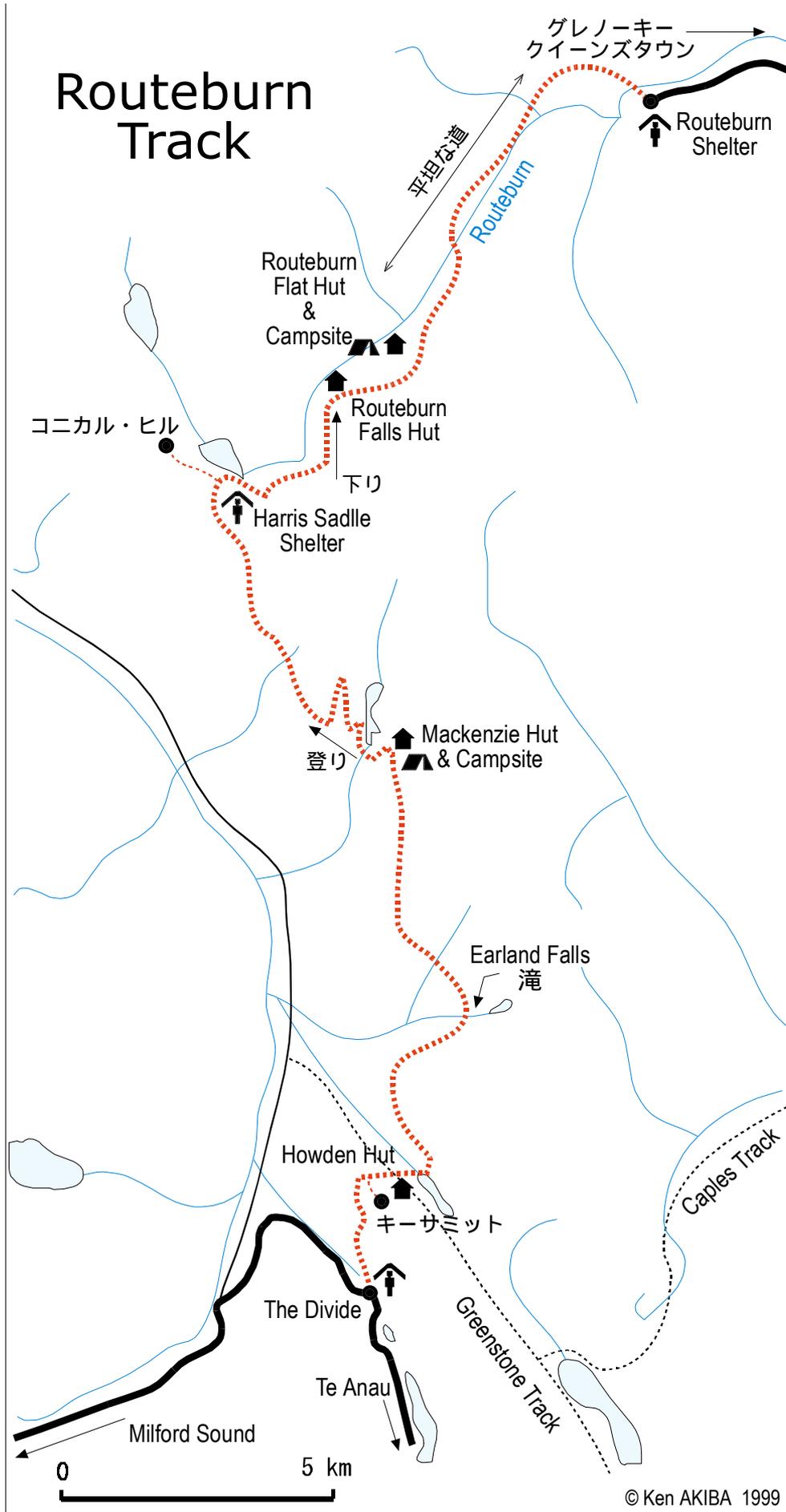
クイーンズタウン側は袋小路の未舗装道路で交通の便は限られる。*The Backpacker Express* (03-442-9939)が有名。クイーンズタウン発グレノーキー経由ルートバーン・トラック行きで片道\$20。グリーンストーン・トラックへの便もある。

なおどちらのトラック・エンドにも広いシェルターとトイレがあり、もしバスに乗り損ねたとしても野宿はできる。ただし規則ではキャンプ禁止になっている。

アドバイス

ハットは1泊\$35で、暖房、調理用ガス・ストーブ、夜間の照明が用意されている。トイレは水洗式で紙まで付いていた。トラック上に4つの小屋があるが、通常使うのはマッケンジー・ハット Mackenzie Hut とルートバーン・フォールズ・ハット Routeburn Falls Hut か ルートバーン・フラット・ハット Routeburn Flats Hut。後者ふたつは1時間くらいの距離しか離れていないのでどちらを選んでもかまわない。予約のときに指定するのだが、改築されたばかりのルートバーン・フォールズ・ハットの方がきれいで立派。フラット・ハットはこじんまりしているが、他にはないアットホームな雰囲気で悪くはない。

テント泊で歩くこともできる。マッケンジー・ハットとルートバーン・フ



ラット・ハットに併設されているキャンプサイトを利用する。この場合も予約が必要で1泊\$9。夏場はハット同様にいっぱい取れないことがある(どちらともミルフォード・トラックよりは取りやすい)。

ハリス・サドル・シェルター Harris Saddle Shelter はきちんと扉のついたシェルターで、手動水洗式のトイレもある。コニカル・ヒル Conical Hill (1515m)へのサイド・トリップのとき余分な荷物を置いていく人が多い。

ルートバーン・トラックから行ける2つのサイド・トリップ - キーサミットとコニカル・ヒルにはぜひ登っておきたい。暴論覚悟で言ってしまうとこのふたつを抜きにしたらルートバーン・トラックの魅力は半減してしまう。ルートバーン・トラックのセールスポイントの山岳眺望はほとんどこの2つの場所に集約されている。

もし帰路にグリーンストーン・トラックやケイプルス・トラックを利用する場合は、別にバックカントリー・ハットチケットかアニュアル・ハットパスが必要になる。ハットはカテゴリー2で\$10。ワーデンが駐留しているので、その場で払うことも可能。



1997年12月2日～4日で往復。後日98年2月12日から再び歩いたが、そのときは天気が悪く、マッケンジー・ハットで引き返し、グリーンストーン・トラックのMckellar Hutに泊まって帰った。

より本格的な山岳風景を楽しめるといわれるルートバーン・トラック。正直にここはぼくにとってはいまいちだった。もちろん悪かったわけではない。でもあのめんどくさい予約と高い料金のことを考えると、そこまでして歩くほどのところかなと思ってしまう。

山岳風景なら ケプラー・トラック Kepler Track の方が本格的だと思うし、森の感じもおおざっぱで、グリーンストーン・トラック Greenstone Track の方がよっぽどきれいだった。結局ルートバーン・トラックならではのものってなんなんだろう？

ぼくにとってルートバーンの印象は良くない。行ったのは夏といわれる12月だったけど雪にたたられるし、寝袋がぬれてしまうし、ガソリン・ストーブが火だるまになって使えなくなってしまうし、ろくなことがなかった。

ハット代 \$30は高いので テントサイト (\$9) を利用したのだけど、1日目に浸水でシュラフを濡らしてしまった。しょうがないからハットのストーブで干させてもらおうと思っていたら、どういうわけだかすぐにワーデン に見つかって、立ち入り禁止を言い渡されてしまった。

「あなたはテントサイトのお金しか払ってないから、ここを使う権利はないの」

「でもシュラフが濡れちゃって、夜寝られそうにない。お願いだから干させて」

「だめ。中を見るだけならいいけどヒーターにあたっても腰を下ろしてもダメ」

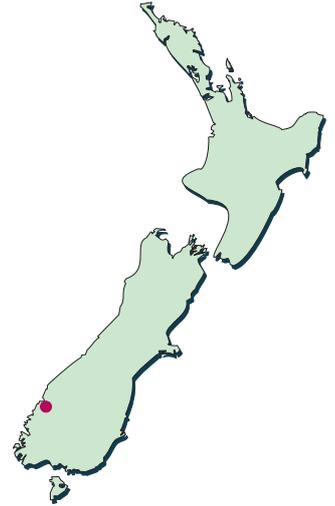
融通のきかない気の強そうな女性ワーデンだった。

本当は3泊4日で往復しようと思ってけど、ストーブが壊れてしまったので、しょうがなく2泊3日で往復してしまった。悔しいけどあのマッケンジー・ハットのワーデンに言って1泊分のキャンプ・パスのキャンセル手続きをしてもらった。約半額もどってきた。

Milford Track

ミルフォード・トラック

日数 4
 体力的難易度 易
 技術的難易度 易



概要

世界的に有名でNZもっとも人気の高いコース。あたり一面苔むした緑色の森は、宮崎駿の映画に出てくるような景色で神秘的ですらある。氷河で作られたダイナミックなU字谷の絶壁から流れ落ちる無数の滝、裏をくぐれるニュージーランド最大の滝など、NZを代表するトラックだけあって楽しみは多い。峠をひとつ越える以外は驚くほど平坦で、まさに「散歩道」の延長といったかんじ。健脚の人でなくてもそう無理することなく歩ける。

日程

完全予約制で3泊4日の行程がきっちり定められている。原則的に延泊など変更はできない。出発日を決めればすべて自動的に決まる。

予約とアクセス

ミルフォード・トラックは人気が高く、夏のハイシーズンに歩こうと思ったら、数ヶ月まえから予約しておく必要がある。日本から予約する場合は、ファックスで空き状況を調べて予約を入れ、カードで代金を支払う。

僕の場合、11月半ばにクライストチャーチのインフォメーション・センターで申し込んで1月ころ歩きたいと言ったらいちばん早くて1月27日といわれた。このときは3人いっしょに申し込んだが、ひとりだったらもっと余裕があったと思う。そこで、電話代\$1、3泊分のハット代としてひとり\$90を払った。

後日、トランピング出発の前日に国立公園ベース、テ・アナウ Te Anau のDOCオフィスで正式なハット・チケットを受け取った。その際に、ミルフォード・トラックまでの交通機関の予約も受け付けてくれる。

一般には、テ・アナウからテ・アナウ・ダウنز Te Anau Downs というところまでバス(\$11)で行き、ボート(\$38)に乗り換えてトラック入り口 Glade Wharf に着く。予約のとき「朝8時にDOCに集合」といわれるが、申し出れば宿へのピックアップもしてくれる。帰りも同様。

トラックの終点、サンドフライ・ポイント Sandfly Point からはボートでミルフォード・サウンドへ渡り、バスでふたたびテ・アナウに戻るのがノーマルコース。ここでは若干のアレンジが可能だ。

まずサンドフライ・ポイントからのボートかわりに自分でカヤックを漕いでいくツアーがある。料金はボートよりすこし安い(\$19)。数人のインストラクターがついて、バックパックを運んでくれるので初心者でも問題はない。ただ、晴れていればいいが、そうでなかった場合、雨で寒い中、風と戦いながら漕ぐのはつらいと思う。これは完全予約制で、当日の天気のみでキャンセルというわけにはいかない。予約はDOCではなくテ・アナウの町



テ・アナウの宿についてはルートバーン・トラックの項目を参照

の中心にあるインフォメーション・センターで行なう。

またせっかくミルフォード・サウンドまで行くのだからと、帰りにクルージング・ツアーに参加する人も多い。クルージング船の便数は多いのでミルフォード・サウンドまでの交通を予約をしておいて、あとは現地での飛び込みで大丈夫だ。

ハット

調理用ガス・ストーブ、ヒーター、水洗トイレが完備されている。每晚8時ころミーティングがあり、駐留しているワーデンから、明日の天気やトラックコンディションの注意などがある。

ハットのつくりで疑問に思ったのだが、なぜかどのハットもトイレが屋外のやや離れた場所に作られている。この地方は四六時中、雨が降っている場所で、トイレに行くにはどうしても雨にぬれてしまう。この場面だけは、傘を持っていれば便利だと思った。

サイドトリップ

[Sutherland Falls]

サザーランド・フォールズ Sutherland Fallsはニュージーランド最大の滝で落差は580メートルある。実際は3段にわかれているのだが、それでもすごい風圧の水飛沫で迫力がある。

おもしろいことに滝の裏側にまわることができる。滝の左側から壁に沿うように裏へ入っていく。すこし近づいただけでものすごい風圧でかなり怖い。台風のような強風と水飛沫。たとえ完全防水の雨具を着ていたとしても、首筋や袖から容赦なく水が流れ込んでくる。これにチャレンジするならば、最初から半そでシャツ・短パンで行くのが賢いやり方。もちろん靴の中が水たまり状態になる。

この滝へは、3日目に通る Quintin Hut (ガイドツアー用のハット) から分岐していく。近くに個人トレック用のシェルターもあるので、そこに荷物を置いていくのが一般的だ。往復には1時間半ほどかかる。

その他

[キャンセル待ち]

いっぱい予約が取れなかった場合でも、時間があるなら現地でのキャンセル待ちでどうにかなる。もし空きができれば、当日の朝に宿に電話がくることがおおい。ひとりだったらみんなだいたい3、4日以内に出発できていたようだ。この場合、昼のバスで出ることになるが、1日目の歩行時間は2時間だけなので、おおむね夕方まえにはハットにつける。

[サンドフライ対策]

ミルフォード・トラックはサンドフライのメッカといってもいい。ぼくの知っているかぎりニュージーランドのなかでいちばんひどかった。ポートを降りてすぐにそのすさまじさがわかる。どこからともなく集まってきて、瞬く間に黒い影ができる。持っている虫除けが少なくなっていたら、まよわず

新品を買ったほうがいい。

[荷物の防水]

雨はぜったいに降る。そう思っていたほうがいい。寝袋や衣類には十分な防水対策が必要だ。寝袋を外にくくりつけるなんてもってのほか。個々の荷物をビニール袋で包むのはもちろんのこと、パックライナー Pack Liner (ザックの中に入れる大きなビニール袋。DOCで\$4くらいで売っている)を併用して、口をしっかりと折り返しておく。ザックカバーもあったほうがいいが、なければゴミ袋を加工したものでも十分に用を足す。

[初日の食事は豪華に]

1日目は2時間弱しか歩かない。車も走れるような整備された平らな道を歩くだけなので、はっきりいって拍子抜けする。ハットへの到着も早く、どうしても小屋で過ごす時間が長くなる。そこで初日には多めに食料を持って行って、豪華な食事を楽しむことを提案したい。たった2時間だけと思えば、重い缶ビールでも何本も持っていけるし、気温が低いから生の肉もOKだ。ビーフステーキにビールなんて、山小屋らしくない食事を楽しめる。



パックライナー

トラック・ダイジェスト -1998年1月28日～30日

1日目 Glade Wharf Clinton Forks Hut 1.5時間

小雨の降るなか、ボートはスタート地点の棧橋 Glade Wharf についた。上陸して、靴紐を締めなおしていると、いつのまにかサンドフライの大群に囲まれていた。

トラックは林道と言ってもいいくらいに幅が広く、平らに整備されている。実際にこのあたりは4WD用の道で、正式なトラックは15分先のガイドツアー用の設備 Glade House の先からはじまるらしい。しかしそんな整備具合とは裏腹にまわりの木々はすでに他とはちがう古ぼけた雰囲気をかもし出している。

クリントン・リバー Clinton River にかかる長いつり橋を渡ると、森のなかへ入り、山歩きの雰囲気が始まった。ずっと川に沿って、よく整備された歩道を歩いていく。凸凹もなく目をつぶってでも歩けそうなくらいの道だ。

やがて川が見えなくなって、あたりは完全な森になっていた。あたり一面、苔。木の幹も、地面も岩もすべて苔でおおわれている。歩くたびに、足が沈み、ふわふわとスポンジの上を歩いているようだ。見えるかぎりすべての景色が、くすんだ緑の苔におおわれていた。この苔むし具合はちょっと他では見られない。そんな森を抜けると、ひらけた空間にクリントン・フォークス・ハット Clinton Forks Hut があった。



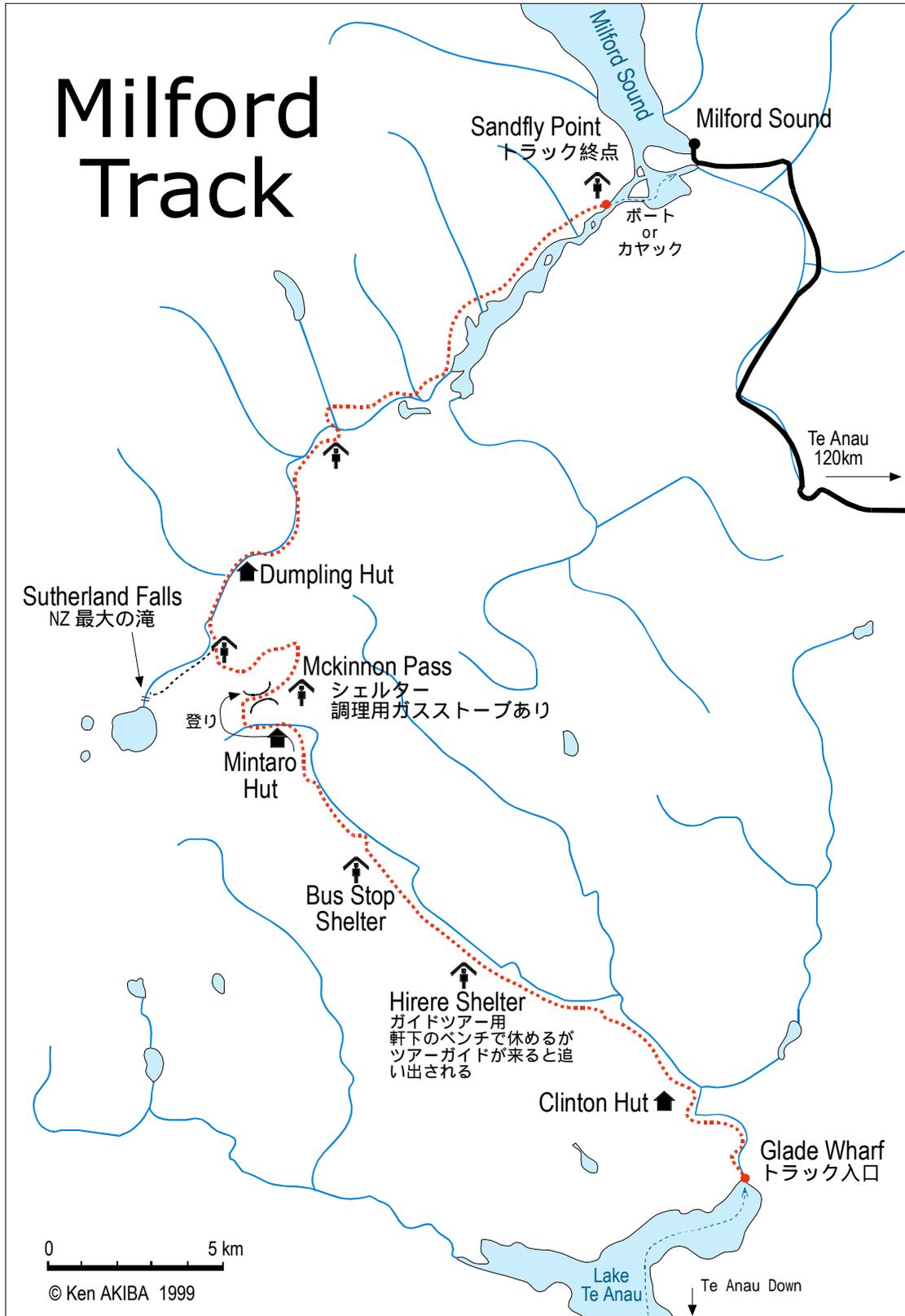
クリントン・リバーに架かるつり橋

2日目 Clinton Forks Hut Mintaro Hut 4時間

ガイドツアーの人たちと一緒にするのがいやだったので、すこし早めに出発した。雨は昨日から降り続いていている。朝、乾ききっていない雨具に袖を通すのは気が重い。

最初は前日と同じく森の中をあるく。雨の中だと休憩するのに苦労する。やっと荷物を下ろせたのはHirere Shelterだった。ここはガイドツアー用

のシェルターで、建物には鍵がかかっているけど、屋外にも屋根付きのベンチがある。休んでいたら、ガイドツアーの無線機を持った人がきて追い出された。彼女はお茶の準備をするために先に来たらしい。「この先のバスストップ・シェルター Bus Stop Shelter でも快適に休めるから」とか言われて行ってみたら意外と遠く、サンドフライの巣窟でとても落ち着いたとこ



るではなかった。

やがて開けた草原へ出た。氷河で作られたU字谷の底部分だ。両脇に切り立った垂直の岩壁が立ちはだかり、いく筋もの滝が流れ落ちていた。むかしこれだけの高さの氷河がここに流れていたのだと思うと、人間の小ささを思わされる。

雨で水溜りができて道がふさがれているところが何ヶ所もあった。いくつかは、きちんとした迂回路 flood Route が作られていたが、それ以外のところの通行には苦労した。最初は藪こぎしたり、石をおいて橋を作ったりしたが、しまいには面倒くさくなって靴のままザバザバと水の中を歩いた。どのみち濡れるのだから、最初からこうしておけばよかったと思う。

トラックは、昔の氷河の跡を奥へ奥へとすすむ。谷の幅も狭くなってきてふたたび森林地帯へ入る。やがて目の前に立ちはだかる壁のようにみえる谷のどん詰まりをめざして登りがはじまった。このままどこまでも登っていくのか？ と思ったら、次のハットを示す案内板があった。

メイントラックをはずれて5分も歩くとミンタロ・ハット Mintaro Hut についた。目の前には100メートル以上あるような岩肌の絶壁が迫っている雄大な口ケーションだ。夕方、それまで降り続いていた雨がやんで、夕日がオレンジ色に岩肌を照らした。

3日目 Mintaro Hut Dumpling Hut
6時間 + 1時間半(サイドトリップ)

雨こそは降っていないが、いつ降ってもおかしくないような曇り空だった。出発してすぐに、急なのぼりが始まった。草だけが生えた斜面を幾折も幾折も折り返しながら登っていく。傾斜はそれほどきつくない。登るにつれて、昨日まで歩いてきたU字谷の全貌が見えてきた。昨日の景色を思い出しながら歩いていると、意外と楽しい登り道だった。

斜面を登り終わるとマッキンノン・パス Mackinnon Pass(峠)についた。このころになるとついにガスがではじめて、ハイライトである峠からの眺望はほとんど見られなかった。

吹きさらしで風も強く、さっきの登りの汗が冷えて震えるくらいに寒くなってきた。気温は9℃。真夏の1月でこの気温だ。モニュメント付近で休んでいたが耐えられなくなって、すこし離れたシェルターに向かった。シェルターには自由に使えるガス・ストーブがあった。震える手でお茶を沸かして、やっと落ち着いた。

峠を越えて下りに入ると、浮石が多く足場が悪くて歩きにくい。これまでの楽さからは考えられないほど苦労した。ちょっとミルフォード・トラックを甘くみていたかもしれない。

ふたたび森林地帯にはいると、最近作られたらしい木の階段がずっと続いていた。脇を流れる急な川にはいくつもの立派な滝が見られた。

次のシェルターは、ガイドツアー用ハット Quintin Hutの向かいにある。噂では「早くつくサンドイッチが食べられる」と聞いていたが、本当にテーブルの上にサンドイッチが置いてあった。どうやらガイドツアー用のが余ると、ここに置いておいてくれるらしい。ありがたういただいた。

シェルターにザックを置いて、サザーランド・フォールズ Sutherland

Fallsを見にいった。片道40分くらいかかる。滝のある広場へ出ると、すでにすごい水しぶきだった。あたり一面霧で覆われて滝なんか見えやしない。轟音と風圧と水しぶき。それだけが滝の大きさを物語っている。

とても滝に近づけたものではないのだが、せっかく来たのだからと、滝の裏をくぐるのに挑戦した。滝の左側を大回りで近づいていく。風圧で真正面からは進めないの後ろ向きに肩越しにすこしづつ歩を進める。轟音のなか、どこが落下する滝の本体なんだか分からない。かなり危険を感じたけど、勢いで行ってしまった。滝の裏側へ入ると、これまでの風圧がフッと消えて、目の前を白いもやに包まれたような水の壁があった。反対側にも抜けられそうだったけど、安全パイをとってもと来た道を引き返した。

首筋や手首から流れ込んだ水で、雨具のなかもびしょぬれになった。体が冷えると危ないのでそのまま急ぎ足で、ダンプリン・ハット Dumpling Hut へ向かった。ヒーターのついたハットへついたときにはほっとした。

4日目 Dumpling Hut Sandfly Point 5時間

昨日の夜まで激しく降っていた雨も、朝にはやんだ。今日はトラックの終点サンドフライ・ポイントからのシーカヤック・ツアーの集合時間の2時間に間に合わせるために、すこし早足で歩いた。ふつうはボートでミルフォードサウンドへ行くのだが、DOCのオフィスでもっと安い手段はないのかと聞いたら、このツアーを紹介してくれた。安くてしかもシーカヤックも体験できてしまうのなら、一石二鳥じゃないかと申込んだ。

天気はどんどん回復方向へ向かっている。歩き始めてしばらくすると、ついにカンカン照りのいい天気になった。こうなってくると暑くて仕方ない。サンドフライがいるからできれば脱ぎたくなかったけど、ついに短パン・Tシャツになった。

この日の行程はずっと森の中で、1日目、2日目の景色と大差がない。それが延々と続くからちょっと飽きてきた。途中、名前のついた大きな滝があったが、いままでいくつもすごいを見てきたから、もういいってかんじだった。

いままであまり水は飲まなかったが、今日だけはそうはいかない。水を飲むという名目でしょっちゅう荷物をおろして休憩をとった。

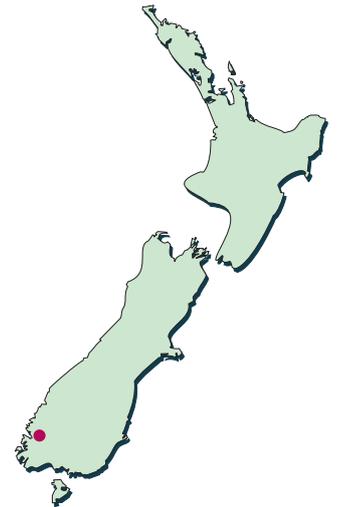
なんだかんだいって予定よりかなり早めにサンドフライポイントに到着した。でも早く着きすぎるのも考えものだ。その名のとおり、ここにはたくさんサンドフライが生息している。いちおう待合室というかドアのしまるシェルターがあるのだが、中は暑いし、変な匂いがこもっていてあまり長居はしたくない。そこを出たり入ったりして時間をつぶした。

ミルフォードトラックの帰路にシーカヤックなんて、聞いたことがなかったから申込んだのはぼくたちだけかなと思っていたら、10人近くの参加者がいた。日本人はぼくたち3人だけだ。二人乗りのカヤックで、後ろの人が足で足のレバーで舵をとる。手はひたすら漕ぐだけでいい。天気も上々で、風もなく、気持ちのいいカヤッキングだった。

Kepler Track

ケプラー・トラック

日 数 3-4
 体力的難易度 中
 技術的難易度 易



概要

テ・アナウ Te Anau の町から歩いてアクセスできる気軽なコース。ミルフォード・トラック、ルートバーン・トラックとならぶグレート・ウォークに指定されている。標高 1471m のマウント・ラクスモア Mt. Luxmore を中心とする山岳縦走が目玉で、本格的な「山」を体感できる。

ケプラー・トラックはきついというイメージが流布しているが、うわさほどではない。ルートバーン・トラックなどが楽すぎるだけで、日本の山歩きをすこしでも経験したことある人にはごくふつうの難易度。完全に一周する周回コースなので、行きも帰りもテ・アナウの町から歩いていける。ハットの予約も不要で、もっともおすすめできるコース。氷河の跡を髣髴させる湖のライン、Luxmore Hut 付近で鍾乳洞探索も楽しめる。

日程

完全に周回するなら2泊3日でも可能だが、2日目の行程はかなりきつい。この場合、1泊目ラクスモア・ハット Luxmore Hut、2泊目はアイリスバーン・ハット Iris Burn Hut でもモトゥラウ・ハット Moturau Hut でもどちらでもいいが、歩いてテ・アナウに戻るつもりなら、がんばってモトゥラウ・ハットまで歩いてしまったほうがいいだろう。余裕を楽しみたければ3泊4日で考えたほうが無難。

途中、レインボー・リーチ Rainbow Reach からシャトルバスに乗ることを考えているなら2泊3日で十分だ。1泊目ラクスモア・ハット、2泊目アイリスバーン・ハット。バスは15時と17時にあるから、3日目は朝8時前に出ればじゅうぶんに間にあう。

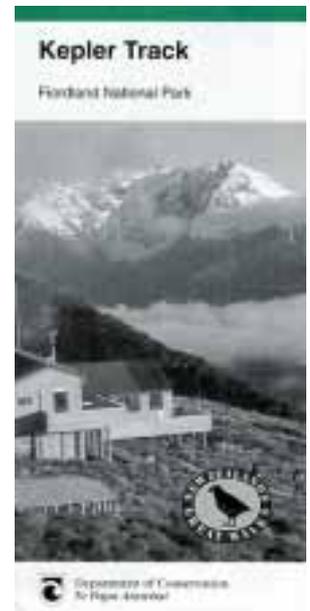
ハット

[グレートウォーク・ハット]

グレート・ウォークのハットとしてはLuxmore Hut、Iris Burn Hut、Moturau Hut の3つがある。予約は不要だが、事前に専用のハット・パスを買っておく。1泊\$15(夏季)。テ・アナウのDOCビジターセンターで買える。いずれも40人収容できる大きな小屋で、マットレス、調理用ガスコンロ、水洗トイレが用意されていて、夜になるとガスランタンをともしてくれる。

[バックカントリー・ハット]

モトゥラウ・ハット Moturau Hut から歩いて1時間弱のところにあるシャロウ・ベイ・ハット Shallow Bay Hut も利用できる。バックカントリー・ハットなのでグレートウォーク・ハット・パスとは別に\$5のバックカントリー・ハット・チケットが必要。



テ・アナウの宿についてはルートバーン・トラックの項目を参照 p94

場所は、モトゥラウ・ハットからレインボー・リーチ Rainbow Reach 方面へ40分ほどのところにある Shallow Bay への分岐へ入り、オレンジ色のマーキングを頼りに行く。ぼくが行ったときには、道をふさぐように大きな水たまりがあったので、途中でやめて引き返した。

実際に泊まった人の話を聞くと、4人でいどの小さな小屋で、かなりボロいらしい。マットレスはあるけど、もちろんガス・ストーブはない。ときどきハンターたちが利用しているそう。汚くて最悪、という人もいれば、静かなコンディションで最高だった、という人もいる。

[キャンプ・グランウンド]

指定されたキャンプ地が Brod Bay と Iris Burn Hut の近くの2ヶ所にある。しかしこのふたつを利用してキャンプのみで踏破しようというのはちょっときついと思う。テントをかついだ上に、高度差1000m ちかくを1日で登って下りようというのだから。時間にしたら早くて8時間くらいだろうか。

不可能ではないと思うが、かなりきつい計画になる。キャンプ代\$6というのは魅力的だけど、ハットはどこもきれいで、快適さから\$15くらいの価値はあるんじゃないかと思う。なるべくハット利用を勧める。

アクセス

テ・アナウの町のはずれにあるDOCのビジターセンターから、湖沿いの遊歩道を歩いて40分くらいでトラックの入り口、コントロールゲート Control Gates に着く。

マナポウリ Manapouri へ向かう道路からも行かれる。コントロールゲートに駐車場がある。ただしこういう駐車場では盗難が多発しているので心配ならやめたほうがいい。ぼくがモーターバイクを停めたときには、長めのワイヤーで駐車場の柵にくくりつけておいた。それでも気休めにすぎず盗まれるときは盗まれる。

テ・アナウからコントロールゲート Control Gates、もしくはレインボー・リーチ Rainbow Reach までシャトルバスが運行している。夏場だけのサービスで1日に数便ある。料金は\$15くらい。予約しておけば宿からのピックアップも可能。

テ・アナウの町の中心にあるインフォメーション・センターから、Brod Bay までのボートサービスもある。これで最初の1時間くらいをスキップできる。予約制らしいが詳細は不詳。

サイドトリップ

[Luxmore Caves]

ラクスマア・ハット Luxmore Hut から歩いて10分ほどのところに鍾乳洞ラクスマア・ケーヴ Luxmore Caves がある。観光設備があるわけではなく、懐中電灯持参で自分のリスクで入っていく。ハットの壁に、鍾乳洞のなりたちや中に入る時の注意が貼ってあるので目を通しておくこと。

入ってすぐは、口の広いただの洞窟だけど、数十メートル先の背をかがめ



グレート・ウォーク・ハット・パス。裏に出発日と宿泊日数が書きこまれる

て通るところを過ぎたあたりから、鍾乳石が目立ち始める。そこを過ぎれば光が届かない暗黒の世界。狭い通路がどこまでも奥へ伸びていく。入り口から30分ほどのところまで入って引き返したが途中で迷いそうな枝道はなかったとおもう。でも途中で明かりを失ったら引き返すのはむずかしい。複数の明かりを持って何人かで行くべきだろう。

[Mt. Luxmore]

マウント・ラクスマアの山頂へはメイントラックを外れていく。メイントラックを歩いていると、「山頂への分岐、何百メートル先」とサインポストがある。しかしその当のポイントにはなんの看板もないから分かりにくい。サインポストはMt. Luxmoreを巻いている途中にあるが、その巻き終わり、鞍部に出たところから、稜線にしたがって登っていく。15分程度で山頂につく。貴重品だけ持ってザックは分岐に置いていったほうがいいだろう。

[Water Falls]

アイリス・バーン・ハット Iris Burn Hut から15分ほどのところに滝がある。このハットに泊まるのであれば散歩がてら行ってみるのもいいかもしれない。でも無理して行くほどのところには思えなかった。ちなみのこの滝は、Hanging Valley Alpine Shelter から降りてくる途中のLookout (見晴台) から遠望できる。

《その他》

[サングラス必携]

12月7日、ニュージーランドでは初夏といったところだが、トラック上にはかなりの雪が残っていた。歩くのにはそれほど支障はないが、カンカン照りの天気だと、紫外線で目をやられてしまう。このせいで動けなくなって、小屋に連泊を強いられた日本人ランパーを知っている。できれば事前に残雪の有無をDOCに問い合わせたほうがいい。ちなみに2月1日、ふたたびケプラー・トラックを歩いたときは、ほとんど雪はなかった。

[サンドフライについて]

コース中、サンドフライが気になったのは、Brod Bay、Luxmore Hut、Iris Burn Hut、Moturau Hut 周辺だ。Luxmore Hut は森林限界の上にあるのに、屋外のテラスでぼーっとしてたら足首をやられた。さいわい建物の中にはほとんど入り込んでいなかったようだ。

特にひどいのがIris Burn Hut、Moturau Hutで、群れをなして飛び回っている。建物に入るときにはサンドフライが紛れ込まないように細心の注意を払ってドアを開け閉めをしていた。日中にトイレに行くときはかなりの確率でやられてしまう。

[<Luxmore Hut> 日帰り]

テ・アナウからLuxmore Hutまでの往復日帰りも可能だ。ガイドブックにはボートを利用しなければ無理のようなことが書かれているが、すべて歩きで通すことも不可能ではない。コントロール・ゲートからハットの往復で5時間半くらいだった。コントロール・ゲートまでの歩行時間を考えても、夏場の日が長い時期だったら朝早く出れば大丈夫だ。でもすくなくとも健脚向きであることは間違いない。

トラック・ダイジェスト -1997年12月7日～9日

1日目 Control Gates Luxmore Hut 4～5時間

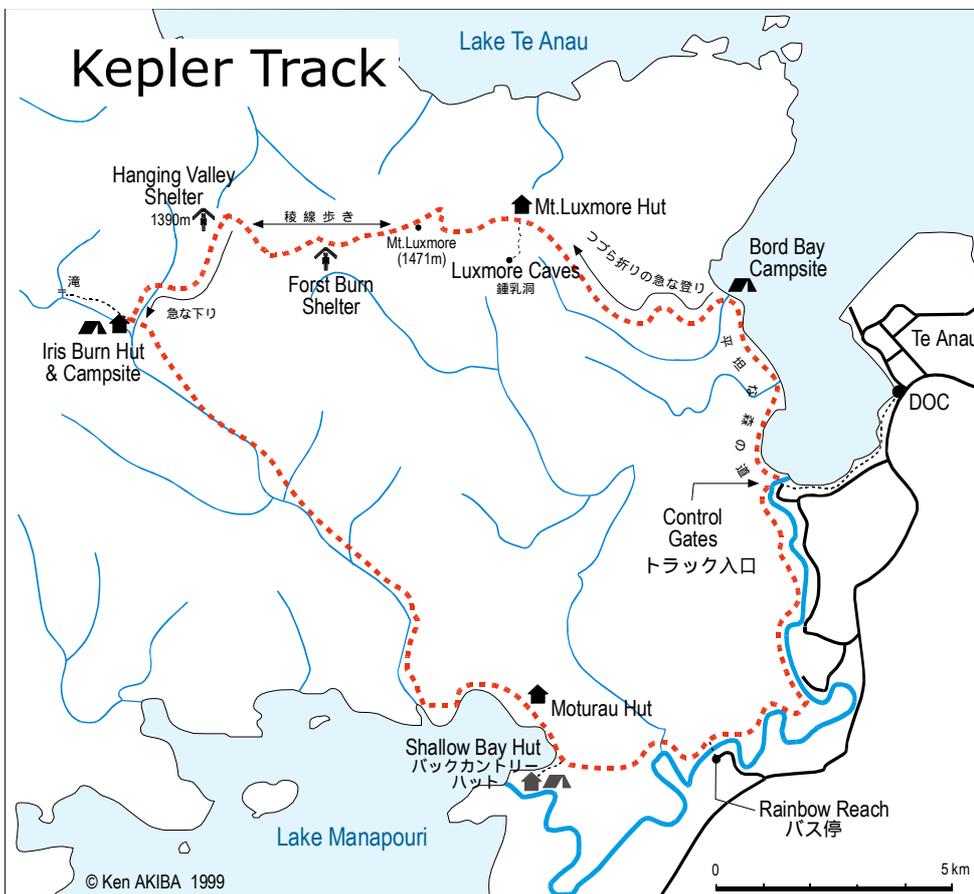
テ・アナウのDOCビジター・センターから40分ほど遊歩道を歩いたところからトラックは始まる。<Lake TeAnau> から<Lake Manapouri>へ流れる川にかかる水門(Control Gates)をわたると、森の中へ入りいよいよケプラートラックのスタートだ。

湖沿いの平坦な森のなかをのんびり歩く。まわりは背の高い杉のような木で見とおしはいい。ときおり小川にかかる橋を渡ったりして、森林浴という気分になってくる。

1時間から1時間半ほどで<Brod Bay>のキャンプサイトにつく。砂浜と森のなかなかい口ケーション。でもサンドフライが多い。休憩と思って砂浜で寝転がったらすぐにサンドフライの襲撃にあった。トイレ、炊事場、かまど(fireplace)の設備があるが、あまり落ち着きそうにない。

キャンプサイトを過ぎると、本格的な登りがはじまる。傾斜は急だけど、道幅は広く、ならされているので歩きやすい。メリハリもなくひたすら登るので嫌気がさしてくる。ときおりまわりの森の様子をみると下とはずいぶんとかんじが違うんだな、と気分転換になった。

登りはじめて2時間弱ほどで、<Limestone Bluffs>につく。石灰岩の岩壁で、あえて名前をつけている理由がわからない。なんでもちいさな化石がいっぱい詰まっているというけど、ふつうにみたらただの崖でしかない。ここでお昼にしようと思っていたけど座れるような場所はなかった。下は目の



こまかい砂で、荷物を下ろしたら真っ白になった。

Limestone Bluffs を過ぎたあたりから、振り返ると下に広がるテ・アナウの湖が見えてくる。あの湖面からこの高さまで登ってきたんだ、という達成感があって気分がいい。まわりの森の様子も変わって背のあまり高くない木が目立ってくる。そしてなぜか苔の類が増えて、枯れかかったような細い木々にひげのように長くなびている。あたり一面、白味がかった緑の世界で幻想的だ。

森林限界を越えたら、低い枯草におおわれた大草原(タソック帯)が目の前に広がった。なだらかに隆起する草原のなかを<Luxmore Hut>へ向けて一本道が続いていく。うしろを振り返ると下に広がるテ・アナウ帯と遠くへ連なる山々の景色がすばらしい。

森林限界を越えてからの道は、ずっと先まで見とおせるから、やけに時間がかかる気がする。やがて左カーブをしながらひとつ隆起を越えたら、大きな木づくりのラクスマア・ハット Luxmore Hut が見えてきた。11時半にコントロール・ゲートを出発して、ハット着は3時半だった。すでに10人近くの先客がいて、お茶を飲んだりしてくつろいでいた。

荷物を置いてベッドを確保してから鍾乳洞<Luxmore caves>に行った。ハットから10分ほど。入り口は広く、水の流れが傾いた洞窟の奥へと続いている。単3電池2本のマグライトを頼りに奥まで進むと、30メートルほどで背をかがめないと通れなくなった。そこを過ぎてしまうと、ふたたび洞窟は広くなって、そのままどこまでも続いている。

ハット・ワーデンによると、鍾乳洞の全長は約1キロあるという。800メートル付近にビニールテープが貼ってあってそれ以上は立ち入り禁止になっているそうだ。

せめてビニールテープまでは行ってやろうと思ったけど、入って30分くらいで、引き返してしまった。あれほどに真っ暗で閉塞された空間ははじめての経験で、なんともいえない妙な気分だった。



広くて快適なラクスマア・ハット

2日目 Luxmore Hut Moturau Hut 9時間

ワーデンの勧めで、日が昇るまえの朝6時半に出発した。というのは12月はじめだということにまだ雪が残っていて、サングラスなしに歩くのは危険らしい。なんでも前日に歩いたトランパーが、サングラスなしで、すっかり目をやられてしまって、次のハットで動けなくなっているんだそうだ。

30人近くいたうちサングラスを持っていなかったのは、ぼくとオランダ人の女の子だけで、チャーミングな女性のワーデンさんが、早く起きようぼくたちに目覚まし時計を貸してくれた。

あたりがうっすらと明るくなったところに出発した。天気はあまり良くない。風があってもものすごく寒い。なにもおおわれていない頬がキリキリといたい。キーホルダーの温度計は0 ちかくを指していた。

昨日までの行程で雪はなかったけど、マウント・ラクスマア<Mt. Luxmore>をめざして登っている途中から、残雪が目立つようになってきた。場所によっては50センチ以上も積もっている。

ラクスマア・ハット<Luxmore Hut>から次のアイリス・バーン・ハット

<Iris Burn Hut>までが、このトラックのハイライトで、見通しのよい稜線上を歩く。それだけに天候によっては非常に危険で、ハット・ワーデンも、ちょっとでも危険だと思ったら迷わず引き返せと繰り返し言っていた。

たしかにそこは本格的な「山の世界」だった。ちょっと足を滑らせたらどこまで転がり落ちるんだろう、と思う個所がいくつもある。でもそれだから、すべてが自分に任されているという、自由な開放感が味わえる。そんな意味でとても気分がいい。

もちろん景色は雄大ですばらしい。眼下には複雑に入り組んだ形の湖が広がっていて、そこから急激に立ちあがって山々が座っている。氷河によって作られた独特の地形なのだろうが、山と湖のこんな不思議な取り合わせはなかなか見られない。

途中にふたつのシェルターがある。ちいさな小屋でなかには小さなベンチがあり、すこし離れてトイレ(いちおう水洗)もある。雨や雪が降っているときには、本当にこれはありがたいものだとおもう。でも中にはなにかひどい臭いがこもっていて、ふだんはあまり入りたいたと思わない。

ひとつめのシェルター<Forest Burn Alpine Shelter>を過ぎたあとくらいから、ついに雪がばらつきはじめた。DOCがいうように、シーズン問わずいつでも雪が降るとするのは本当なんだな、と気持ちを引き締めた。

ふたつ目のシェルター<Hanging Valley Alpine Shelter>をすぎると、極端に急な下りになる。その前半部分は木の階段が作られている。これが足腰にひびいてあまりよくない。また雨や雪ですべりやすく注意が必要だ。

山をおりると現金なくらいに寒さが消えた。森林圏に入ってから、急なつづら折のくだりが続く。つくづく反対まわりで歩かなくてよかったと思う。

比較的平らな場所にでると、まもなくアイリス・バーン・ハット<Iris Burn Hut>についた。時刻は11時。4時間半かかったことになる。最初はここに泊まろうと思っていたが、あまりに早すぎるので、もうひとつ先のモトゥラウ・ハット<Moturau Hut>まで行くことにした。

ここから先は、おおむね平坦な森林や草原をあるく。さっきまでは寒く風の吹きすさぶ山岳地帯を歩いていたのが信じられない。本当に変化に富んだコースだ。

気持ちのいい散歩道、けれどすでに相当の距離を歩いている。後半はかなりバテた。草原のなかに建物が見えて、「着いた！」とおもったら、<Rocky Point>のDOCの作業小屋だった。中には入れないが、外にベンチとテーブルがあって休憩ができる。トイレもある。

ようやくハットについたのは4時すこしまえだった。最後はほとんど惰性で歩いているだけで、ほんとうに長い1日だった。

3日目 Moturau Hut Control Gates 4時間

朝、ゆっくり起きて、のんびり食事をして11時くらいに出発した。今日はほぼ全行程アップダウンのない森林浴コースだ。途中、湿地などもあってそこそこに変化を楽しめる。

1時間半ほどで<Rainbow Reach>についた。川にかかるつり橋を渡ると駐



気持ちのよいアルパイン・クロッシング。この写真は2月で、12月に歩いたときはあたり一面雪だった。

実は1998年2月1日～3日にもういちど歩いている。そのときはアイリスバーン・ハットに泊まった。夜にはワーデンが近くで録音したというキウイの鳴き声を聞かせてくれた。

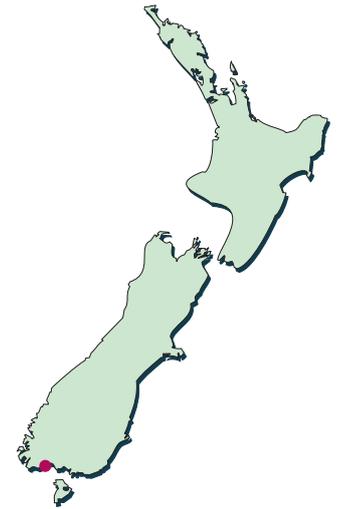
車場があり、道路へ出られる。夏なら1日何本かバスがある。

そこを無視して、あとはひたすら川沿いに出発地点のコントロール・ゲートを目指した。この川沿いの道はただらと変化がなくつまらない。コントロール・ゲートにバイクを置いてなければパスしたいところだ。

Waitutu Tracks - South Coast Track

ワイトウトゥ・トラックス - サウス・コースト・トラック

日数 2-3
 体力的難易度 易
 技術的難易度 中



概要

かつての林業トロッコ跡を行くトラック。現存する世界最大の木造陸橋の上を歩ける。高さ36m長さ125mのPercy Burn Viaductは圧巻。高所恐怖症でなくても足がすくむ。トラックとしては5泊6日の往復になるが、陸橋を歩くためだけだったら2泊3日、無理すれば1泊2日でもOK。トラックはよく整備されていて、初心者でも問題なく歩ける。海沿いのトラックなので途中で貝が採れるのも楽しみのひとつ。Lonely Planet社のガイドブックには、紹介程度にしか書かれていないが、ひそかに人気の場所らしく、夏場なら毎日5、6人は入っている。

なおワイトウトゥ・トラック Waitutu Tracks というのは、この地方にあるふたつのコース、サウス・コースト・トラック South Coast Track と ハンプ・トラック Hump Track を含めた総称。しかしサウス・コースト・トラックのほうがだんぜん有名なので、ワイトウトゥ・トラックと言ったらこっちを指すことが多い。

サウス・コースト・トラックは将来、グレート・ウォークに昇格させる計画があるらしい。そんなことがハットに書いてあったが、当時1992から現在まで、特に計画が進んだ様子はない。

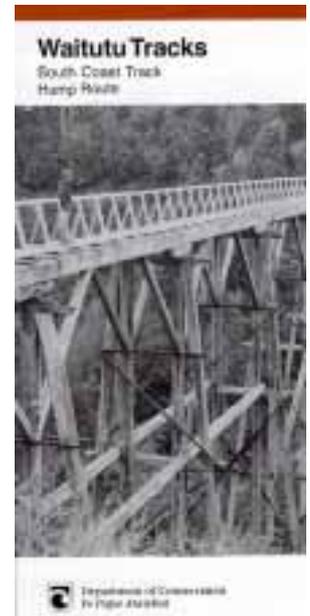
日程

インバカーゴ Invercargill とテ・アナウ Te Anau の間の町トゥアタペレ Tuatapere がベースになる。タクシーで30分ほどのブルークリフ・ビーチ Bluecliffs Beach から歩き始めて、6時間ほどで最初のポート・クレイグ・ハット Port Craig Hut。さらに1時間半から3時間の間に大小4つの歴史的木造陸橋を渡る。その先もトラックは続いていて2つのハットがある。奥に行くにつれてドロがひどくなり、景色もあまりかわらないので、無理して行くほどではないかもしれない。

ここでは初日にポート・クレイグ・ハットに泊まり、翌日デイ・ウォークで陸橋付近を散策し、3日目に引き返すというプランで紹介する。

ハット&地形図

トラック上に3つのハットがある。Port Craig Hut、Wairaurahiri Hut、Waitutu Hut。いずれもカテゴリー3で、20人収容可能。ハット・チケット1枚(\$5)。Port Craig Hutは、昔の学校の建物で現在はハットとして使われつつも歴史的建造物として保護されている。地形図はTopomap260-C46 (Port Craing)。



ベースになる町

最寄の町はトゥアタペレ Tuatapere。この町はダスキー・トラック Dusky Track へのアクセス（ボート）でも有名だ。インバカーゴ Invercargill とテ・アナウ Te Anau の間にあり、両者を結ぶシャトル・バスが途中で停まる。料金はインバカーゴからでもテ・アナウからでも\$20。バックパッカーズをかねたモーターキャンプがあり、町には郵便局、インフォメーションセンター、DOC オフィス、スーパーマーケット（Four Square）がある。

トゥアタペレへのシャトルバス

・ Spitfire Shuttle

03-218-7381 (Invercargill)

03-249-8077 (After Hours Bookings)

invercargill 発	13:00	Te Anau 発	8:30
Tuatapere 着	14:30	Tuatapere 着	10:00
どちらも片道\$20			

宿

・ Five Mountains Holiday Park

03-226-6418

テントサイト(\$10)、バンク・ルーム(\$10)、バックパッカーズ・ユニット(\$15)、self contain unit(\$20)。バックパッカーズ・ユニットがおすすめ。どこも2人部屋で、しかも中が1部屋づつ区切られている。室内に水道と机もある。利用者が少ないから完全に個室として使える。バンク・ルームというのがいわゆるふつうのドミトリー。キッチン共同だが、食器類は整っている。レセプションはティールームを兼ねていて、トラックへの車の手配もできる。

アクセス

トラックがはじまるブルークリフ・ビーチ Blue Cliff Beach はトゥアタペレの町から 20 キロほど離れている。そこまではタクシーを手配するか、地元のツアー会社へ送迎を頼む。町のインフォメーション・センターで紹介されたツアー会社の場合片道\$20だった。あとでDOCでもらった資料によると、タクシー会社に頼んだ方が安いようだ。帰りも迎えに来てもらうようにあらかじめ予約しておく。

ブルークリフ・ビーチ周辺は未舗装道路で交通量はほとんどない。ビーチへくる数少ない観光客がファームの車くらい。ヒッチは勧められないが通る車があれば停まってくれる可能性は高い。帰りの予約なしで行った場合、最悪のときはビーチから道路を数百メートル登ったところにファームがあるので電話を借りるなり、どうにかはなる。

タクシー

・ ValMckay Taxi Service

03-226-6681

トラック入り口までひとり\$10 (DOC の資料より)



トラック・ダイジェスト -1999年2月24日～26日

Bluecliffs Beach - Waikoaru River (漁師の集落) 45分

Bluecliffs Beach は玉砂利の海岸だ。ブーメラン型の延びる海岸沿いを歩いていく。崖があって海がすぐ迫っているので満潮の時は歩きにくい。崖のすぐしたの草地のなかにわずかな踏み分け道があるが、ぬかるんでいて歩きづらい。潮の引いた波打ち際を歩くのがベスト。歩きはじめて45分で Waikoau River にかかる吊り橋を渡る。トラック入り口にあった看板にこの橋は壊れていて使えない、と書いてあったが問題なく渡れた。橋を渡るとすぐに数軒の家がある小さな集落に出る。よくわからないが漁師の小屋らしい。



ブルークリフ・ビーチ

Waikoaru River - Track Burn (プライベート・ハット) 1時間

このあたりまでは車(4WD)用の道ができています。海沿いを歩くより、小屋の集落をつきつて4WDトラックに行くほうが楽。しばらくして再び海岸に戻るが、今度は玉砂利ではなく砂浜なので歩きやすい。

湾のどんづまりの少し手前から、ふたたび森林帯に沿って4WDトラックが現われるので、それに従って進んでいく。波打ち際を歩いていると見落と



Waikoau Riverを過ぎてからの砂浜



すので注意。海に面した小さな崖を巻くように内陸へ入ってややのぼり加減の道になる。

木々の中、わだちのはっきりした道を行くと右手に家(というより小屋)が見えてくる。無視してさらにまっすぐ進むと今度は左に プライベート・ハット があり、広い屋根のついたデッキがシェルターとしてトランパーに開放されている。雨水のタンクあり。ここまでに Hump Track への道や海岸へおりる道など枝分かれがあるので注意。いちばん太いメインのトラックをまっすぐ行けばいい。漁師の集落からここまで約1時間。

プライベート・ハットのすぐ奥にある沢 Track Burn (burnは沢の意味の古語)の橋は壊れて無くなっている。トラック入り口にあった看板には、増水時に通行不能になるとあった。でも、僕が渡ったときは、川幅2メートルくらい、深さはくるぶし程度で、そんな危険な場所には見えなかった。ふつうのコンディションなら飛び石伝いに渡れる。その先に自転車や車が入れないようにしているゲートがあって、正式に South Coast Track がはじまる。



デッキをシェルターとして使えるプライベート・ハット

Track Burn - Inland TrackとLow Tide Routeの分岐 1時間20分

これまでの海岸沿いのルートがややラフだったのに比べると、トラックは非常によく整備されている。グレート・ウォークなみと言ってもいい。ただこの辺りはかつて屈指の林業地帯だったせい、森が若い感じがする。

トラックは途中で Inland Track と Low Tide Route に分れる。潮が引いているときなら海岸沿い (Low Tide Route) を歩いて時間を短縮できる。しかし浜がせまく、最大に潮が引いているときでも、すぐ横に高い波が押し寄せていてすこし怖かった。足場が悪く、磯歩きが苦手な人は余計に時間がかかるかもしれない。すこしでも不安があれば Inland Track を歩いたほうが無難だ。Inland Track は森の中に行く。下草が茂っているところやぬかるんでいるところもあるけど、激しいアップダウンはなく、さほど苦労なく歩ける。



大きな木は見当たらずこうしたシダが目立つ

またDOCコースガイドの簡略地図からは分からないが、この海岸沿いルートと内陸ルートの分岐に出るまでに小さな浜を3回通る。それらを分岐ポイントと勘違いする可能性がある。分岐点にははっきりわかるように看板が出ているので覚えておいてほしい。地形図を用意していけばそういう心配はない。プライベート・ハットからこの分岐点まで約1時間20分。

分岐 - 合流 1時間 /Low Tide Route 1時間45分 /Inland Track

行きは出発時間を調整して、干潮のピークに Low Tide Route を通れるように計算していった。分岐から海岸沿いを歩いて再び内陸のメイントラックに合流するまでかかった時間は約1時間だった。帰りは Inland Track を通ってきた。この場合1時間45分かかった。

合流 - Port Craig Hut 30分

合流を過ぎるとひとつめの山小屋 Port Craig Hut は近い。森の中の小道を30分も歩けばぽっかりと開けた草地に建つ小屋に着く。途中で昔の水跡跡などがあるが、かつてこのあたりが港町だった名残はほとんど感じられ



ポート・クレイグ・ハット。

ない。

1920年代、このあたりはNZ屈指の林業地帯だった。そのとき積み出し港がこのクレイグ港 Port Craig だ。現在トランパーの小屋になっている Port Craig Hut はかつて学校の校舎だった。ハット内にはかつてのこのあたりの写真が貼ってあって、昔の様子をかいま見られる。

屋外にあるトイレのあたりから、海へ降りる踏み分け道が続いていて、10分ほどで岩場の海岸へ出られる。最後の部分はロープを使って降りる急な斜面だ。昔はここに立派な栈橋があった。しかし戦争のときに防衛上の理由で壊されたという。今となってはここが有数の港だったことを感じさせるものはほとんどない。

この岩場で Paua(アワビ)を採ることができる。干潮のときにタイドプールや岩の切れ目をのぞくと、オーバーハング状になった部分の下などにくっついている。岩と同じ色をしているので最初はわかりにくい。最初の1個を見つけてコツをつかめば、あとは簡単に見つかると思う。岩からこじるためにテーブルナイフやドライバーが必要。



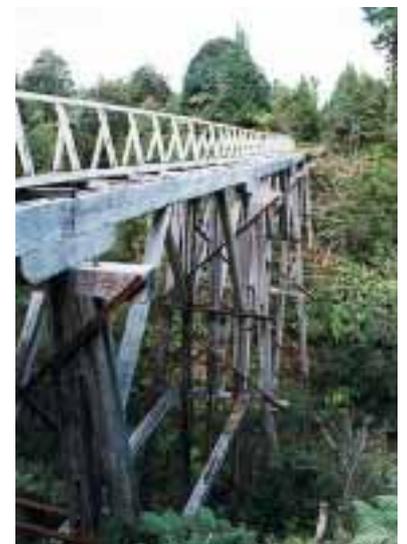
切通しのような線路跡。よく見ると枕木や釘が残っている

世界最大の木造陸橋 Percy Burn Viaduct へ 1時間半

ハットからさらに奥へつづくトラックが昔のトロッコ線路跡だ。崖を削った切通しのようなところもあり、凸凹のない道が続いている。よくみると枕木や錆びた釘が残っているのを確認できる。

ハットから歩いて1時間20分で最初の陸橋 Sand Hill Viaduct (17m high, 59m long) を通る。さらに15分歩くと世界最大の Percy Burn Viaduct (36m high, 125m long)。さすがに高さ36メートルともなるとちゃんと両脇に手すりがついている。

この先も2つの陸橋がある。でもひとつめのものとたいして変わらない。Percy Burn Viaduct を過ぎるとだんだんトラックが荒れてくるので無理して見に行くこともないと思う。いちばん奥の Francis Burn Viaduct まではハットから3時間くらい。Port Craig Hut からの気軽なデイ・ウォークだったらこのあたりが楽しむ限界。ぼくはさらに奥の Wairaurahiri Hut まで行って帰ってきたけど、距離は32キロ、往復8時間かった。空身とはいえちょっときつい道のりだった。



Sand Hill Viaduct
ひとつめの陸橋



世界最大の
Percy Burn Viaduct

Rakiura Track

ラキウラ・トラック

日 数 3
 体力的難易度 易
 技術的難易度 易

概要

ニュージーランドの南端にある自然ゆたかなStewart Islandのグレート・ウォーク。29キロの周回トラックを2泊3日で歩く。人も少なく静かな海岸と森が続く。

「ドロ」で有名なスチュワート島のトランピングでもさすがにGWのここだけは足元を汚さずに歩ける。というのはトラックのほとんどが木道になっているから。変化が少なくちょっと単調なトラックとも言える。

自分なりにコースをアレンジして歩いたから良かったけど、そのままのラキウラ・トラックでは辺境の地スチュワートのイメージからすると、魅力に乏しいような気がした。

日程・ハット

ルート上にあるふたつのグレート・ウォーク・ハット、Port William Hut、North Arm Hutを使用する。島唯一の集落であるハーフムーン・ベイ Halfmoon Bay (オーバン Obanともいう) から半時計まわりに歩いたとして、1日の歩行時間はそれぞれ4時間、4～5時間、3時間半。ほとんどが木道なので時間のわりに距離が稼げてしまう。ちょっとものたりないというのも事実。そこでぼくが歩いた変則プランをお奨めしたい。

それは1泊目のポート・ウィリアム・ハット Port William Hut の代わりにバングリー・ハット Bungree Hut に泊まるというもの。

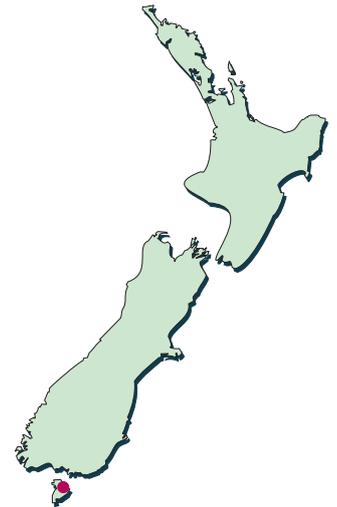
ラキウラ・トラックは、もともとは踏破に10日くらいかかるノース・ウェスト・サーキット North West Circuitというコースの一部をショートカットしてできたコースだ。ノース・ウェスト・サーキットはポート・ウィリアム・ハットの先へ続いている。そっちへ足をのばしたひとつめの小屋がバングリー・ハット Bangree Hut だ。ポート・ウィリアム・ハットから2時間。広々とした気持ちの良い海岸にあって、ハットの窓からみる景色がすばらしい。10日間のコースをすべて歩いた人の一人は「下手な奥地より Bangree のビーチがいちばんきれいだった」と言っていた。人が少なくアワビなども採れるので、余力のある人はぜひ足をのばしてほしい。

ふたつあるグレート・ウォーク・ハットはそれぞれ 30banks で1泊\$8、Bungree Hut (20banks) はカテゴリー3で\$4。

トラック上にはいくつかテント・サイトがあるが、ハット代が\$8に対してテントが\$6とたいして変わらないので、わざわざテントを担いでいくメリットは少ない。

アクセス

スチュワート・アイランドまでの交通はフェリーと飛行機がある。フェ



バングリー・ハットからの景色

リーは南島最南端の港町ブラフ Bluff から、飛行機はインバカーゴ Invercargill から出ている。どちらを利用するにしても世界最南端の都市とされているインバカーゴをベースにしたほうが便利だ。いずれの予約もインバカーゴのインフォメーション・センターや宿のレセプションでできる。

フェリーは揺れが激しく評判が悪い。お勧めはスタンバイ待ちで乗る飛行機。ユース・ホステルの会員証か国際学生証・国際青年証があれば割引が効いてフェリーより安くなってしまふ。9人乗りくらいの小さいプロペラ機で、1日に4便ほどある。よっぽど自然が好きならしか行かない辺鄙な島なので、キャンセル待ちでもおおむね希望する日に乗れているようだ。

空港まではシャトル・バスのピックアップを利用できる。これは予約が必要。乗合人数によるけど運賃は\$10前後だったように思う。インバカーゴの空港には広い駐車場があり、自分の車で行く場合は\$2で何日でも停めておける。

スチュワート・アイランドはほとんどが原生林に覆われていて、道路が走っているのは唯一の集落ハーフムーン・ベイ Halfmoon Bay 周辺のみ。島内の移動は徒歩で十分だ。

[インバカーゴの宿]

- *Invercargill YHA* 122 North Road, Waikiwi, Invercargill
(03-215-9344) \$15

町の中心から40分くらい離れていて不便だが、いつ行っても人が少なく非常に快適な宿。オフィスでスチュアート島への飛行機の空席状況を調べてくれる。

- *South Comfort* 30 Thomson St, Invercargill
(03-218-3838) \$16

B B H の評価で非常に点数の高い宿。町の中心にも近く便利。ただキッチンの使い勝手が悪いという意見もある。

アドバイス

トラックの情報、宿探し、なにはともあれ島についたらインフォメーション・センターへ行こう。島内の宿泊施設の写真付きファイルを見せてくれる。島の宿はどこも個人宅を開放しているような感じで、名前も Ann's Place(アンさんのうち)というような素朴な名前が多い。この *Ann's Place* は1泊\$10と安いので有名。オーナーの Ann はとても親切でいい人だけど、設備はあまりきれいではなく使い勝手が悪いので、気に入る人とそうでない人がはっきり分かれる。そのほか\$15前後で泊まれる宿がたくさんあるので宿の心配は要らない。

ハット・パスの購入はインフォメーション・センターで。ここでインテンション・カード(入山届)を書いて提出しておく。干潮の時間も確認しておくといい。どのハットも海岸沿いにあるので、潮が引いていればピピヤコックルズ、マッスル、パウア、キャッツアイなどの貝をどっさり採ることができる。

同センターには24時間アクセスできる場所にコインロッカーがある。また1日\$1で地形図のレンタルもしている。Topomap "Halfmoon Bay" (260-D48, E48&F48) 1枚でRakiura TrackとNorth West Circuitのすべてをカバーしている。島にあるもうひとつのトラックSouthern Circuitまで含むにはもう1枚Topomap C49&D49が必要。

インフォメーション・センターはちょっとした資料館になっている。できればもうひとつRakiura Museumも覗いておきたい。島の歴史や自然について展示してある。漫然とトラックを歩くのとは違った視点が持てると思う。入館料\$1。営業時間は月から土曜日が10時から12時、日曜日は12時から2時まで。

港の近くのゼネラル・ストアが島唯一の店。値段は思ったほど高くはなく、品数は意外と整っていた。インバカーゴのスーパーマーケットで食料を買いだめしておくのは基本だけど、たとえ手ぶらでいっても問題ない。ガス・カートリッジも各タイプ置いてある。飛行機にはガス・カートリッジを持ちこめないために、島の宿には使いかけの缶がたくさん放置されているからそれを拝借するという手もある。

トラック・ダイジェスト -1997年12月11日～13日

「スチュワート・アイランドのランピングはドロの中を歩くようなもの」というのは有名な話。しかしほとんどが木道になっているラキウラ・トラックはほとんど意識しないで歩ける。唯一ドロで苦労したのは歩き始めてすぐのLittle Riverのあたり。湾を巻くように森の中の斜面を歩く部分で、ドロの中に隠れた木の根っこで滑って何度も転びそうになった。もし干潮なら、海に石を並べて作った橋があるので、それを探したほうが楽。

朝一番の飛行機でスチュワート島に入り、その日のうちにバングリー・ハットへ向かった。

1日目 Halfmoon Bay - Port William Hut 4時間
Port William Hut - Bungree Hut 2時間

1日目は海岸を歩いたり森に入ったりと多少の変化がある。またところどころに昔の林業機械の残骸(遺構として保存しているらしい)が残っていたりする。

先に書いた変則プランで行く場合、Port William Hutの先はグレート・ウォークではないので、次第に道が悪くなっていく。木道がなくなり、本来のドロドロの地面が剥き出しになる。あちこちに誰かが「ハマってしまった」あとがたくさん見受けられる。そういうところでは探せば泥地を迂回する巻き道ができていますので、注意して歩いていればひどく足を汚すことはない(雨が続いた後はどうなっているか知らない)。しかしぼくも1回油断してハマってしまった。くるぶし程度で済んだが、ときには腿あたりまで行くこともあるとか。

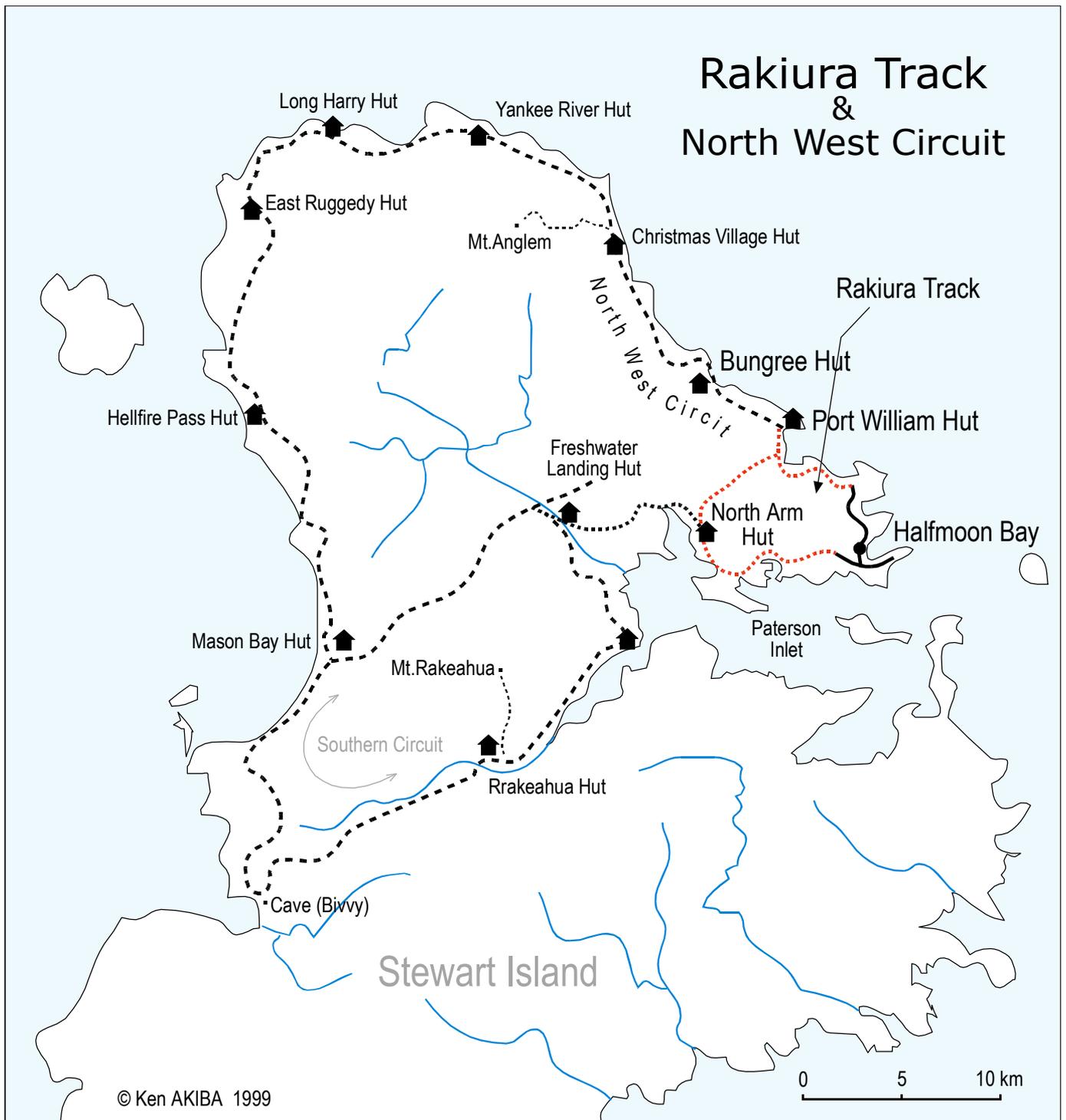
2日目 Bungree Hut - Port William Hut 2時間
Port William Hut - North Arm Hut 4時間

ふたたびもと来た道に戻る。Port William Hut近くの分岐から、山を越えて反対側の海岸まで行くが、道はすべて木道と階段。ずっと森の中の単調な道が続く。途中で物見やぐらのようなLookout(展望台)があるが、中途

半端な高さで景色はいまいち。それほど急ではない山を下り、North West Circuitからの分岐を過ぎるとNorth Arm Hutはもうすぐだ。干潮のとき、ハット近くの浜で大粒のコックルスがザクザクと掘れる。ただしこの貝は砂抜きが必要。

3日目 North Arm Hut - Halfmoon Bay 3時間20分

North Arm Hutから出発地点のHalfmoon Bayの集落へ戻る。森の中からときどき海が見えたりして、2日目より多少は変化がある。それでもタラタラという感じで、Halfmoon Bayへ道が続いていく。



第4章 ニュージーランドの温泉

ニュージーランドは日本とおなじ火山国だ。北島全土、また南島のサザンアルプス周辺にサーマル・エリア<Thermal Area>とよばれる地熱地帯が点在している。

地熱、とくれば温泉。もちろんニュージーランドにも温泉がたくさんある。有名どころではやはりロトルア<Rotorua>だろう。長期旅行で風呂が恋しくなった日本人がロトルアに流れるという話をよく聞く。

ただ、残念なことにニュージーランドの温泉施設は、趣もへったくれもないような温水プール風のところが多。またニュージーランド人の体感温度にあわせた湯は日本人にはぬるく感じる。なかには北島のテ・アロハ<Te Aroha>や南島のマルイア・スプリング<Maruia Springs>のように日本人でもじゅうぶんに納得できる施設もあるが、そういう場所は少ない。

なによりおもしろいのは山中で手つかずで放っておかれている天然温泉だ。山のなかでひと知れずひっそりと湧きつづける温泉、町はずれの小川の水が全部温泉だった、なんて場所があちこちにある。

ここではそんな野湯を含め、ぼくが旅しているあいだに知ったニュージーランドの温泉についてまとめた。紹介する場所は3章「コース・ガイド」と重複する部分もあるが、ここでは温泉という観点で改めて書いている。相互に参照してほしい。

温泉で感染する病気

ニュージーランドの天然温泉にいくと、しばしば「湯に顔をつけるな」という警告の看板を見かける。原発性アメーバ性髄膜脳炎(Amebic Meningitis、正式にはPrimary Amebic Meningoencephalitis)に感染する可能性があるからだという。1965年以来、世界で180例ほどしか報告されていない珍しい病気だが、感染すると発症は急で、症例ではほぼ5日後に死

亡している。原因は淡水中の特定のアメーバで、温泉の湯に顔をつけると、鼻粘膜から入り込んで、嗅神経にそって脳に入って急速に死にいたる。まれに耳からも感染するという。効果的な化学療法もなく深刻な病気といわざるを得ない。

原因となるアメーバは泥のある生ぬるいところに発生しやすい。また土壌にいるバクテリアを餌にしているので、整備されていない天然温泉での感染確率が高い。きちんと整備されたコンクリート造りの温泉なら比較的安全と言われている。

このアメーバはNZのあらゆる温泉から発見されている。例外は北島東部の<Morere Springs>や西部の<Te Puia Springs>。高い濃度の塩分が含まれているからだと考えられている。

もっとも発生例が少ないことからわかるように決して感染性の高い病気ではない。意識的に温泉にもぐったりしなければ大丈夫だ。過度に恐れる必要はない。

-Summary-

次に載せる地図は、ぼくがこれまでに見つけたニュージーランドの温泉の一覧だ。すこし大きめの太字で書いた場所は実際に現地へ行って確認している。その他は文献から見つけたもの。

天然温泉と書いてあるのは、手掘り温泉もしくは川が全部温泉というような場所だ。

次ページから、各温泉を紹介していくが、まず実際に自分で足を運んだ温泉を北から順に、ついで未確認のものを同様に並べてある。

まず、お勧めの温泉をざっと紹介しておく。

まず誰でも気軽に行くことができるとしたらタウポ<Taupo>のホット・ウォーター・ストリーム<Hot Water Stream>だろう。タウポの町から歩いて1時間ほどのところにある温泉の川だ。誰でも気軽に行か



れる。

車など自分の足があるなら、タウポとロトルアの間あたりにある温泉の川 ケロセン・クリーク <Kerosen Creak> が静かで雰囲気も良い。

山小屋泊まりの用意と覚悟があれば、コップランド・トラック <Copland Track> のウェルカム・フラット・ホット・プール <Welcome Flat Hot Pools> がいちおし。温泉も景色も共に最高で年々人気が高まっている。あと数年もすればかなりポピュラーになるだろう。

テントを持っていて天候が問題なければ、オテハケ・ホットスプリング <Otehahe Hotsprings> はサンクチュアリのようなすばらしい温泉付きキャンプサイトだ。

北島のケタタヒ・ホットスプリング <Ketetahi Hot Springs> は、誰でも行かれて日帰りも可能だが、湯が泥水のようなので必ずしも万人向けではない。

ジュリア・ハット <Julia Hut> の温泉は、ルートファインディング・スキルが必須。着くまでに2日はかかる。気軽な気持ちで行くと非常に危険。温泉は雨が降ると川に水没する。

<Harper Pass Route> 上のフルヌイ・ホットスプリング <Hurunui Hotsprings> はたどり着くのに3日は必要。最寄のハットまで1時間半とちょっと不便。ルイス・パス <Lewis Pass> 方面からアクセスすれば、天候に関係なく誰でも行かれる。

各 論

Hot Water Beach

ホットウォーター・ビーチ

北島コロマンデル半島の東海岸の砂浜からわく温泉。干潮のとき砂を掘ると自分だけの湯船をつくることができる。

期待していったのだが、ちょっとがっかりだった。ぼくの想像では浜のどこを掘っても温泉が出るのかと思っていた。でも実は源泉は1ヶ所しかない。(2つあるらしいとも聞くが)

源泉部分の砂からはゴボゴボと熱湯が染み出している。そのままでは熱すぎるので、すこし離れた場所を掘ってプールをつくる。遠すぎると水しか出な

いので、いい湯かげんの場所がかぎられる。場所的に作れるプールの数は1~2人用で4、5ヶ所。

行くのが遅いと適温の場所はない。源泉の位置は波打ちぎわぎりぎりなので、潮の具合によっては干潮ピークの前後1時間しかアクセスできない。(一般には前後2時間といわれている)

ぼくがいったのは日曜日だったせいか、干潮のピークジャストに着いたときにはすでに人でいっぱいだった。場所をとれなかった人がビーチでごろごろとふて寝をしていた。

砂なのであまり深く掘ることはできず、体を温めるとかのんびりつかるといふ雰囲気はできない。「へえー、本当に砂からお湯がわいてるんだ」という土産話でいどのもの。全身をつけることなどとうていできないので、寒い時期はつらいと思う。

引潮 <Low tide> の時間はかならず調べていくこと。ビーチの入り口にあるモーターキャンプ兼売店の入り口に張りだされているが、ちかくの町のビジターセンターや宿で教えてもらえる。新聞にも載っている。引き潮の2時間以上前には着いているようにしたい。

シャベルは必携。他の人と争ってプールを作ることになるから、手でゆっくり掘るなんて考えないほうがいい。ビーチ入り口の売店でレンタルしている。料金は不明。ちかくに宿をとればそこでも貸してもらえる。

このビーチは辺鄙な場所にある。宿泊施設はモーターキャンプ <Hot Water Beach Motor Camp & Thermal Pools : 866-3735> が一軒。テントサイトは一泊\$9。この料金で施設内にある個室のスパを自由につかえる。そのスパの湯がホットウォータービーチの温泉であるかどうかは定かではない。鳥の声が一日中響くなかなかいいロケーションだが、キッチンに冷蔵庫がなく不便。

そのほか最寄の町は <Hahei>。小さい町ながらスーパーマーケットの <Four square>、ガソリンスタンドがある。宿は <Cathedral Cave Backpackers> (866-3889) が評判がたかい。

Te Aroha

テ・アロハ

北島のハミルトンから50キロほど北東に位置するテ・アロハ <Te Aroha> という小さな町にある整備さ

れた温泉。すべてプライベート・スパで総木造りの日本人好みの仕上がり。もちろん素っ裸で入れるし、湯温も調整可。

存在感のあるお湯に特徴がある。無味無臭、無色透明だけど、入るとやけに肌がヌメヌメする。石鹸で体を洗ったあといくら流しても落ちた気がしない。きつとアルカリ度が相当に強いのだろう。ちょっと不思議な感覚だ。

温泉施設は町のほぼ中心の広場<Domain>のなかにあり、営業は昼12時から夜9時まで。時間制で30分\$6。ユースの会員証の提示で\$5になる。すべて個室で数がかぎられるため、とくに週末は予約をしておいたほうがいい。この施設の管轄はDOC(884-9303)だったと思うが、念のため地元のビジターセンターの連絡先は884-8052。

Kerosen Creek

ケロセン・クリーク

ロトルア<Rotorua>からタウポ<Taupo>へ向かう途中にある温泉の川。流れる水がすべて温泉というのがおもしろい。まわりは森林にかこまれ、小さな滝なんかもある。湯温はすこしぬるめ。

場所はロトルアからタウポへ向かうSH5(国道5号

線)の途中、SH38への分岐をすぎて最初の左の小道に入る。分岐をすぎたらスピードを落として注意深く探してほしい。もしかしてこれかなと思ったら、たぶんそれだ。案内板はなく、まわりを草に覆われてわかりにくい。<Waiotapu Thermal Area>まで行ってしまうと行きすぎになる。

その小道(程度のいいダート道)を入れて数キロ行くと右手に車を止められそうなスペースと「焚き火禁止」の目立つ看板がある。車を降りて奥へ入ると川に沿って続く遊歩道があるはずだ。その川がケロセン・クリーク<Kerosen Creek>で手を触れてみればすぐわかる。遊歩道に沿ってしばらく下流にくだると、川幅が広がって小さな滝がある。そこが入浴ポイント。

ぼくがいったのは天気の良い日曜日だったが、2時間ほどいても他に人は誰もこなかった。ピクニックに適した芝生の広場なんかもあるのだが、あまり知られていないのかもしれない。

ごみ箱はあったが、トイレ、水道等の施設は見あたらなかった。更衣室もないが、着替えられそうな木陰はたくさんある。テントを張れる場所もあるが、公式にはキャンプ禁止になっている。

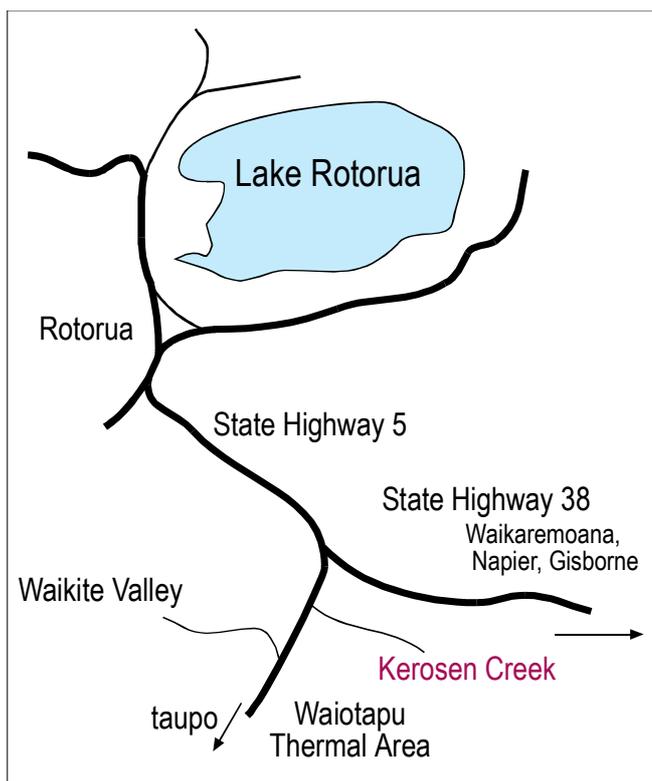
Hot Water Stream, Taupo

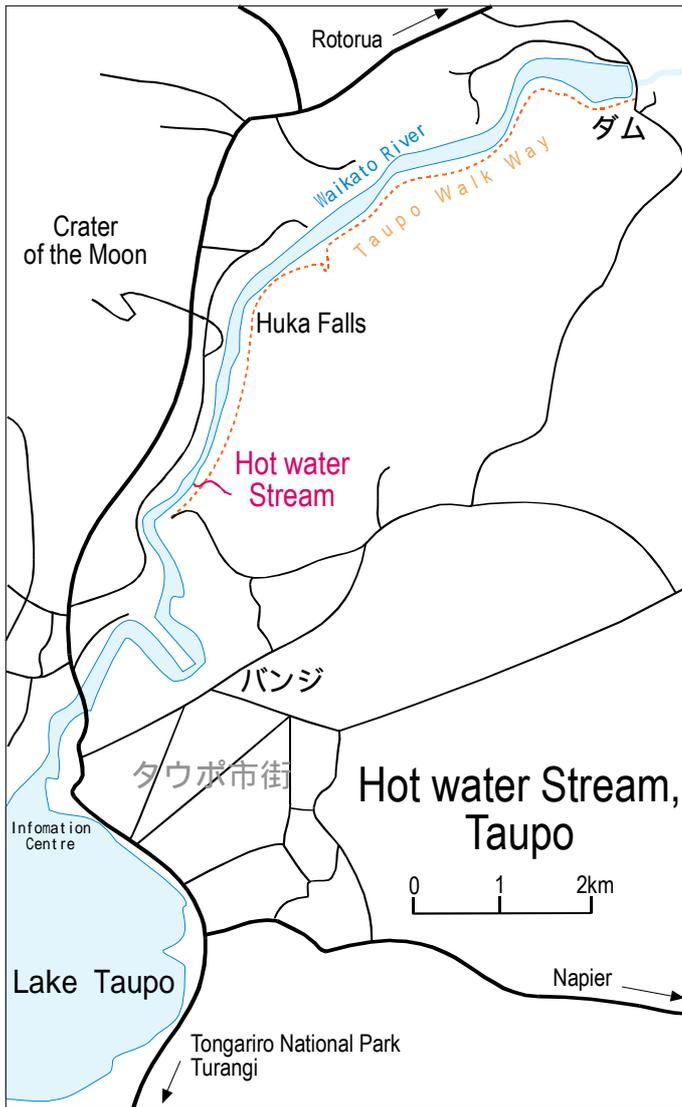
ホットウォーター・ストリーム、タウポ

正式な名称はわからないが、タウポ<Taupo>の町のすぐちかくに温泉の川がある。ワイカト・リバー<Waikato River>沿いでフカ・フォール<Huka Falls>へ続く遊歩道タウポ・ウォーク・ウェイ<Taupo Walkway>のスタート地点あたりでワイカト・リバーに流れこむ小川がそれだ。

遊歩道につづく道路のどんづまり(袋小路になっている)のカーパークに車をおいて、ひろい芝生の広場をぬけて川ぞいにでると遊歩道が始まる。すぐに橋をわたるが、その下を流れのが温泉の川。気温のひくいときには湯気があがっているのですぐわかる。

湯温はなんとか触れるくらいはかなり熱め。ワイカト川との合流付近でちょうどいい温度になっている。適温の場所選びがなかなか微妙なところで、水の上の層と下の層ではっきり温度が違うからむずかしい。四六時中水を掻きまわしているか、腕で体を水面近くに浮かせて入るのがベスト。





昼間は水着を着た近所の子もたちが遊びにきていてけっこうにぎやかだ。もちろん遊歩道を歩く観光客も多い。あたりに着替えられるような陰もないので、昼間に入るのは男性に限られるかもしれない。

お勧めは夕方から夜、日が暮れたころ。あたりは真っ暗で満天の星空の下、優雅な気分で湯につかれる。着替えも闇にまぎれてそれほど気にならない。しかし、そんなことは誰もが考えるようで1時間もいれば1組2組くらいは人がくるのでそのつもりで。

カーパークから、だだっ広い芝生の広場を抜けて10分以上歩く。ところどころに杭があって道しるべになっているのだが、夜の闇の中ではわかりにくい。はじめて行ったとき、帰り道で迷ってしまった。懐中電灯は必携だが、注意して歩いてほしい。

温泉のすぐ脇まで車で乗りつけるルートもあるようだが、ぼくは知らない。夜に行くのならそっちのほうがいいと思う。宿の人かインフォメーション・セ

ンターで聞けば教えてくれると思う。

歩いていく場合、町から4,5キロなので1時間弱で着けると思う。でも夜は人のほとんど通らない真っ暗な道だからちょっと物騒かもしれない。

夜に行くとわかりにくいけど、温泉の脇に看板が立っていて、「原発性アメーバ性髄脳膜炎に感染する恐れがあるから、湯に顔をつけるな」と書いてある。注意してほしい。

Morere Hot Springs

モレレ・ホットスプリングス

北島の東海岸ギズボン<Gisborne>とワイロア<Wairoa>の中間地点、SH2沿いの山間にある整備されたサーマル・プール。DOC直轄の施設で、森の中の広い園内にいくつかのプールとウォーキング・コースが作られている。

園内の奥まったところに温泉のプールがある。まわりはネイティブ・ブッシュで環境はいいのだが、浴槽はステンレスで趣はぜんぜんない。温度はぬるいのとやや熱めの2種類ある。

営業時間は朝10時から夕方5時、夏の週末は夜8時まで。入園料は\$3。プライベート・プールを使う場合は\$4。

園内は広々としていて、入浴目的というよりは、温水プールのあるピクニック・エリアというかんじで、弁当を持って行って一日のんびりするような場所だった。休日はたくさんの家族連れでにぎわっている。

Ketetahi Hot Springs

ケタタヒ・ホットスプリングス

北島、トンガリロ・ナショナルパーク<Tongariro National Park>のデイ・ウォーク・コース、トンガリロ・クロッシング<Tongariro Crossing>の途中にある未開発温泉。荒涼とした山の斜面にあり、天気がよければ<Lake Rotoaria>や<Taupo>を眺めながら湯につかることができる。

天然温泉のなかでは比較的アクセスが容易で誰でも行かれるが、いろいろと問題があるので現在は人には勧めていない。

問題点の第一は危険地帯にあるということ。あたりは温泉というより地熱帯で火山岩でゴツゴツの地面のあちこちから煮えたぎった湯が沸いている。不

用意に足を踏み入れると大やけどをする危険がある。

第二点は入ると泥だらけになること。湯の花というのだろうか、底に真っ黒な堆積物、ドロがたまっている。上澄みだけを見ているときれいな湯なのだが、一度入るとそれらが舞い上がって泥水状態になる。タオルについた汚れは石鹸で洗わないと落ちない。

最大の問題は「公式には温泉への立ち入りが認められていない」ということ。これにはニュージーランドの国立公園誕生にまつわる重要なエピソードが関係している。

もともとトンガリロ地方は先住民マオリの聖地だった。ヨーロッパ人の入植後もこの地域はマオリのものとして守られつづけた。しかし時の族長は考えた。「この聖地をいつまでも守りたいが、後々には子孫が土地を切り売りしていつかはなくなってしまわないか」。そこで族長は一大決心をしてこの地域を永代保全を条件に国に譲り渡すことにした。そうしてニュージーランド初の国立公園が誕生した。現在の国立公園整備に力を入れているニュージーランドの原点はまさにトンガリロにあるといえる。

今でもトンガリロがマオリの聖地であることに変わりはない。現在のトランピング・トラックは特別に通行が許可されているというのが現状で、温泉付近への立ち入りは許されていない。近年、トランパーのマナーの悪化に伴って、トンガリロを入山禁止にしようという動きもある。罰則がどうのこうのという問題ではなく当然の敬意として十分留意したい。

関連項目 [Tongariro Northern Circuit](#) p.47

Maruia Springs

マルイア・スプリングス

南島の西と東を結ぶSH7の中間あたりに位置する整備された温泉。日本の風呂が懐かしくてしかたないという人には涙ものの日本式の温泉が整っている。

最近 "Utaseyu" (打たせ湯) もできた露天岩風呂と <Japanese Style Bath> といわれている内湯がある。天気によって色が変わるという硫黄を含んだ湯で、露天風呂の温度は日本人好みのやや高め。

内湯はややぬるめで、作りは日本のホテルの大浴場そのもの。腰掛けと桶が用意されていて、「湯」「水」などとかかれた日本製シャワーまでついている。

露天風呂は水着着用だが、内湯は体を洗う場所もかねているため、裸でかまわない。ただ女湯のほうはいきなり素っ裸で入ったら、日本人を含むほかの入浴者がみんな水着を着ていて恥をかいたという話も聞いているのでご注意ください。

ここまで日本式にこだわっているのは日本の企業の資本によるからだ。日本の公式の温泉成分表まで掲げてあったのは笑えた。

この <Maruia Springs> には町があるわけではなく、<Maruia Springs Thermal Resort> (03-358-5390: 日本語問い合わせ先) という施設がぼつんとただ一軒だけある。中にバーと和食レストランがあるが売店はない。割高だがガソリンも買える。

宿泊はホテルとしての部屋(\$95~)と、キッチンをついたバックパッカーズ・ユニット(\$20)、テントサイト(\$11)がある。料金に入浴料が含まれていて、外来入浴だけだと\$6(学割もあるらしい)。

はじめて行ったとき、ぼくはテントサイトに泊まったが、設備は最低だった。整地されたただ広い広場にエレメント剥き出しの水道がひとつあるだけ。キッチンや炊事場はない。トイレは露天風呂のを使えと書かれていた。

キャンパーバンで乗りつける人にはいいのだろうが、モーターキャンプのつもりで来たふつうの旅行者は炊事をどうするのだろう。ぼくはたまたま持ってきていた自分のクッキング・ストーブを使って調理した。電子レンジや冷蔵庫のあるキッチンを備えたキャン場があたりまえのNZの事情を考えるとちょっと納得できなかった。\$11で入浴料込みというからにはそんなものなのかもしれないが。

マルイ・アスプリングには5、6回行っているが、まともに泊まったのは最初だけで、以後は5キロほど先に行った川原でテントを張っていた。

なんだかんだいっても、温泉自体は文句なしに良い。クライストチャーチから190キロくらいで、車で2時間ちょっと。日帰りも可能だ。バスだとネルソン <Nelson> 行きが途中で停まるらしい。

Hurunui Hot Springs

フルヌイ・スプリングス

トランピングでアクセスする天然温泉。南島の東西を結ぶ2つの幹線道路SH73とSH7をつなぐ長いトレッキングコース、ハーパーパス・ルート <Harper

Pass Route>の途中にある。アーサーズ・パス<Arthur's Pass>とルイス・パス<Lewis Pass>をつなぐトラックといったほうがわかりやすいかもしれない。

レイク・サムナ<Lake Sumner>にちかいフルヌイ・ハット<Hurunui Hut>から歩いて1時間半ほどアーサーズ・パス方面へ行ったところに温泉が湧いている。

滝のような傾斜のきつい小川を流れる水がすべて温泉で、途中をせき止める小さなプールが作られている。温度は適温で均一。深さも十分あり、ゆったり入るなら2人、無理すれば4人は入れる。

アーサーズ・パス方向、ルイス・パス方向どちらから歩いてもいいが、温泉はちょうどルートの中間付近にあり、着くまでにどちらからも3日はかかる。<Haper Pass>(峠)を境に、アーサーズ・パス方面は大部分がルートで、川ぞいを歩く。大雨のあとは通行困難になる。ルイス・パス方面はトラックでほとんどがファームのような牧草地。雨でも問題なく歩ける。中級者程度の力があれば問題なく歩けるだろう。

Otehake Hot Springs

オテハケ・ホットスプリングス

前出のハーパーパス・ルートから分岐していく手掘り天然温泉。入浴できるかどうかは気象条件によるが、うまくいけば快適度の高い最高の温泉。

アーサーズパスからグレイマウス方向へ20キロほどのところにあるエイケンズ<Aickens>からハーパーパス・ルートにしたがって歩き始める。6時間ほどでオテハケ・リバー<Otehake River>の中州に湧いている天然温泉につく。中州というより小さな島で、森のようになっているのでテントを張れる場所がある。ここにつくまでそれほどの標高差はないが、川の渡渉が多く、日照りが続いた時でさえひざ以上もも程度の水位がある。雨が降るとすぐに渡渉不能になってしまう。

温泉は透明な硫黄泉で、源泉はやや熱目。脇をちょろちょろ流れている川の水をうまく引き込んで調整する。地面は掘りやすく、座って肩くらいの深さになる。川の中州という隔離された場所、まず人は来ないし、テントサイトもなかなかいいかんじで気分

がいい。ただしサンドフライがうるさい。

水際にあるので川が増水すると温泉は水没してしまう。テントサイトは安全だが、閉じ込められて停泊を余儀なくされることもある。十分の食料を持っていくこと。

[行き方] エイケンズ<Aickens>からオチラ・リバー<Otira River>を渡渉し、しばらくタラマク・リバー<Taramaku River>右岸に沿ってさかのぼる。やがて右手に<Lake Kaurapataka>へ向かうトラックが始まるので入る。<Lake Kaurapataka>の西端でトラックは分岐する。つり橋(Footbridge)方向ではない右へ行くのだが、めったに人が行かないため、やや分りにくい。木に"Otehake"と書かれた古ぼけたプレートがかかっている。このトラック最初がいいが、おしまいのほうになると、崖のようなところを下りる。荷物が重いときついかもしれない。ところどころに赤い四角いプレートがつけられている。崖を下りるとオテハケ・リバー<Otehake River>に出る。あとはオテハケ・リバー沿いを上っていただけだが、3,4度崖に行く手を阻まれるのでそのたびに对岸へわたる。増水していなければ膝から腿くらいの水位。オテハケ・リバーに出てから温泉まで1時間ほど。

Julia Hut

ジュリア・ハット

ワイマカリリ・ハーマンパス・ルート<Waimakariri-Harman Pass Route>はアーサーズ・パス・ナショナルパークの代表的なトランピングコース。2泊目のジュリア・ハット<Julia Hut>から歩いて15分ほどのタイポ・リバー<Taipo River>沿いに温泉が湧いている。

目の前に清流が流れ、狭い谷から見上げる空には雲が流れていく。あつくなったら川に飛び込んで、また温泉に浸かる、の繰り返し。

川の流れギリギリのところ源泉があるために、すこしでも増水していたら入浴はできない。近くにさびついたシャベルが転がっているので、川床を掘って自分でプールを作る。大きい岩が多いのであまり深く掘れない。なんとか寝そべて全身が浸かる程度。地面や岩の割れ目からすこしづつ染み出している湯は透明でとてもきれい。すこし硫黄のにおいがする。温度は50 くらいで川の水をうまく

引き込んで調整する。

温泉までの道のりはかなり厳しい。このコースはアース・パス地方の名前のついたコースの中では難易度が高いほうで、歩く人は少ない。ルートのほとんどは目印もなく、地図を読む能力は必須。川の渡渉も多く、天気によっては停滞せざるを得ないことも多い。

Welcome Flat Hot Pools

ウェルカム・フラット・ホットプール

[温泉概要] 南島の西海岸、<Fox Glacier>の26キロほど南からスタートするコップランド・トラック<Copland Track>を歩いて6時間の天然温泉。すぐちかくにある<Welcome Flat Hut>というDOCの大きなハットとあわせてとても快適な場所。食料を多めに持って数日間のんびりするつもりで行くといい。

岩盤を掘っただけのプールに源泉から流れ出した湯がたまっている。プールは4つあって源泉からの距離によって温度が違う。源泉は約60度でさわれないくらいに熱い。いちばん下の広いプールがぬるく入りやすい。日本人以外は間違いなくこれを利用する。もう一段上のプールは日本人ならなんとか入れる熱さ。

湯はやや黄色がかった透明。泉質は不明だが、ときどき鉄くさいにおいと、かすかな硫黄の匂いがする。プールの底には緑白色の目のこまかいドロがたまっていて、最初は面食らうが気にしてはいけない。入ると舞い上がるけどすぐに沈む。湯をあがるとき

にはコッヘルなどで上澄みをすくって流せばいい。

目の前にはシェラ山脈の岩肌が迫り、左手の木々の向こうには、晴れていれば雪をかぶったピークと小さな氷河が望める。行ったのは2月末で夏の終わりだったが、晩秋や早春の雪が残っているところに行ったらさらに景色も格別なのだろう。10月から4月までアクセス可能。

温泉自体もまわりの景色もよくハットの居心地もいいので、体力に余裕があったらビールなんかを持って行って数日くつろぐことを勧める。ハット近くの小川の水は冷たく、夏でもスカッとすていでビールを冷やすことができる。

夏場の日中はサンドフライが気になるので、夕方から夜にかけて入るのがベスト。まわりの景色がだんだんとシルエットに変わるのを眺めながらときを忘れる。

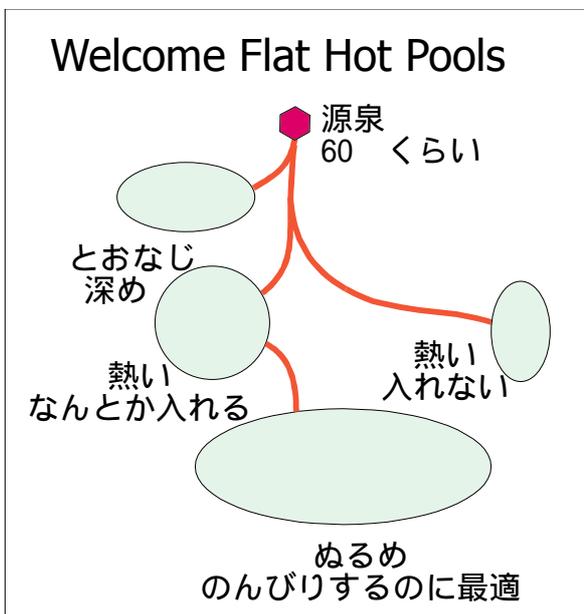
ここにも注意書きの看板があるが、石鹸などの使用は禁止。アメーバ性脳膜炎予防のため顔を湯につけないこと。

[注意] コースは川に沿ってをさかのぼっていくだけでアップダウンは少ない。でも足場が悪く歩行時間も長いのでかなり疲れる。6時間というのは慣れた健脚な人の場合で、ほとんどの人は7時間かそれ以上かかっているようだ。とりあえず8時間は見ておいたほうがいい。大雨の後でなければ特に危険な箇所はないが、致命的にならないでいどに迷いやすい箇所が多々ある。

日本での経験がなく、まるきりの初心者にはちょっと危ないかもしれない。誰かがまちがった踏み分け道もいくつかあるし、水溜りで道が寸断されていることもある。トラックには木につけられた三角形のマーキングや岩にかかれたペイントがあるので見失わないこと。やはり地図を読めたほうが安心だ。

ウェストランド地方のDOCオフィスで50¢で手に入るリーフレット<The Glacier Region - Copland Track to Welcome Flat and Douglas Rock Huts>は最低限熟読しておくこと。フォックス・グレイシア<Fox Glacier>あたりのDOCビジターセンターの掲示板には週間天気予報やトラック・コンディションの情報があるのでチェックを忘れなく。地形図はTopomap H36 <Mount Cook>。\$12くらい。

[アクセス] フォックス・グレイシアからSH6を南へ



26キ口、<Karangarua River>をわたるすこし手前の小道を左に入る。"Copland Track"と書かれた看板があるが、奥まっついてはわかりにくい。フォックス・グレイシア方面から行くと、むしろ右手の "Historic Place" の看板の方が目につくはずだ。その小道を数百メートル行くと、案内板の立っているカー・パークにつく。

地図上でトラックはラフ・クリーク<Rough Creek>上流の橋を通ることになっているが、水量が問題なければ直接川を渡ったほうがはやい。対岸にオレンジ色の大きな円のマークがあるのでそれを目印に。ぼくは靴をぬいで渡ったが、安全面からいえば靴を履いたままのほうがいい。

この先、おなじようにルートのすこし上流に橋がかかっているクリーク<Creek>(沢)があるが、それらは基本的に増水時用のルートで、ほとんどは靴を濡らさず岩づたいに渡れる。

例外で注意が必要なのはウェルカム・フラット・ハット<Welcome Flat Hut>の30分ほど手前の<Shiels Creek>。ここは傾斜のきつい大きな沢で橋がかかっていない(地形図には記載があるが実際はなかった<1997年>)増水していて通行不可能なら、この先に進むことはできない。

引き返すしかないのだが、そのすこし前にシェルターがあり、時間的に戻れないときは泊まることができる。シェルターといってもただの岩屋で、かろうじて雨が防げる岩陰でしかない。快適な宿泊は望めそうもなくビバークという言葉がぴったりくる。最初からここに泊まることはあてにしないほうがいい。

同じ理由で帰りにShiels Creekを渡れない可能性もあるので、1日か2日は余分に泊まれるくらいの食料は必ず持っていきたい。

ぼくが行ったときは天気はよかったのだが、2泊して、帰る日になったら激しい雨が降りだした。ほかの2組の宿泊者は雨の中を無理して帰っていったが、食料が余分にあっただぼくは迷うことなく連泊した。誰もいなくなって思いのほか快適な時間を過ごすことができた。雨の日のテントは最悪だが、ハット泊となると雨もまた楽しい。

その他の温泉

この他、行ってみたかったけど行けなかった温泉、旅行中に人から聞いた温泉などいくつかある。これらは自分が行っていないだけに自信をもって書くことはできないのだけど、参考までにぼくの知っている範囲で書いておく。

[Ngawha Springs]

北島の北端、Bay of islandsのやや内陸、Kaikoheより8キ口のところにある。2軒の施設があり、Wairiki Poolsが\$2、Ngawha Spaが\$2.50。

[Great Barrier Island]

Great Barrier Islandはオークランドの北88キロに位置する島だ。あまり開発のされていない島で、島内にいくつものトラックがある。そんなトラックの途中にKaitoke Hot SpringとPeach Tree Hot Springが湧いている。いずれも天然温泉で、Kaitokeのほうは温度が熱すぎることもある。後者はカウリの木の伐採キャンプの跡地にあり、コンスタントに適温で快適に入れるらしい。またその間にも入浴可能な温泉がある。

[Parakai]

オークランドの北西の町<Helensville>から4kmのところ<Aquatic Park>がある。屋内屋外のホットプールを持つ、レジャー施設でウォータースライダーなどもある。朝10時から夜10時まで。入場料\$9。オークランドから、Helensville方面へのバスがあり温泉の前で停まる。

[Waiwera]

オークランドの北48キロの海岸沿いの町。温泉地として有名。大きなレジャー施設があり、温水プール、スパ、スライダーなどがある。平日は朝9時から夜10時まで、金土は夜11時までの営業。入場料\$12。プライベート・スパは\$10。オークランドから895番のバスで行かれる。

[Miranda Hotsprings]

Mirandaは北島コロマンデル半島のテムズ<Thames>の対岸に位置する町。ホット・プールやキャンプ・サイトを含んだ集合施設があり、営業は朝の9時から夜9時まで。入場料は\$5。

[Te Puia Hotsprings(Kawhia)]

Kawhiaは北島ハミルトンの南西の港町。町から約3

キロ離れた Ocean Beach に Te Puia Hot Springs が湧いている。干潮のピークの前後2時間に限られるが、コロマンデル半島のホット・ウォーター・ビーチと同じく、自分で砂を掘って湯船を作れる。

[Kaweka Hotsprings]

山中に湧く天然温泉で、トランピングによりアクセス可能。北島のネイピア<Napier>の内陸60キロほどのところからスタートする。最初は4WDトラックで、Mangatutu Hot Springs のピクニックエリアまで続いている。ピクニックエリアからトラックが始まり、2、3時間で20人収容可能な Te Puia Lodge につく。さらに橋を渡り40分ほど行ったところにもうひとつの温泉、Mangatainoka Hot Springs がある。コースの難易度は easy/medium。(参考・地形図 Kaweka Forest Park 274-12 もしくは Topomap U-20 Kaweka)

[Tokaanu Thermal Park]

北島の Turangi の北西5キロほど。地熱帯にある公園<Tokaanu Thermal Park>に煮え立ったドロの池などがあり、入場は無料。ホットプールを利用するには\$3。プライベート・プールは\$4。無休で朝10時から夜9時まで。

[Awakeri Hotsprings] 北島の Wakatane からロトルアへ向かう SH30 を16キロ行ったところにある。ホリデーパークが併設されている。

[Hanmer Springs]

南島でもっとも有名な温泉で、クライストチャーチから北へ135キロ、西海岸へ抜ける SH7 の途中から SH7A (7号線の支線 A の意) を10キロほど入ったところにある。Hanmer Springs Thermal Reserve (315-7511) の営業時間は朝10時から夜9時まで。入場料は\$7。

実はここには何度か足を運んでいるのだが、外からのぞくかぎりまったく魅力を感じなかったのどついでや入らなかった。

いつ行っても人が多く、子供たちのキャーキャー騒ぐ声が聞こえている。雰囲気はまるきりプール。硫黄のようなにおいこそするが、まったく温泉という雰囲気ではない。聞くところによると湯はかなりぬるめらしい(最高で40℃)。

このハンマー・スプリング周辺は広い Forest Park になっていて、ブッシュ・ウォーキングやホース・トレッキング、ラフティングやバンジージャンプもで

きる。宿も整っているのど、クライストチャーチあたりから週末に遊びに行くのには最適な場所かもしれない。

[Cedar Flat]

トランピングによりアクセスする天然温泉。南島の Hokitika から内陸へ30キロほど入ったところからスタートする。4、5時間ほどで Cedar Flat に到着する。ここには6人収容できるハットがあり、そこから歩いて15分ほどのところに温泉が湧いている。ハットにあるシャベルで自分で湯船を作る。コースの難易度は easy/medium。(参照・地形図 Topomap J-33 Kaniere)

参考文献一覧

- * Jim DuFrense&Jeff Williams, *Tramping in New Zealand*, Lonely Planet Publications,1982,1995 (3rd ed) & 1998 (4th ed)
- * Tony Wheeler&others, *New Zealand*, Lonely Planet Publications,1977,1996 (8th ed) &1999 (9th ed)
- * Mark Pickering & Rodney Smith, *101 Great Tramps in New Zealand*, Mark Pickering & Rodney Smith,Reed Publishing (NZ),1991,1998
- * *Bushcraft*, New Zealand Mountain Safety Council,1968,1995 (3rd ed)
- * *New Zealand Road Atlas*, NZ Automobile Association,1994,1996
- * Jane King, *New Zealand Handbook*, Moon Publications USA,1987,1993
- * *Let's Go New Zealand 1998* , Let's Go Publications USA,1998
- * Graeme Kates, *Arthurs Pass National Park Mountaineering Guide*, Self Publication, 1985,1998 (4th ed)
- * S.Brabyn & E.Bryant, *Tramping in the south island-Arthurs Pass to Mt.Cook*, Brabyn publishing, 1997,1999
- * *The New Zealand Oxford Paperback Dictionary*, Oxford University Press, 1998

- * *That's NZ 98-99* , GEKKAN NZ CO.,LTD.,1998
- * 滑田広志、*ニュージーランドハイキング案内*、山と溪谷社、1998
- * *地球の歩き方 - ニュージーランド編 98 ~ 99年版*、ダイヤモンドビック社、1986,1997
- * 池本健一、*ニュージーランドってこんなところ!*、新泉社、1997
- * おそどまさこ、*ニュージーランドに夢中! 旅ガイド*、山と溪谷社
- * 峯吉智子、*ニュージーランド楽園物語*、東京書籍
- * 川瀬勇、*ニュージーランドの素顔*、山手書房新書、1994
- * 佐藤圭樹、*ニュージーランドすみずみ紀行*、凱風社、1999
- * 敷島悦朗、*海外登山とトレッキング*、山と溪谷社、1996
- * 尾崎啓一、*トレッキング・ザ・ワールド*、千早書房、1990
- * 大鶴正満、*臨床寄生虫学*、南江堂、1978、1990
- * 吉田幸雄、*図説人体寄生虫学*、南山堂、1977、1996 (第5版)
- * 石崎達 監修、*新医寄生虫学*、第一出版、1988、1994
- * 森下哲夫 監修、*新寄生虫病学*、南山堂、1960、1988

その他、"New Zealand Wilderness" 誌、"New Zealand Geographic" 誌、DOC 発行の各種プロシユアーも参考とした。

更新履歴

1999年 6月 15日	試作版	・各章を別ファイルの形で試験的に公開
1999年 10月 1日	Ver 1.0	・全ファイルを統合し正式版として公開
1999年 12月 1日	Ver 2.0	・全テキストの見直し、コースガイドのレイアウト変更 + 写真増加、Abel Tasman Coast TrackとWaitutu Trackの文章を増強
1999年 12月 10日		・多少の不具合修正と構造修正によるダウンサイジング 2.60MB 2.57MB
2000年 1月 12日	Ver 2.1	・各地図のテキストを見やすいように改善。ならびに大幅なダウンサイジングに成功 2.57MB 2.05MB
2001年 1月 10日	Ver 2.5	・1章に「知っておきたいフィールドの危険」を追加。その他1・2章を中心に、古くなった情報の改訂。



Special thanks to:

Eiko SATO

Tsukasa MIYATA

George ONO

NATSUHARA family

Professor TANABE